千葉県八千代市

勝田大作遺跡

－埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成18年度

株式会社　北一
八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

勝田大作遺跡

－埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成18年度

株式会社　北一
八千代市遺跡調査会

凡　例

1　本書は，株式会社　北一を事業主体とする病院建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県八千代市勝田字大作622-2番ほかに所在する勝田大作遺跡（遺跡番号 八千代市No254）である。

3　発掘調査から報告書作成にいたる業務は，株式会社 北一の委託を受け，八千代市遺跡調査会が実施したものである。

4　発掘調査及び整理作業は，下記の期間に実施した。

確認調査	昭和60年8月1日～昭和60年8月24日
本調査	昭和60年8月26日～昭和60年10月26日
基本整理作業	昭和60年12月2日～昭和61年6月28日
本整理作業	平成18年7月24日～平成19年3月31日

5　確認調査から本調査に至るまで秋山利光が担当した。また，本書の執筆・編集も秋山が行った。

6　整理作業は，実測・トレース等を秋山・植田正子・立松紀代美，遺物の写真撮影を高屋麻里子が行った。また，土器実測及びトレースの一部は（有）日考研茨城に業務委託して行った。

遺構のトレースは原図または縮小した図面をスキャナで取り込み，コンピューター上で描画ソフトにより作図したものを用いている。

7　本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面，写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

8　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

第1図　国土地理院発行　1/50,000「佐倉」

第2図　大日本帝国陸地測量部発行　1/20,000「下志津原」

第3図　国土地理院発行　1/25,000「佐倉」

1/25,000「習志野」

第4図　八千代市発行　1/2,500 「八千代都市計画基本図」No28・No25

をそれぞれ，加筆・修正して使用している。

9　航空写真は株式会社コクサイに委託し，昭和60年10月22日に航空機により撮影したものである。

10　本書で呼称する遺構番号は，原則として調査時の番号と同一である。調査時に住居跡の一部として扱っていた04号住居跡P7については，整理時に新たに11号土坑の遺構名を付与している。また，出土遺物の番号については掲載順による挿図番号で表示しているが，遺物検索等の利便性のため整理番号もあわせて掲載した。

11　本書の遺構実測図における用例は，以下のとおりである。

(1)　図面の方位は，すべて磁北である。

(2)　基本土層は，調査現場では1層から順に記録しているが，本報告書掲載の段階でⅠ層表土層，Ⅱ層包含層など，Ⅲ層ソフトローム層と表現を統一することとした。

(3) 図面の縮尺は基本的に以下のとおりとした。しかし，編集の都合上必要な場合は適時変更し，図中に記載した。

竪穴住居跡 1/80　土坑・カマド 1/40

(4) 図中の一点鎖線は，人為的な床面の硬化範囲を示す。

床硬化面

(5) 図中の破線は，推定復元線を示す。

推定線

(6) 図中の網かけ等は，以下のことを表す。

焼土

粘土

炭化材

地山

カマド袖

カマド火床・炉

炭化粒子散布の範囲

貝層

撹乱

12　本書の遺物実測図における用例は，以下のとおりである。

(1) 図面の縮尺は基本的に以下のとおりとした。しかし，編集の都合上必要な場合は適時変更し，図中に記載した。

土器実測図 1/4　土器拓影図・土製品実測図 1/3　石器・石器品実測図2/3～1/4

(2) 遺物実測図中の網かけ等は，以下のことを表す。

赤彩

黒色処理

須恵器

13　発掘調査から本書の刊行に至るまで，以下の諸機関・諸氏にご指導，ご協力いただいた。記して感謝するしだいである。（敬称略）

千葉県教育庁教育振興部文化財課　八千代測量建築センター　中野修秀　常松成人

目　次

凡　例
目　次
挿図目次・表目次・図版目次
第Ⅰ章　遺跡と調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と立地 …… 1
　第３節　周辺の遺跡 …… 3
　第４節　確認調査の経過と成果 …… 6
　第５節　本調査の方法と経過 …… 8
　第６節　調査区の土層 …… 11
第Ⅱ章　縄文時代・弥生時代 …… 13
　第１節　縄文時代の遺物 …… 13
　第２節　弥生時代の遺物 …… 20
第Ⅲ章　古墳時代 …… 21
　第１節　古墳時代前期の竪穴住居跡 …… 21
　　01号住居跡　06号住居跡　07号住居跡　08号住居跡　09号住居跡　12号住居跡
　第２節　古墳時代後期の竪穴住居跡 …… 47
　　02号住居跡　03号住居跡　04号住居跡
　第３節　古墳時代の土坑 …… 61
　　01号土坑　03号土坑　04号土坑　05号土坑　06号土坑　07号土坑　08号土坑
　　09号土坑　10号土坑　11号土坑
　第４節　古墳時代の検出遺構とグリッド出土遺物 …… 71
　　20号遺構　21号遺構　22号遺構　23号遺構　24号遺構　25号遺構　26号遺構　12号土坑
第Ⅳ章　奈良・平安時代以降 …… 77
　第１節　奈良・平安時代の竪穴住居跡 …… 77
　　05号住居跡　10号住居跡
　第２節　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物 …… 83
第Ⅴ章　まとめ …… 85
　第１節　縄文時代 …… 85
　第２節　古墳時代 …… 85
　第３節　奈良・平安時代 …… 87
　第４節　土坑出土の貝 …… 87
報告書抄録 …… 巻末

挿図目次

第１図　勝田大作遺跡と周辺遺跡 …… 2
第２図　勝田大作遺跡周辺の迅速測図 …… 4
第３図　勝田大作遺跡周辺の地形図 …… 4
第４図　勝田大作遺跡と調査区域 …… 5
第５図　確認調査遺構検出状況 …… 7
第６図　勝田大作遺跡遺構配置図 …… 9
第７図　遺跡の基本土層 …… 11
第８図　縄文土器(1) …… 13
第９図　縄文土器(2) …… 15
第10図　縄文土器(3) …… 17
第11図　縄文時代後期の遺物出土状況 …… 18
第12図　縄文土器(4) …… 19
第13図　縄文時代の石器 …… 20
第14図　弥生土器 …… 20
第15図　古墳時代前期の竪穴住居跡 …… 21
第16図　01号住居跡 …… 22
第17図　01号住居跡遺物出土状況 …… 23
第18図　01号住居跡出土遺物 …… 24
第19図　06号住居跡 …… 26
第20図　06号住居跡遺物出土状況 …… 26
第21図　06号住居跡出土遺物 …… 27
第22図　07号住居跡 …… 28
第23図　07号住居跡遺物出土状況 …… 29
第24図　07号住居跡東隅遺物出土状況 …… 29
第25図　07号住居跡出土遺物 …… 30
第26図　08号住居跡 …… 33
第27図　08号住居跡遺物出土状況 …… 34
第28図　08号住居跡出土遺物 …… 34
第29図　09号住居跡 …… 36
第30図　09号住居跡遺物出土状況 …… 36
第31図　09号住居跡北西隅遺物出土状況 …… 36
第32図　09号住居跡出土遺物 …… 37
第33図　12号住居跡 …… 39
第34図　12号住居跡遺物出土状況 …… 40
第35図　12号住居跡東隅遺物出土状況 …… 40
第36図　12号住居跡出土遺物(1) …… 42
第37図　12号住居跡出土遺物(2) …… 44
第38図　12号住居跡出土遺物(3) …… 46
第39図　古墳時代後期の竪穴住居跡 …… 47
第40図　02号住居跡 …… 48
第41図　02号住居跡遺物出土状況 …… 49
第42図　02号住居跡出土遺物 …… 50
第43図　03号住居跡 …… 51
第44図　03号住居跡カマド …… 53
第45図　03号住居跡遺物出土状況 …… 53
第46図　03号住居跡出土遺物 …… 54
第47図　04号住居跡 …… 56
第48図　04号住居跡カマド …… 56
第49図　04号住居跡遺物出土状況 …… 57
第50図　04号住居跡焼土・炭化材検出状況 …… 57
第51図　04号住居跡出土遺物 …… 58
第52図　古墳時代の土坑 …… 61
第53図　01号土坑 …… 63
第54図　03号土坑 …… 63
第55図　06号土坑 …… 63
第56図　04号土坑・05号土坑 …… 65
第57図　04号土坑・05号土坑遺物出土状況 …… 65
第58図　04号土坑・05号土坑出土遺物 …… 66
第59図　07号土坑・08号土坑 …… 67
第60図　07号土坑・08号土坑遺物出土状況 …… 68
第61図　07号土坑・08号土坑出土遺物 …… 68
第62図　09号土坑 …… 70
第63図　10号土坑 …… 70
第64図　11号土坑 …… 70
第65図　その他検出された古墳時代の遺構 …… 71
第66図　F20グリッド周辺の遺物出土状況 …… 72
第67図　21号遺構確認面遺物出土状況 …… 72
第68図　D21グリッド遺物出土状況 …… 72

第69図　古墳時代のグリッド出土遺物 …… 74
第70図　奈良・平安時代の竪穴住居跡 …… 77
第71図　05号住居跡 …… 78
第72図　05号住居跡カマド …… 79
第73図　05号住居跡遺物出土状況 …… 79
第74図　05号住居跡出土遺物 …… 79
第75図　10号住居跡 …… 81
第76図　10号住居跡カマド …… 81
第77図　10号住居跡遺物出土状況 …… 82
第78図　10号住居跡出土遺物 …… 82
第79図　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物　83

表目次

第１表　勝田大作遺跡周辺の古墳時代の遺跡　3
第２表　勝田大作遺跡検出遺構一覧表 …… 10
第３表　縄文土器観察表(1) …… 13
第４表　縄文土器観察表(2) …… 14
第５表　縄文土器観察表(3) …… 16
第６表　縄文土器観察表(4) …… 19
第７表　縄文時代の石器観察表 …… 20
第８表　弥生土器観察表 …… 20
第９表　古墳時代前期竪穴住居跡一覧表 …… 21
第10表　01号住居跡 …… 22
第11表　01号住居跡出土遺物観察表 …… 25
第12表　06号住居跡 …… 26
第13表　06号住居跡出土遺物観察表 …… 27
第14表　07号住居跡 …… 27
第15表　07号住居跡出土遺物観察表(1) …… 31
第15表　07号住居跡出土遺物観察表(2) …… 32
第16表　08号住居跡 …… 32
第17表　08号住居跡出土遺物観察表 …… 34
第18表　09号住居跡 …… 35
第19表　09号住居跡出土遺物観察表 …… 37
第20表　12号住居跡 …… 38
第21表　12号住居跡出土遺物観察表(1) …… 41
第21表　12号住居跡出土遺物観察表(2) …… 43
第21表　12号住居跡出土遺物観察表(3) …… 45
第22表　古墳時代後期竪穴住居跡一覧表 …… 47
第23表　02号住居跡 …… 47
第24表　02号住居跡出土遺物観察表 …… 50
第25表　03号住居跡 …… 52
第26表　03号住居跡出土遺物観察表 …… 54
第27表　04号住居跡 …… 55
第28表　04号住居跡出土遺物観察表 …… 59
第29表　古墳時代土坑一覧表 …… 61
第30表　06号土坑出土遺物観察表 …… 62
第31表　04号土坑出土遺物観察表 …… 62
第32表　05号土坑・08号土坑出土貝の種類別重量比及び個体数比 …… 64
第33表　05号土坑出土遺物観察表 …… 66
第34表　07号土坑出土遺物観察表 …… 69
第35表　08号土坑出土遺物観察表 …… 69
第36表　その他の古墳時代の検出遺構一覧表　71
第37表　グリッド出土遺物観察表(1) …… 75
第37表　グリッド出土遺物観察表(2) …… 76
第38表　奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表 … 77
第39表　05号住居跡 …… 78
第40表　05号住居跡出土遺物観察表 …… 79
第41表　10号住居跡 …… 80
第42表　10号住居跡出土遺物観察表 …… 82
第43表　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物観察表 …… 84
第44表　古墳時代前期竪穴住居跡の規模 …… 85
第45表　古墳時代前期竪穴住居跡の方位 …… 86

第46表　古墳時代後期竪穴住居跡の規模　…… 86
第47表　古墳時代後期竪穴住居跡の方位　…… 86
第48表　奈良・平安時代竪穴住居跡の規模　… 87
第49表　奈良・平安時代竪穴住居跡の方位　… 87
第50表　貝の大きさ別個体数(1)　…… 89
第51表　貝の大きさ別個体数(2)　…… 90

図版目次

図版１　勝田大作遺跡遠景・調査区域全景
図版２　確認調査状況・調査風景・調査区近景他
図版３　縄文土器・縄文時代石器・弥生土器
図版４　01号住居跡
図版５　01号住居跡出土遺物
図版６　06号住居跡・出土遺物
図版７　07号住居跡
図版８　07号住居跡出土遺物(1)
図版９　07号住居跡出土遺物(2)
図版10　08号住居跡・出土遺物
図版11　09号住居跡
図版12　09号住居跡出土遺物
図版13　12号住居跡
図版14　12号住居跡出土遺物(1)
図版15　12号住居跡出土遺物(2)
図版16　12号住居跡出土遺物(3)
図版17　02号住居跡・出土遺物
図版18　03号住居跡
図版19　03号住居跡カマド・出土遺物
図版20　04号住居跡
図版21　04号住居跡カマド・出土遺物
図版22　01・03・04・05号土坑
図版23　05・06・07・08号土坑
図版24　08・09・10・11号土坑
図版25　土坑出土遺物(1)
図版26　土坑出土遺物(2)・古墳時代のグリッド出土遺物(1)
図版27　古墳時代のグリッド出土遺物(2)
図版28　その他の古墳時代の検出遺構
図版29　05号住居跡・出土遺物
図版30　10号住居跡
図版31　10号住居跡出土状況・出土遺物
図版32　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物

第Ⅰ章　遺跡と調査の概要

第１節　調査に至る経緯

勝田大作遺跡の発掘調査の契機は，昭和60年3月18日付けで，当該地の土地所有者から八千代市勝田字大作622-2他の6,168.02㎡（公簿5,701㎡）について，病院建設を目的とした「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出されたことであった。この照会を受けた八千代市教育委員会は現地踏査を行い，現況が荒地及び畑地であり，土師器が多量に散布していることを確認した。また，照会地が周知の遺跡の範囲内でもあり，遺構の検出される可能性が高いと考えられた。そのため，市教委は千葉県教育委員会にその旨の意見を付して報告した。同年5月2日付けで照会地について，県教委から埋蔵文化財が所在するとの回答があり，照会者に通知した。

昭和60年6月19日付けで病院建設の事業主体であった株式会社　北一から，文化財保護法第57条の２第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出された。事業者と市教委が協議し，当該地を発掘調査による記録保存とすることで合意した。同年7月29日，事業者から委託を受けた八千代市遺跡調査会は文化財保護法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を市教委に提出し，準備の整った同年8月1日確認調査を開始した。

第２節　遺跡の位置と立地

八千代市は千葉県北西部に位置し，都心まで約30キロメートルの距離にある。

勝田大作遺跡は八千代市南端の勝田に所在する。勝田地区は勝田川を市境として千葉市に接しており，本跡はこの勝田川の北岸の台地上に立地する。

勝田川は長沼一帯を源に持つ河川で，印旛沼水系に属する。川の流れは南から北あるいは北西に流下し，宇那谷・勝田を経て大和田付近で新川と名前を変える。現在，大和田付近では江戸時代から開削が行われてきた堀割りが分水界を越えて，東京湾に流れ込む花見川につながっている。新川はさらに北に流れ，桑納川と合流し平戸付近で流れが東に変わり神崎川と共に印旛沼に流れ込んでいる。

勝田川は勝田付近で流れが北に屈曲し，この北側に千葉段丘の形成がみられ，低台地を中心に古くから勝田の集落が形成されている。低台地の背後に下総上位面の台地平坦面が広がっている。勝田大作遺跡はこの台地平坦面の一帯を範囲としている（第2図）。昭和58年に作成された遺跡地図（注1）では，地形の微細な変化を基準に3つの遺跡として把握されていたが，平成10年の遺跡地図（注2）の再作成を期に，勝田大作遺跡として統合された。調査区域は広域な勝田大作遺跡の北端に位置している。

下総上位面は比較的平らな平坦面であるが，今回調査した区域の周辺地形図（第4図）でも表れているように，標高12m～13mの低台地面から急激に10mほど上昇し，標高23mほどの平坦面が形成されている。さらに，2m～3m程あるゆるやかな傾斜面を経て標高26mほどの一段高い平坦面がつづく。今回の調査区域はまさに，この緩やかな傾斜面上に立地していた。

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

▲ 古墳　● 集落遺跡

1．内野第1遺跡　2．沖塚遺跡　3．小板橋遺跡　4．内込遺跡　5．高津新山遺跡　6．川崎山遺跡　7．白幡前遺跡　8．井戸向遺跡　9．北海道遺跡　10．ヲサル山遺跡　11．権現後遺跡　12．菅地ノ台遺跡　13．浅間内遺跡　14．仲田遺跡　15．西山遺跡　16．村上宮内遺跡　17．下高野新山遺跡　18．先崎西原遺跡　19．南谷遺跡　20．おおびた遺跡　21．上谷遺跡　22．雷遺跡　23．栗谷遺跡　24．境堀遺跡　25．向境遺跡　26．桑納遺跡　27．桑納新田遺跡　28．作ヶ谷津遺跡　29．間見穴遺跡　30．道地遺跡　31．松原遺跡　32．東山久保遺跡　33．真木野向山遺跡　34．佐山台遺跡　35．田原津遺跡　36．子の神台遺跡　37．上座矢橋遺跡　38．神楽場遺跡　39．西ノ台遺跡　40．馬ヶ台遺跡　41．広台遺跡　42．東場遺跡　43．仲内遺跡　44．松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡　45．松崎Ⅰ・Ⅱ遺跡　46．船尾城跡　47．向ノ地遺跡　48．船尾町田遺跡　49．船尾白幡遺跡　50．鳴神山遺跡　51．向新田遺跡　52．北の台遺跡　53．谷田木曽地遺跡　54．小室台遺跡　55．仲山古墳群　56．堀場台古墳　57．上ノ山古墳　58．沖塚古墳　59．根上神社古墳　60．村上１号古墳　61．菅地ノ台古墳　62．大東台古墳　63．桑納古墳群　64．南谷古墳　65．神野芝山古墳群　66．間見穴古墳群　67．平戸台古墳群　68．佐山台古墳　69．真木野古墳

第３節　周辺の遺跡

本跡で検出された遺構・遺物の主要な時期が古墳時代前期と後期の2時期であるところから，ここでは古墳時代を中心とする周辺の遺跡について概観する。

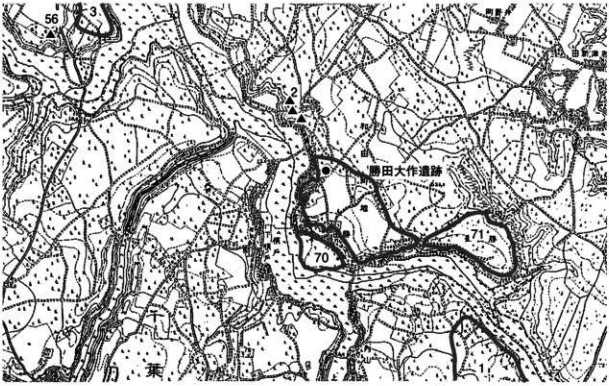
内野第１遺跡(1)は勝田川上流1kmほどの南岸の低段丘上に立地する。縄文時代後晩期の大集落であるが，古墳時代の竪穴住居跡も多数検出されている。古墳時代前期の竪穴住居跡が281軒あり，中期になると30軒と減少している。特に，古墳時代前・中期の竪穴住居跡各1軒から，ハマグリ・シオフキガイを主体とする貝ブロックが検出されている。本跡下流2kmの西岸の台地上には**小板橋遺跡**(3)が所在する。中期の竪穴住居跡7軒，後期8軒が検出されている。同じ西岸の下流に古墳時代中期30軒，後期2軒の竪穴住居跡が検出された**川崎山遺跡**(6)が所在する。さらに下流の萱田地区には**白幡前遺跡**(7)・**井戸向遺跡**(8)・**北海道遺跡**(9)・**ヲサル山遺跡**(10)・**権現後遺跡**(11)の5遺跡が調査されている。遺跡群全体では弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居跡が12軒，前期86軒，中期28軒，後期33軒と継続的に営まれていたことが確認されている。特にこの遺跡群は平安時代になると大集落が形成されることで知られている。北海道遺跡では古墳時代後期の竪穴住居跡からハマグリ・シオフキガイを中心とした貝ブロックが検出された。権現後遺跡でも市施設の建設時に行われた調査で，同様に古墳時代後期の竪穴住居跡からハマグリを主体とする貝層が検出されている。

新川を挟んで対岸となる村上地区では**浅間内遺跡**(13)・**持田遺跡**(14)・**西山遺跡**(15)の一部が調査されている。浅間内遺跡は前期から中期に属する竪穴住居跡が14軒，中期～後期が17軒検出されている。持田遺跡では後期の竪穴住居跡12軒の検出があり，西山遺跡では前期の竪穴住居跡3軒が調査されている。

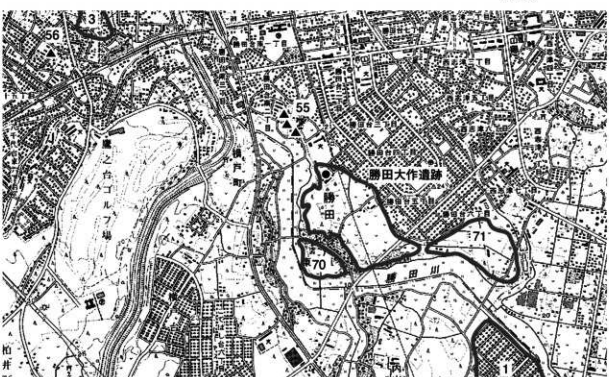
新川と桑納川が合流する付近では**桑橋新田遺跡**(27)において確認調査の段階であるが170軒以上の前期

第1表　勝田大作遺跡周辺の古墳時代の遺跡

No.	遺跡名	所在地	遺跡No.	古墳時代住居跡			調査年	周辺遺跡の参考文献
				前期	中期	後期		
1	内野第１遺跡	千葉市花見川区宇那谷町	千葉市	○	○		H1～H8	1
3	小板橋遺跡	八千代市大和田	245		○	○	S55，S59，S61	
4	内込遺跡	八千代市八千代台北	246		○	○	H13，H14	2，3
5	高津新山遺跡	八千代市高津	239		○		S60～H1	4，5，6
6	川崎山遺跡	八千代市萱田町	241		○	○	S54～H18	7，8，9，10
7	白幡前遺跡	八千代市萱田	185			○	S54～S63	11
8	井戸向遺跡	八千代市萱田	284	○		○	S53～H13	12，13
9	北海道遺跡	八千代市萱田	183		○	○	S54～58	15
10	ヲサル山遺跡	八千代市萱田	283	○			S56～S59	13，16
11	権現後遺跡	八千代市萱田	171	○	○	○	S52～S57，H7	17，18，19
12	菅地ノ台遺跡	八千代市萱田	179	○	○		S63～H15	20
13	浅間内遺跡	八千代市村上	204	○	○		H6～H16	
14	持田遺跡	八千代市神野	200			○	H5，H6	21
15	西山遺跡	八千代市村上	196	○			H1，H2	19
17	下高野新山遺跡	八千代市下高野	92			○	H61，63，H1，6	
18	先崎西原遺跡	佐倉市先崎	佐倉市1	○		○	H9～H12	22
19	南谷遺跡	八千代市保品	270	○			H6，H10	23
20	おおびた遺跡	八千代市保品	86	○	○		S48	24
21	上谷遺跡	八千代市神野	77		○		H4～H10	25，26，27，28，29，30
22	宮遺跡	八千代市神野	106			○	H4,H5	33
23	栗谷遺跡	八千代市保品	75	○	○	○	S63～H6	31，32，33，34
24	境堀遺跡	八千代市神野	73	○		○	H4～H10	36
25	向境遺跡	八千代市神野	98		○	○	H2～H8	35
26	桑納遺跡	八千代市桑納	57		○		S58	
27	桑橋新田遺跡	八千代市桑橋	59	○			S51～H6	21
29	間見穴遺跡	八千代市萱田台	28	○		○	H5，H6，H10	37，38
30	道地遺跡	八千代市平戸	18	○	○	○	S58，S60，H8～11	39，40
31	松原遺跡	八千代市真木野	11		○		S61～S62	21
32	東山久保遺跡	八千代市真木野	24	○		○	S62，H16	21
33	真木野向山遺跡	八千代市真木野	23	○			H1～H2	21
34	佐山台遺跡	八千代市島田台	22	○			S63～H3	21
35	田原窪遺跡	八千代市佐山	216	○		○	H2～H8	21
36	子の神台遺跡	八千代市佐山	16	○	○	○	S53～H13	41，42
50	鳴神山遺跡	印西市戸神	印西市27	○		○	S63～H4	43



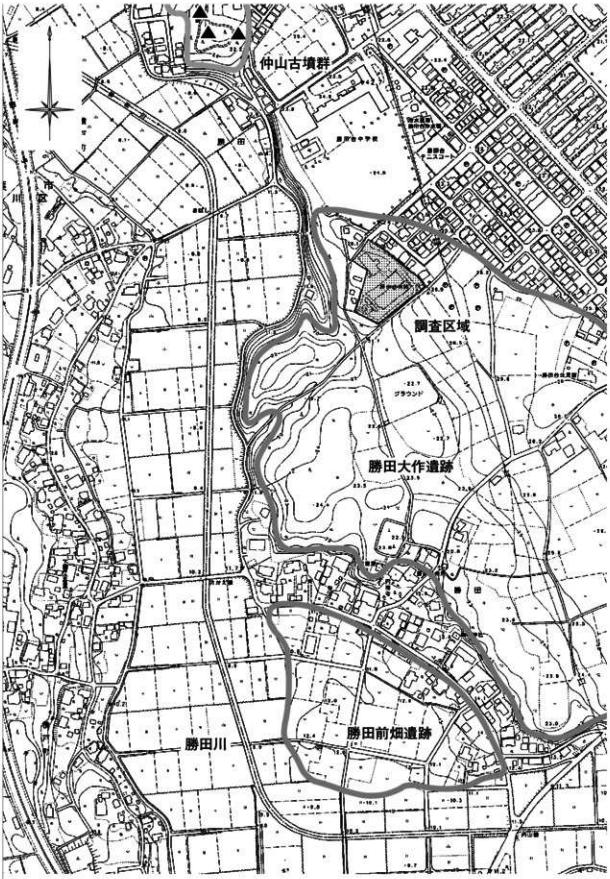
第2図　勝田大作遺跡周辺の迅速測図



第3図　勝田大作遺跡周辺の地形図

●調査地点　▲古墳　1 内野第1遺跡　3 小板橋遺跡　55 仲山古墳群　56 堀場台古墳　70 勝田前畑遺跡　71 新東原遺跡

の竪穴住居跡が検出されている。隣接する**桑納遺跡**(26)では未整理のため時期は不明であるが，古墳時代の竪穴住居跡が25軒ほど調査された。



第4図　勝田大作遺跡と調査区域

新川が印旛沼に流れ込む周辺では北岸の**間見穴遺跡**(29)と**道地遺跡**(30)が調査され，古墳時代の竪穴住居跡の検出がみられる。前期の竪穴住居跡では間見穴遺跡で16軒，道地遺跡で12軒，中期では道地遺跡で7軒，後期になると道地遺跡で5軒検出されている。

印旛沼に注ぐ神崎川流域では，北部遺跡群の5遺跡と台地の先端に**子の神台遺跡**(36)が所在している。北部遺跡群の内でも**田原窪遺跡**(35)・**佐山台遺跡**(34)・**真木野向山遺跡**(33)はほとんど地形的な境がなく，ほぼ一続きの低台地を形成している。ここでは前期の竪穴住居跡が310軒ほどの大集落となる。中期の竪穴住居跡は検出されていないが，後期になると13軒検出されている。隣接する**東山久保遺跡**(32)では未整理のため時期を確定することはできないが概ね，前期6軒，後期14軒が検出されている。**松原遺跡**(31)では58軒の古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。

第４節　確認調査の経過と成果

調査の経過

確認調査は調査の準備の整った昭和60年8月1日より実施され，同年8月24日に終了した。

日記抄

8月１日（木）

機材搬入。測量会社により設定された杭にグリッド名称記入。トレンチの掘削を開始，すぐに竪穴住居跡2軒確認される。竪穴住居跡の規模が大きい。遺物などから古墳時代後期が想定される。

8月３日（土）

トレンチの掘削を継続。新たに竪穴住居跡1軒が確認される。(計5軒となる)補足のトレンチを設定。

8月５日（月）

トレンチの掘削を継続。新たに竪穴住居跡らしき落ち込み2軒が確認。形状が円形を呈し，規模も小さい，時期の違うものもありそうだ。

8月７日（水）

トレンチの掘削を継続。U13グリッドに溝状遺構検出。O12グリッドに新たに竪穴住居跡らしき落ち込み1軒。Ｉ23グリッドで周囲より極端に確認面が低くなる。別な段丘面か。

8月９日（金）

トレンチの掘削を継続。Q12グリッドで竪穴住居跡の西側部分を確認。Ｊ4グリッドに不鮮明な遺構。午後雨中断。以降18日（日）までお盆休み

8月19日（月）

作業再開。トレンチの掘削を継続。H4・G4グリッドから大型の竪穴住居跡を確認。

8月20日（火）

調査区北側のトレンチの掘削を継続。Hラインのセクション面の分層。遺構の検出状況の実測。

8月24日（土）

確認トレンチの拡張。G20グリッドを拡張する。E21グリッドを拡張するが，土器の出土が多い。Hライン・12ラインのセクションの実測，土層注を記録する。本日で確認調査を完了する。

調査の方法

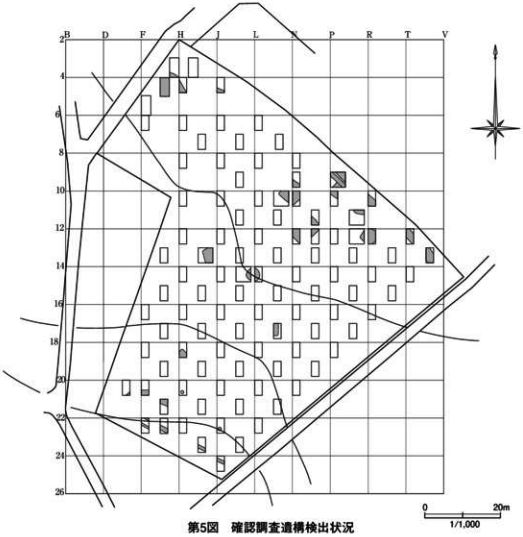
調査区域内の位置を特定するため，調査区全体に対し5m方眼のグリッドを組むこととした。このグリッドは調査区北端の境界杭(H2)を基準点とし，磁北を基準線にして設定している。杭の名称は東西方向にアルファベットを用い，南北方向にはアラビア数字により表示した。グリッド名称は北西隅の杭名称をもって表示している。

調査区域全体の面積の10％を目標に，全体の状況を把握するため，2m×4mの短いトレンチを規則的に配置することを当初の基本とした。

トレンチは拡張したものも含めて，105ヶ所を調査した。掘削面積は906㎡となり，調査対象面積に対して14.7％を調査したことになる。

調査区の遺構確認面

遺構の確認面はソフトロームが調査区域全体に明瞭に検出されていることもあり，このソフトローム上面をもって検出することとした。調査区は緩やかな傾斜地となっているが，確認面は概ね40cm前後の深さで遺構を検出している。調査区の北端に位置するトレンチでは50cmほどの深さでやや深くなる傾向がみられた。



第5図　確認調査遺構検出状況

確認調査の成果

確認調査の成果は古墳時代の竪穴住居跡を13軒のほか，土坑2基，溝状遺構を4条検出している。溝状遺構については調査区北端側から検出された遺構の覆土にしまりがなく，比較的新しい溝と判断された。しかし，南端側に検出されている2つの溝状遺構の覆土にはしまりがあり，古い時期の可能性もあると判断した。

出土遺物は古墳時代を中心とした土師器が出土している。時期としては，前期及び後期が想定された。また，量的に多くはなかったが縄文土器の出土があり，主に後期，加曽利B式期の土器が中心にみられた。

第５節　本調査の方法と経緯

調査区域

確認調査により得られた成果から判断して，本調査の対象となる区域は全域であり，竪穴住居跡などの検出は20軒前後とみられた。病院の建設計画等の状況から，協議を重ねた結果，建物を建設する部分と既存道路に接道する関係から入り口部分の2ヶ所，約2,900㎡を調査対象として，記録保存することとなった。そのため，残りの約3,200㎡については現状保存するため埋め戻すこととした。

調査の方法

基本のグリッドは確認調査の時に設定したラインをそのまま用い，名称についても同様とした。

竪穴住居跡が想定される遺構については，ナンバーと住居跡名を用いて表記することとした。調査には十字に土層観察用のベルトを残し，サブトレンチ掘削後に全体を掘削した。重複が予想される場合には必要に応じてベルトを増設した。遺物はできる限り出土した地点に残し，位置と深さを測定した上で取り上げることとした。微細な遺物については位置等を測定せず一括で取り上げている。測定には確認調査のために設定された杭を基本に1ｍ方眼を現場に組み，平面位置の測定を行った。また，高さの測定については杭に取り付けられた標高から，新たにベンチマークを設定し測定した。

土坑についても同様に，ナンバーと土坑名をもって遺構名の表記とした。調査の方法は半裁により掘削し，土層を観察後，全体を掘り上げた。遺物については住居跡の調査と同様に計測して取り上げている。

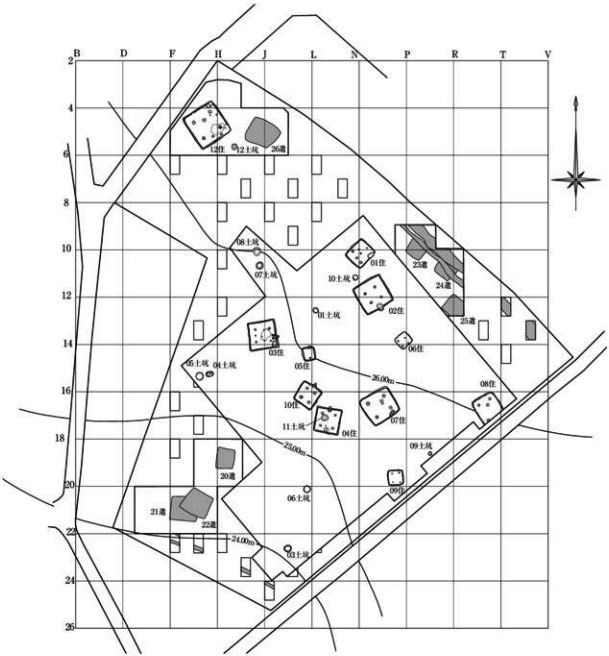
現状保存区域の竪穴住居跡等の遺構については，時期や形状などをより正確に把握するために一部拡張して，遺構の形状を測定し，出土遺物は必要に応じて実測して取り上げている。

調査の経過

本調査は，建設工事が切迫している事業主側の事情があったため，協議を整えて，確認調査終了直後に調査を開始した。昭和60年8月26日には表土剥ぎのための各作業を開始している。

遺構の調査を実施するにあたり，はじめに保存区域にある遺構の確認を行った。この作業により，本調査区域の廃土置き場を確保し，順次本調査区域の表土剥ぎを実施していった。

病院の建物部分の竪穴住居跡から調査を開始し，竪穴住居跡の調査が終了次第，土坑の調査に移行した。ほぼ各遺構の調査が終了した段階で航空機による空撮を実施し，同年10月26日すべての調査を完了し，現地を撤収した。



第6図　勝田大作遺跡遺構配置図

日記抄

８月26日（月）

廃土置き場を整地する。表土剥ぎの業務委託による作業の開始。委託のための作業員12名，土砂運搬キャリヤー2台。

９月２日（月）

引き続き表土剥ぎ作業を継続。本日より，遺構のプランの検出作業を開始。N12グリッドの遺構（02住）のプラン確認。2軒の重複か。P14グリッドに新検出遺構（06住）を確認。

９月５日（木）

引き続き表土剥ぎ作業を継続。表土剥ぎ作業がほぼ半分終了したので，遺構調査を開始する。02住・

03住・05住のトレンチの掘削を開始。測量のための方眼を設定する。

9月9日（月）

引き続き表土剥ぎ作業を継続。01住・02住・03住・05住・06住の全面掘削中。完形遺物等の実測。

9月11日（水）

引き続き表土剥ぎ作業を継続。O19グリッドで小型の住居跡（09住）を確認，S16グリッド周辺で遺構（08住）を検出。07住とした遺構は検出面が浅いため，明瞭なプランが出ない。各住居跡の調査を継続。

9月13日（金）

委託による表土剥ぎ作業が完了する。01住・02住・03住・05住・06住の全面掘削中。02住・03住から炭化材が検出されたため，写真撮影後実測する。07住のトレンチ掘削開始。

第2表　勝田大作遺跡　検出遺構一覧表

〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値

遺構名称	略称	種別	位置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	カマド・炉	時代・時期	備考
				長軸・主軸	短軸	深さ					
01号住居跡	01D	竪穴住居跡	N10	5.12	4.56	0.42	方形	N-43°-E	炉	古墳時代・前期	
02号住居跡	02D	竪穴住居跡	N12	7.16(6.6)	6.70	0.54	方形	N-30°-W	炉	古墳時代・後期	主軸()内は張出しを除く
03号住居跡	03D	竪穴住居跡	J14	5.82	5.90	0.53	方形	N-81°-E	カマド	古墳時代・後期	主軸はカマドを除く
04号住居跡	04D	竪穴住居跡	M17	5.66(5.29)	5.36	0.56	方形	N-10°-E	カマド	古墳時代・後期	主軸()内はカマドを除く
05号住居跡	05D	竪穴住居跡	K14	2.90	2.73	0.74	方形	N-12°-W	カマド	奈良・平安時代	
06号住居跡	06D	竪穴住居跡	P14	3.10	2.86	0.43	方形	N-46°-E	なし	古墳時代・前期	
07号住居跡	07D	竪穴住居跡	O16	6.92	6.40	0.54	方形	N-58°-E	炉	古墳時代・前期	
08号住居跡	08D	竪穴住居跡	S16	推定6.6〔5.2〕	推定5.4	0.46	長方形	N-32°-W	炉	古墳時代・前期	南西壁が調査区域外
09号住居跡	09D	竪穴住居跡	O19	3.30	3.20	0.32	方形	N-4°-W	なし	古墳時代・前期	
10号住居跡	10D	竪穴住居跡	L16	5.42(4.62)	4.64	0.58	方形	N-33°-E	カマド	奈良・平安時代	主軸()内はカマドを除く
11号住居跡		欠									
12号住居跡	12D	竪穴住居跡	G5	7.90	7.64	0.80	方形	N-34°-W	炉	古墳時代・前期	
13～19号は欠番											
20号遺構		竪穴住居跡	H19	推定4.1	推定3.8	—	方形	N-8°-E	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
21号遺構		竪穴住居跡	F21	推定5.7	推定5.1	—	方形	N-87°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
22号遺構		竪穴住居跡	G21	推定5.6	推定5.1	—	方形	N-59°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
23号遺構		竪穴住居跡	P10	推定3.8	推定3.8	—	推定方形	N-51°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
24号遺構		竪穴住居跡	R11	推定4.1	推定3.8	—	推定方形	N-49°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
25号遺構		竪穴住居跡	R12	推定4.4	推定4.0	—	方形	N-49°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
26号遺構		竪穴住居跡	J5	推定6.2	推定5.3	—	方形	N-58°-W	—	古墳時代か	プラン確認（現状保存）
01号土坑	01P	土坑	L12	1.20	1.10	0.25	円形	—	—	古墳時代か	
02号土坑		欠									
03号土坑	03P	土坑	K22	1.60	1.46	0.88	円形	—	—	古墳時代か	
04号土坑	04P	土坑	G15	1.57	1.07	0.17	楕円形	—	—	古墳時代	
05号土坑	05P	土坑	G15	1.70	推定1.6	0.62	円形	—	—	古墳時代	貝ブロック
06号土坑	06P	土坑	K20	1.55	1.50	0.61	円形	—	—	古墳時代か	
07号土坑	07P	土坑	I10	1.58	推定1.5	0.63	円形	—	—	古墳時代	
08号土坑	08P	土坑	I10	推定1.7	推定1.5	0.60	円形	—	—	古墳時代	貝ブロック
09号土坑	09P	土坑	Q18	0.75	0.75	0.30	円形	—	—	古墳時代か	
10号土坑	10P	土坑	M11	1.10	1.07	0.38	円形	—	—	古墳時代か	
11号土坑	11P	土坑	L17（04D内）	1.36	1.20	2.06	円形	—	—	古墳時代か	深さは04号住居跡床面より
12号土坑	12P	土坑	H5	推定1.2	推定1.1	—	円形	—	—	不明	プラン確認（現状保存）

＊主軸・長軸は各壁の中点を結んだ線を軸として捉え，壁間を測定した。方位もこの軸を計測している。

９月18日（水）

01住・02住・03住の床面・壁面検出作業開始。04住遺物を測定し取り上げ。07住全面発掘調査中。

10月３日（金）

01住・02住の床面精査。住居跡内ピット掘削。04住・10住の住居跡内ピット掘削。12住全面掘削開始。03住・09住土層観察用のベルト撤去。

10月７日（月）

01住の平面実測。04住内のＰ７（11号土坑）を半裁。かなり深そうなピットとなる。土層を観察。

10月12日（土）

03住・04住・07住・08住・09住・10住の平面実測を順次開始。12住遺物を測定し取り上げ。05住・10住のカマド調査中。土坑の土層実測。06土坑・08土坑の遺物測定，取り上げ。

10月13日（日）

12住の土層の分層及び実測。01土坑・04土坑・09土坑の分層及び実測。

10月22日（火）

航空写真撮影を実施。04住・12住のエレベーションの実測。03住・04住・05住・07住・08住・09住・10住の完掘状況写真撮影。

10月26日（土）

調査を完了し，機材を撤収する。

第６節　調査区の土層

土層は調査区に高低差があることを配慮し，南北・東西方向の2方向とした。南北方向はＨの杭ライン，東西方向は12の杭ラインの土層を観察し，実測図をもって記録した。

第Ⅰ層は暗褐色土を主体とする表土層である。

第Ⅱa層は暗褐色土層で炭化材や焼土粒子・ローム粒子をわずかに混入していた。人為的な堆積の可能性もある。この土層の広がりはＨ10グリッド以南に広範囲に広がっている。

第Ⅱb層は黒褐色土層で，褐色土の混入がみられ，わずかに焼土粒子が混入している。

第Ⅱc層は褐色土層でソフトロームの漸移層である。

第Ⅲ層はソフトローム層である。

調査区の北端から南端まで約120mの距離があるが，高低差は3m近くある。南北のセクションラインで

第7図　遺跡の基本土層

0　5m
1/100

地表面からソフトロームまでの堆積は北端で約40cm，南端で約60cmほどの深さであった。調査区南端のトレンチでは90cm以上ある場所も見られるが，小さな谷津が入り込んでいるためと思われる。

参考文献

八千代市教育委員会　1981　『八千代市文化財総合調査報告　Ⅰ』
（注１）　八千代市教育委員会　1983　「八千代市の遺跡　―千葉県八千代市埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書―」
（注２）　財団法人千葉県文化財センター　1985　「千葉県埋蔵文化財分布地図（１）　―東葛飾・印旛地区―」
1　（財）千葉市文化財調査協会　2001　「千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書」第Ⅱ分冊
2　八千代市遺跡調査会　2001　「千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書　―宅地造成に伴う埋蔵文化財調査―」
3　八千代市遺跡調査会　2003　「千葉県八千代市内込遺跡ｂ地点発掘調査報告書　―宅地造成に伴う埋蔵文化財調査―」
4　八千代市教育委員会　1982　「千葉県八千代市高津新山遺跡　―昭和56年度確認調査の概要―」
5　八千代市教育委員会　1983　「千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ　―昭和57年度確認調査の概要―」
6　八千代市教育委員会　1984　「千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ　―昭和58年度確認調査の概要―」
7　八千代市遺跡調査会　1980　「萱田町川崎山遺跡発掘調査報告 1979　八千代市都市計画街路３，４，１号線建設工事に伴う発掘調査報告書」
8　八千代市遺跡調査会　1999　「千葉県八千代市川崎山遺跡　―埋蔵文化財発掘調査報告書―」
9　八千代市遺跡調査会　2003　「千葉県八千代市川崎山遺跡ｄ地点―萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書―」
10　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市川崎山遺跡ｈ地点発掘調査報告書　―店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書―」
11　（財）千葉県文化財センター　1991　「八千代市白幡前遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―」
12　（財）千葉県文化財センター　1987　「八千代市井戸向遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ―」
13　（財）千葉県文化財センター　1993　「八千代市権現坂遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ―」
14　（財）千葉県文化財センター　1985　「八千代市北海道遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―」
15　（財）千葉県文化財センター　1986　「八千代市ヲサル山遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―」
16　（財）千葉県文化財センター　1984　「八千代市権現坂遺跡　―萱田地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ―」
17　八千代市教育委員会　1988　「千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和62年度」
18　八千代市教育委員会　1989　「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　昭和63年度」
19　八千代市教育委員会　1990　「千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告　平成元年度」
20　八千代市教育委員会　2003　「千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書　平成14年度」
21　八千代市教育委員会　1995　「平成６年度　八千代市埋蔵文化財調査年報」
22　（財）印旛郡市文化財センター　2001　「千葉県佐倉市　先端西原遺跡　―佐澄寺霊園埋設に伴う埋蔵文化財調査―」
23　八千代市教育委員会　1996　「八千代市埋蔵文化財調査年報　―平成６年度版―」
24　おおびた遺跡調査団　1975　「おおびた遺跡　―八千代市少年自然の家建設地内遺跡―」
25　八千代市遺跡調査会　2001　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第１分冊
26　八千代市遺跡調査会　2003　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第２分冊
27　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第３分冊
28　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
29　八千代市遺跡調査会　2005　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第１分冊本文編
30　八千代市遺跡調査会　2005　「千葉県八千代市上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第５分冊
31　八千代市遺跡調査会　2001　「千葉県八千代市栗谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第１分冊
32　八千代市遺跡調査会　2003　「千葉県八千代市栗谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第２分冊
33　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第３分冊
34　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」第１分冊本文編
35　八千代市遺跡調査会　2004　「千葉県八千代市向境遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」
36　八千代市遺跡調査会　2005　「千葉県八千代市境堀遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」
37　（財）千葉県文化財センター　2004　「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3　―八千代市間見穴遺跡―」
38　（財）千葉県文化財センター　2005　「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書4　―八千代市間見穴遺跡（2）―」
39　八千代市教育委員会　1986　「千葉県八千代市平戸道地遺跡　―農業道路施設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―」
40　（財）千葉県文化財センター　2004　「船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2　―八千代市道地遺跡―」
41　八千代市遺跡調査会・船橋市遺跡調査会　1980　「東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書」
42　八千代市教育委員会　1983　「千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告書　―昭和57年度調査の概要―」
43　八千代市教育委員会　2003　「千葉県八千代市公共事業関連遺跡発掘調査報告書」

第Ⅱ章　縄文時代・弥生時代

調査区域における縄文時代及び弥生時代の状況は，竪穴住居跡や土坑などの遺構はまったく検出されていないが，遺物がわずかに出土していた。調査区域内で回収された縄文土器は210点程で，弥生土器は1点のみであった。縄文時代では中期・後期・晩期の土器を確認している。弥生時代の土器は後期に該当する。調査区域内から出土した土器は，表採や一括取り上げの土器を除く出土数で7,200点ほどになるが，縄文土器の出土比率は3%程しかない。

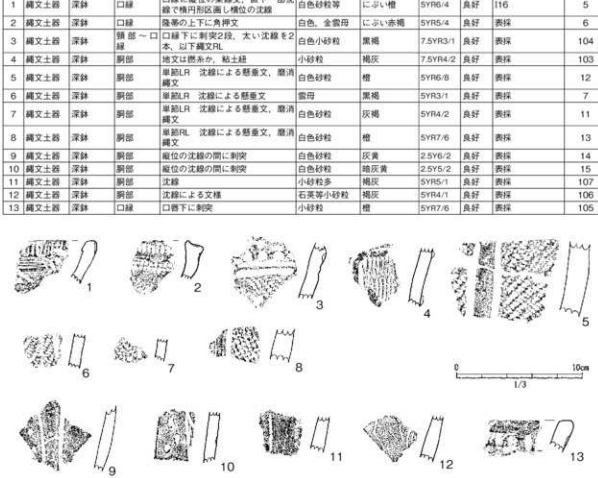
第１節　縄文時代の遺物

中期の土器（第8図1～8・図版3）

第8図1は口縁に半裁竹管の背面による条線文を縦位に施す。その下の横位の集合沈線のまわりに沈線で区画する。三角形の除刻文がみられる。中期初頭に位置付けられる。この期の土器はこの1点しか確認さ

第3表　縄文土器観察表(1)

No	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No
1	縄文土器	深鉢	口縁	口縁に縦位の条線文，直下一部沈線で楕円形区画し横位の沈線	白色砂粒等	にぶい橙	5YR6/4	良好	I16	5
2	縄文土器	深鉢	口縁	隆帯の上下に角押文	白色，金雲母	にぶい赤褐	5YR5/4	良好	表採	6
3	縄文土器	深鉢	頸部～口縁	口縁下に刺突2段，太い沈線を2本，以下縄文RL	白色小砂粒	黒褐	7.5YR3/1	良好	表採	104
4	縄文土器	深鉢	胴部	地文は撚糸か，粘土紐	小砂粒	褐灰	7.5YR4/2	良好	表採	103
5	縄文土器	深鉢	胴部	単節LR　沈線による懸垂文，磨消縄文	白色砂粒	橙	5YR6/8	良好	表採	12
6	縄文土器	深鉢	胴部	単節LR　沈線による懸垂文	雲母	黒褐	5YR3/1	良好	表採	7
7	縄文土器	深鉢	胴部	単節LR　沈線による懸垂文，磨消縄文	白色砂粒	灰褐	5YR4/2	良好	表採	11
8	縄文土器	深鉢	胴部	単節RL　沈線による懸垂文，磨消縄文	白色砂粒	橙	5YR7/6	良好	表採	13
9	縄文土器	深鉢	胴部	縦位の沈線の間に刺突	白色砂粒	灰黄	2.5Y6/2	良好	表採	14
10	縄文土器	深鉢	胴部	縦位の沈線の間に刺突	白色砂粒	暗灰黄	2.5Y5/2	良好	表採	15
11	縄文土器	深鉢	胴部	沈線	小砂粒多	褐灰	5YR5/1	良好	表採	107
12	縄文土器	深鉢	胴部	沈線による文様	石英等小砂粒	褐灰	5YR4/1	良好	表採	106
13	縄文土器	深鉢	口縁	口唇下に刺突	小砂粒	橙	5YR7/6	良好	表採	105

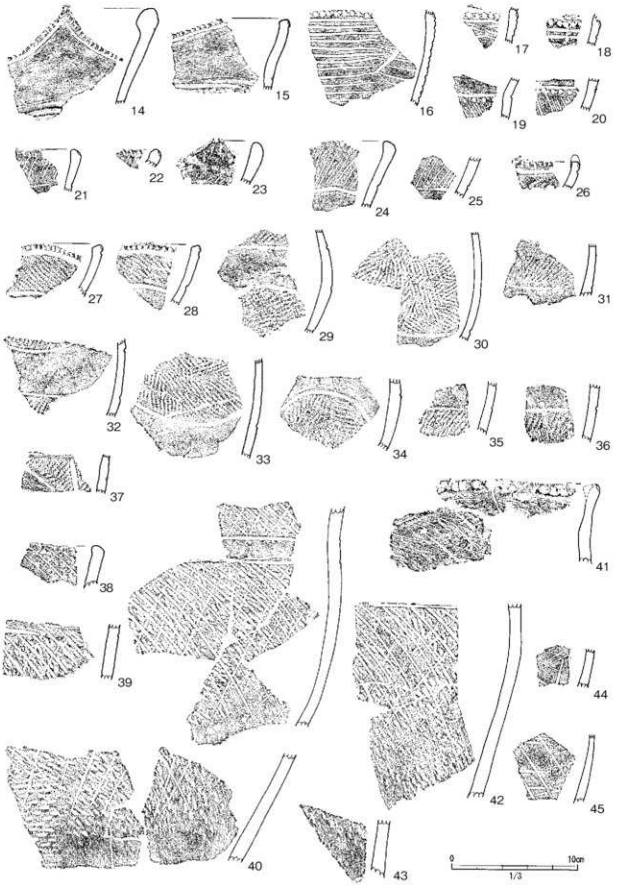


第8図　縄文土器(1)

れていない。2は口縁近くの部位であろうか，丸みのある断面三角形の隆帯がめぐっている。この隆帯の上と下に別々の手法で角押文が施文される。胎土に金雲母が混入される。阿玉台式土器である。この期の土器もこの1点しか確認できていない。3は口縁下に2段の太い刺突と，太い沈線が2本めぐる。5～8は懸垂文と磨消縄文により文様が構成される。3～8は加曽利Ｅ式土器である。

第4表　縄文土器観察表(2)

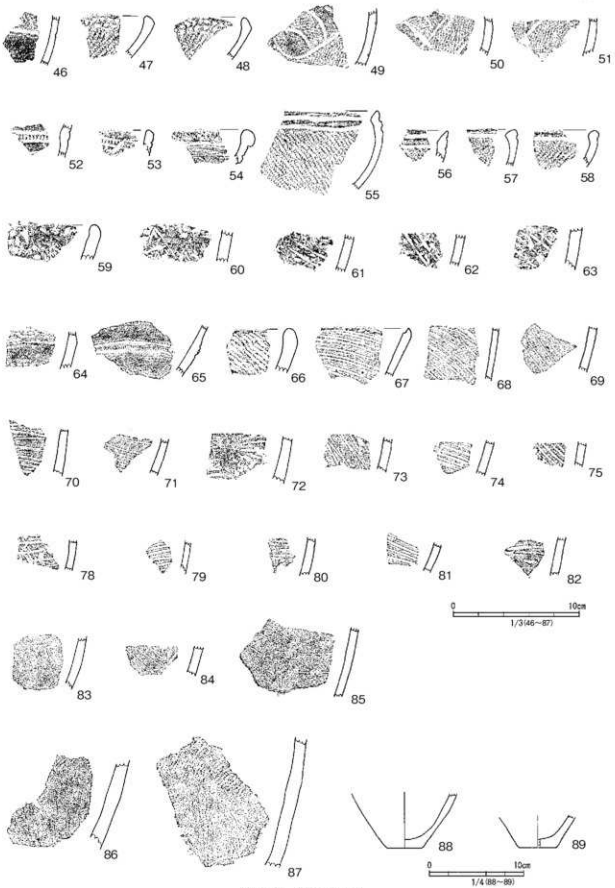
No	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No
14	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，横位の沈線，以下無文帯	小砂粒	浅黄橙	10YR8/4	良好	H13	25
15	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，横位の沈線，以下無文帯	小砂粒	褐灰	10YR4/1	良好	H13	24
16	縄文土器	深鉢	胴部	横位に刺突を配し，以下横位の条線文	白色等小砂粒	にぶい橙	7.5YR7/3	良好	M13	28
17	縄文土器	深鉢	胴部	刺突と沈線下に条線文	白色小砂粒	にぶい橙	10YR7/3	良好	H13	32
18	縄文土器	深鉢	胴部	刺突と沈線下に条線文	小砂粒	浅黄橙	10YR8/4	良好	表採	31
19	縄文土器	深鉢	頸部	無文帯の頸部の下に横位の沈線，刺突と条線文	白色等砂粒	浅黄橙	10YR8/3	良好	08住65	19
20	縄文土器	深鉢	胴部	横位の沈線文下に刺突，条線文	白色小砂粒	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	表採	16
21	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，口縁に条線文と横位の沈線，無文帯	白色，石英等砂粒	褐灰	7.5YR5/1	良好	08住一括	20
22	縄文土器	深鉢	口縁	口唇に刻み，口縁に条線文と横位の沈線，無文帯	白色，石英等砂粒	褐灰	10YR4/1	良好	表採	17
23	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，条線文	白色等小砂粒	浅黄橙	10YR8/4	良好	08住16	22
24	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇刻み，口縁に条線文，横位の沈線以下無文帯	白色等小砂粒	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	S16	18
25	縄文土器	深鉢	口縁	頸部の無文帯上に横位の沈線，条線文	白色，石英等砂粒	橙	5YR7/6	良好	03土坑	21
26	縄文土器	深鉢	把手	口唇に刻み，横位の沈線	白色小砂粒	にぶい黄橙	10YR7/3	良好	表採	23
27	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，横位の沈線，以下縄文帯RL	白色等小砂粒	浅黄橙	10YR8/3	良好	P9	27
28	縄文土器	深鉢	波状口縁	口唇に刻み，横位の沈線，以下縄文帯RL	白色等小砂粒	浅黄橙	10YR8/3	良好	表採	26
29	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文を充填	白色等砂粒	褐灰	7.5YR4/1	良好	03住134，73	34
30	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文RLを充填	白色等砂粒	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	10住44，49	36
31	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文LRを充填	白色等砂粒	にぶい橙	7.5YR7/4	良好	R10	38
32	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文LRを充填	白色等砂粒	灰褐	7.5YR5/2	良好	I17	37
33	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文RLを充填	白色等砂粒	橙	5YR6/6	良好	01住121，192，193	39
34	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文LRを充填	白色等砂粒	褐灰	7.5YR6/1	良好	K14	33
35	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文LRを充填	白色等砂粒	褐灰	7.5YR4/1	良好	J4	40
36	縄文土器	深鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文LRを充填	白色等砂粒	明褐灰	7.5YR7/1	良好	K11	35
37	縄文土器	深鉢	胴部	横位の沈線で区画，弧線文を施文し，磨消縄文　LR	石英等小砂粒	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	05住37	109
38	縄文土器	深鉢	口縁	地文縄文に斜格子の条線文，口唇直下内面に幅広の横位の沈線	白色砂粒	褐灰	5YR6/2	良好	K14	49
39	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文，頸部に沈線	白色砂粒	にぶい橙	5YR6/3	良好	05住35	46
40	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文，頸部に沈線で磨消無文帯	白色砂粒	にぶい橙	5YR6/4	良好	07住22，170，183，185，K14，K15	43
41	縄文土器	深鉢	口縁	荒い斜格子条線文	白色砂粒	にぶい橙	5YR7/3	良好	K14，J13	50
42	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文，頸部に沈線	白色砂粒	にぶい橙	5YR7/4	良好	K14	44
43	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文に斜格子の条線文	白色砂粒	にぶい橙	5YR6/4	良好	K14	47
44	縄文土器	深鉢	胴部	荒い斜格子条線文	白色小砂粒	にぶい赤褐	2.5YR5/4	良好	I14	51
45	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文に斜格子の条線文	白色砂粒	明褐灰	5YR7/2	良好	表採	48


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
0
10cm
1/3

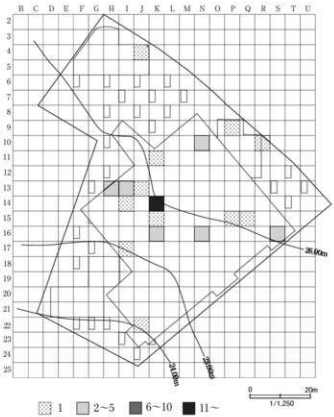
第9図　縄文土器(2)

第5表　縄文土器観察表(3)

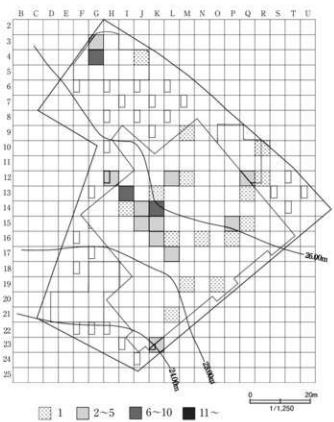
No.	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No.
46	縄文土器	小型鉢	胴部	沈線で弧線文等を描き，縄文を充填	白色等砂粒	にぶい赤褐	5YR5/4	良好	10住26	57
47	縄文土器	浅鉢	波状口縁	口唇に2列の刺突，以下に縄文LR	白色砂粒	灰褐	5YR4/2	良好	10住5	59
48	縄文土器	浅鉢	波状口縁	口唇に2列の刺突，以下に縄文LR	白色砂粒	灰褐	5YR4/2	良好	L16	60
49	縄文土器	深鉢	胴部	蛇行沈線で入り組み文，縄文充填	白色等砂粒	にぶい橙	5YR7/4	良好	P16	62
50	縄文土器	深鉢	胴部	蛇行沈線で入り組み文，縄文充填	白色等砂粒	にぶい橙	5YR4/6	良好	P15	64
51	縄文土器	深鉢	胴部	蛇行沈線で入り組み文，縄文充填	白色等砂粒	橙	5YR7/6	良好	P15	63
52	縄文土器	深鉢	頸部	沈線間に刻み	白色等砂粒	にぶい赤褐	2.5YR5/4	良好	07住一括	65
53	縄文土器	深鉢	口縁	口唇下沈線に刻み	白色等砂粒	橙	2.5YR7/6	良好	Q15	66
54	縄文土器	深鉢	口縁	口縁が肥厚し，口縁に帯縄文	白色砂粒	明赤褐	2.5YR5/6	良好	Q13	67
55	縄文土器	小型鉢	口縁	口唇に2条の沈線，以下縄文RL	白色砂粒	にぶい赤褐	5YR5/4	良好	表採，10住45	52
56	縄文土器	小型鉢	口縁	口唇に2条の沈線，以下縄文RL	白色砂粒	にぶい赤褐	5YR5/4	良好	05住21	55
57	縄文土器	小型鉢	口縁	口唇に1条の沈線，以下縄文LR	白色砂粒	黒褐	5YR3/1	良好	K14	54
58	縄文土器	小型鉢	口縁	口唇に1条の沈線，以下縄文LR	白色砂粒	灰褐	5YR6/2	良好	J15	53
59	縄文土器	深鉢	口縁	地文縄文，斜格子の条線文　口唇下内面に幅広の横位の沈線	白色砂粒	外）にぶい橙 内）淡赤橙	2.5YR6/4 2.5YR7/4	良好	K14	70
60	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文	白色砂粒	外）にぶい橙 内）赤灰	2.5YR6/3 2.5YR6/2	良好	J15	71
61	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文	白色砂粒	外）橙 内）にぶい赤褐	2.5YR6/6 2.5YR5/4	良好	J11	72
62	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文	白色砂粒	外）赤灰 内）にぶい赤褐	2.5YR4/1 2.5YR5/4	良好	K14	73
63	縄文土器	深鉢	胴部	地文縄文，斜格子の条線文	白色砂粒	外）褐灰 内）にぶい橙	5YR4/1 5YR6/3	良好	L21	74
64	縄文土器	深鉢	胴部	微隆起線文に魚文等	白色小砂粒	外）灰黄褐 内）にぶい褐	10YR4/2 7.5YR5/4	良好	O19	68
65	縄文土器	深鉢	胴部	微隆起線文に刻み	石英等小砂粒	灰黄褐	10YR6/2	良好	25住確認面	112
66	縄文土器	深鉢	口縁	縄文　無節L	砂粒	にぶい黄橙	10YR7/4	良好	K23	69
67	縄文土器	深鉢	口縁	条線文，柱状になるか　口唇内面に幅広い沈線	石英等砂粒	外）赤褐 内）赤褐	10R5/4 10R4/4	良好	L12	77
68	縄文土器	深鉢	胴部	斜位の条線文	砂粒	外）灰褐 内）明褐灰	5YR5/2 5YR7/1	良好	R10	75
69	縄文土器	深鉢	胴部	斜位の条線文	砂粒	外）褐灰 内）黒褐	5YR4/1 5YR3/1	良好	K13	76
70	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）赤橙 内）灰赤	10R6/8 10R4/2	良好	12住表採	87
71	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）にぶい橙 内）橙	7.5YR7/3 2.5YR7/6	良好	05住一括	88
72	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）淡赤橙 内）赤灰	2.5YR7/4 2.5YR6/1	良好	M9	89
73	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	石英等砂粒	外）にぶい橙 内）橙	5YR6/4 5YR7/6	良好	M13	81
74	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）にぶい赤褐 内）灰赤	2.5YR5/4 2.5YR5/2	良好	L17	90
75	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）明赤褐 内）暗赤褐	2.5YR5/8 2.5YR3/3	良好	L17	84
78	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	石英等砂粒	外）淡黄橙 内）灰白	10YR8/3 10YR8/2	良好	03住4区一括	82
79	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）明赤褐 内）にぶい赤褐	2.5YR5/8 2.5YR4/4	良好	L17	91
80	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）赤橙 内）赤灰	10R6/8 10R6/1	良好	L12	85
81	縄文土器	深鉢	胴部	斜位の条線文	石英等砂粒	外）淡黄橙 内）褐灰	10YR8/3 10YR4/1	良好	I13	78
82	縄文土器	深鉢	胴部	条線文	砂粒	外）赤褐 内）暗赤灰	10R4/3 10R4/1	良好	L17	86
83	縄文土器	深鉢	胴部	荒い斜格子条線文	石英等小砂粒	黒褐	10YR3/1	良好	12住52	115
84	縄文土器	深鉢	胴部	荒い斜格子条線文	石英等小砂粒	褐灰	10YR4/1	良好	12住420	116
85	縄文土器	深鉢	胴部	荒い斜格子条線文	石英等小砂粒	にぶい黄橙	10YR7/3	良好	M19	114
86	縄文土器	深鉢	胴部～底部	縄文LR	白色等砂粒	外）橙 内）赤灰	2.5YR6/8 2.5YR4/1	良好	G2，G3	94
87	縄文土器	深鉢	胴部～底部	縄文LR	白色等砂粒	外）橙 内）赤灰	2.5YR6/8 2.5YR5/1	良好	12住199	93
88	縄文土器	深鉢	底部		白色等砂粒	外）にぶい黄橙 内）黒褐	10YR7/3 10YR3/1	良好	J4	101
89	縄文土器	深鉢	底部		白色等砂粒	外）にぶい橙 内）灰白	7.5YR6/4 7.5YR8/1	良好	H12	100


46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
78
79
80
81
82
0
10cm
1/3(46～87)
83
84
85
86
87
88
89
0
10cm
1/4(88～89)

第10図　縄文土器(3)



加曽利B式土器の出土状況



第11図　縄文時代後期の遺物出土状況

後期の土器

（第8図9～13，第9～11図・図版3）

第8図9～13は後期に属する。9，10は縦位の沈線の中に刺突が充填される。称名寺2式に比定される。11，12は沈線しか確認できないが同時期のものであろう。13は口縁下に刺突が見られる。堀ノ内期の所産であろうか。

第9図14～40，42～45は加曽利B式土器である。このうち14～37は精製土器である。

第9図14～20は波状口縁を呈する深鉢で，口縁に沿って刺突と沈線をめぐらし，頸部より上半が無文となる。胴部には横位または斜位の条線文が施文される。頸部に沿って刺突がめぐっている。26も口縁が平縁で突起が見られ，刻みと沈線がめぐり以下無文である。21～25は波状口縁の深鉢で，口縁に刻みを付し地文はみられず，条線文のみが施文され，頸部に沈線により区画された無文帯（21，24，25）をもつ。27，28は波状口縁の深鉢で口縁に刺突と沈線がめぐり，その下に縄文が施文される。29～36は胴部破片であるが弧線文に縄文を充填する。37は横位の沈線と弧線文により区画し，縄文を施文，中心に沈線が引かれる。

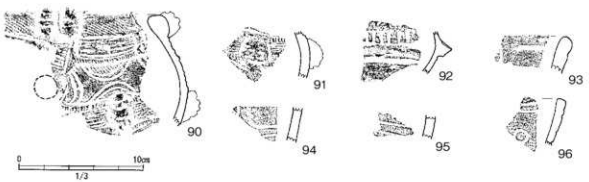
第9図38～45は粗製土器である。38～40，42，43は地文に縄文を施文，口縁部と胴部に斜格子状に条線文を施文した後，頸部に横位の沈線を2本引き，その間を無文帯に磨り消す。これらは同一個体と思われる。44，45は地文のない条線文が格子目状に施文される。

第9図41，第10図46～89は後期から晩期に属するものである。46～58は精製土器である。47，48は小型鉢になるか，口縁部が屈曲する形状を呈し，口縁に2段の刺突があり，以下縄文が施文される。49～51は深

鉢の胴部で，沈線で入り組み文を描き縄文を充填する。52，53は沈線文間に刻みを施文。54は口縁が肥厚し帯縄文が施文される。55～58は小型鉢の口縁で，口縁に1条から2条の沈線をめぐらし，以下縄文を施文する。

第9図41，第10図59～85は粗製土器である。41は口縁に紐線文であろうか，以下地文のない荒い条線文が施文される。59～63は縄文を地文に，斜格子の条線文が施文される。64は微隆起線文に無文帯を配する。65は擬似紐線文であろうか。66は縄文のみが施文される。後期の粗製土器であろう。67～85は縄文の地文を施文せず，条線文のみが胴部に施文される。83～85は条線文が荒い。後期から晩期の粗製土器であろう。86，87は縄文が施文された底部付近の土器である。88，89は施文のみられない底部片である。いずれも後期から晩期に属する。

加曽利Ｂ式土器の出土状況（第11図上）は出土数量が少ないので，出土傾向をつかむことはむずかしいが，Ｋ14グリッドにややまとまって集中して出土する傾向がみうけられる。それ以外の後期を中心とする土器の出土傾向はＫ14グリッド以外にもＩ13グリッド，Ｇ4グリッドにやや多く出土する。



第12図　縄文土器(4)

第6表　縄文土器観察表(4)

No.	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No.
90	縄文土器	注口付土器	口縁	口縁に横位の刻みをもつ貼り瘤が2個1単位，胴部には1個1単位で貼り瘤　胴部上位に円孔	白色小砂粒	橙（表面は黒褐色）	5YR6/6	良好	M16	135
91	縄文土器	注口付土器	胴部	胴部の1個1単位で貼り瘤	白色小砂粒	橙	5YR6/6	良好	M16	136
92	縄文土器	浅鉢	胴部	胴部に断面三角形の隆帯を貼付，上面に沈線	石英等小砂粒	浅黄橙	10YR8/3	良好	H2，H3	108
93	縄文土器	深鉢	口縁	枠状文に無文	砂粒	灰黄褐	10YR6/2	良好	表採	113
94	縄文土器	深鉢	胴部	枠状文	石英等砂粒	(外) 灰黄褐 (内) にぶい黄橙	10YR4/2 10YR7/2	良好	12住32	83
95	縄文土器	深鉢	胴部	枠状文	石英等砂粒	(外) 褐灰 (内) にぶい黄橙	10YR5/1 10YR7/2	良好	12住ベルト内一括	79
96	縄文土器	深鉢	口縁	波状口縁か，口縁直下に沈線2条，縄文帯の中に沈線で円を描く	石英等砂粒	褐灰	7.5YR4/1	良好	H16	29

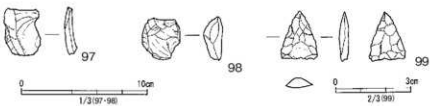
晩期の土器（第12図・図版3）

第12図90，91は注口付土器の同一個体である。口縁には横位の刻みを持つ貼瘤が2個1単位で付けられる。胴部中位には同様に横位の刻みを持つ貼瘤が1個1単位で貼付され，口縁の貼瘤の位置とはずれて付けられている。貼瘤から刻み目列が横位につながり，その間に弧状沈線が上下に施文され，縄文が充填される。胴部上位には円孔を穿つ。91は胴部に付けられた横位の刻みを持つ貼瘤の部分である。92は浅鉢であろうか，胴部につけられた断面三角形の隆帯。沈線を隆帯上面に施文。93は口縁部に枠状文が施文され，

枠状文間は無文で残されている。94は93と接合する。無文の枠状文の下半が施文されている。95も同一個体である。枠状文の一部がみられる。96は口縁に沿って2本の沈線がめぐり，その下に縄文を施文し，沈線で円形を描く。

縄文時代の石器（第13図・図版3）

明確に縄文時代所産の石器であるというものは少ないが，一応ここで扱うものとする。第13図97，98は剥片である。99は石鏃である。基部に抉りがみられない。出土位置が03号住居跡内からの一括出土であったが，グリッド位置に置き換えると，Ⅰ13・Ｊ13グリッド付近となる。



第13図　縄文時代の石器

第7表　縄文時代の石器観察表

遺物No.	種別		大きさ(cm)・重量(g)・石材・特徴	出土位置	整理No.
97	石器	剥片	縦 1.8　横 1.4　厚さ 0.4　重量 1.1g　チャート	表採	137
98	石器	剥片	縦 1.7　横 1.5　厚さ 0.8　重量 2.2g　石英	M13	138
99	石器	石鏃	幅 1.5　長さ 1.9　厚さ 0.4　重量 0.9g　チャート	03住4区一括	0310

第2節　弥生時代の遺物（第14図・図版3）

調査区内から出土した弥生土器は，図示した1点のみであった。

第14図100は頸部から胴部にかかる破片で，頸部を無文で，胴部には附加縄文を施文する。結束が2段みられる。弥生時代後期と考えられる。出土位置は古墳時代の竪穴住居跡（12住）内の覆土中からの出土であった。

第14図　弥生土器

第8表　弥生土器観察表

遺物No.	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No.
100	弥生土器	壺	頸部	無文の頸部,結束附加縄文(RL・L)	石英等砂粒	にぶい橙	7.5YR6/4	良好	12住444	117

第Ⅲ章　古墳時代

調査区域内で調査された古墳時代の竪穴住居跡は9軒，土坑は時期未確定のものもあるが10基検出されている。住居跡の時期は概ね前期と後期の2期あり，前期に該当するものが6軒，後期は3軒である。現状保存区域内にも，竪穴住居跡と推定できる遺構を7軒検出している。これらは古墳時代に属するものと思われるが，時期を特定することはできなかった。その他に土坑1基が検出されている。

第１節　古墳時代前期の竪穴住居跡

古墳時代前期に該当する竪穴住居跡は第9表のとおり6軒ある。これらの住居跡は標高25m以上の標高の高い側で検出されている。

第9表　古墳時代前期　竪穴住居跡一覧表

〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値

遺構名称	位置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	炉	主柱穴	周溝	貯蔵穴	出入口ピット	備考
		長軸・主軸	短軸	深さ								
01号住居跡	N10	5.12	4.56	0.42	方形	N-43°-E	炉	0本	全周	なし	なし	
06号住居跡	P14	3.10	2.86	0.43	方形	N-48°-E	なし	0本	なし	なし	なし	
07号住居跡	O16	6.92	6.40	0.54	方形	N-58°-E	炉	4本	全周	南東壁側1ヶ所	なし	
08号住居跡	S17	推定6.6〔5.2〕	推定5.4	0.46	長方形	N-32°-W	炉	3本（1本未調査）	全周（一部未調査）	調査部分ではなし	調査部分ではなし	南西壁が調査区域外
09号住居跡	O19	3.30	3.20	0.32	方形	N-4°-W	なし	4本	全周	なし	なし	
12号住居跡	G5	7.90	7.64	0.80	方形	N-34°-W	炉	4本	一部欠	南東壁側1ヶ所	南東壁側1ヶ所	

第15図　古墳時代前期の竪穴住居跡

01号住居跡（第16図～第18図・図版4，5）

調査区中央，N10グリッド周辺で検出されている。

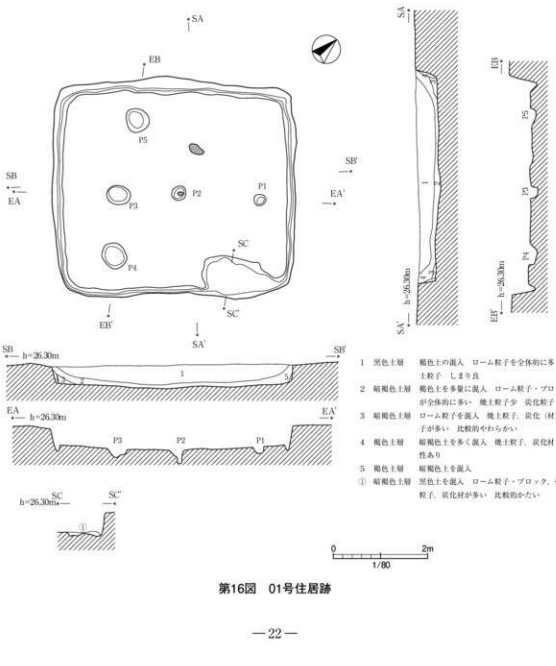
住居跡の形状が長軸・短軸とも5mほどの方形の竪穴住居跡である。北西―南東軸よりも，北東―南西軸の方が50cm以上長く，やや長方形状を呈する。各壁は平面的にほぼ直線で，各隅はゆるやかに屈曲している。

住居跡の覆土は壁際に堆積した崩落土とその後に緩やかに自然埋没した状況をうかがわせる土層であった。

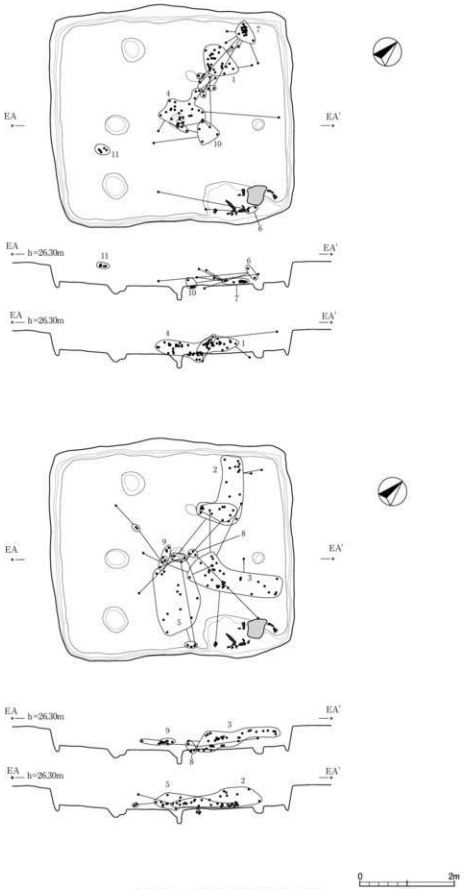
住居跡の内部構造は全周する周溝，ピット5ヵ所，

第10表　01号住居跡

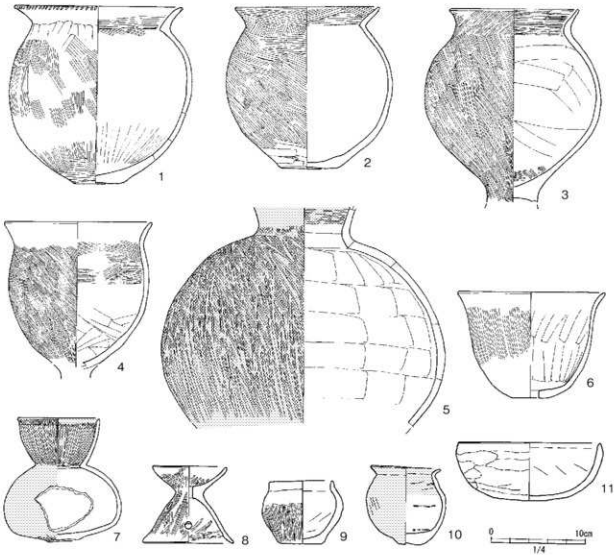
位置	N10			形態	方形			
規模（m）	主軸・長軸		5.12	短軸		4.56	深さ	0.42
長軸方向	N-43°-E							
炉	位置		中央やや北より	規模（cm）			36	20
ピット		位置		性格	規模（cm）			
					縦	横	深さ	
	P1	北東壁側中央		柱穴？	28	26	13	
	P2	住居中央		—	32	30	25	
	P3	南西壁側中央		柱穴？	50	40	13	
	P4	南隅側		—	56	50	17	
	P5	西隅側		—	50	50	15	



第16図　01号住居跡



第17図　01号住居跡遺物出土状況



第18図　01号住居跡出土遺物

炉などが検出されている。

周溝は幅が約10cm，深さ約10cmで比較的しっかりと掘り込まれていた。周溝の覆土は暗褐色土が主体で，黒色土・ローム粒子・焼土粒子を混入し，やや軟弱な土層であった。

5ヶ所で検出された**ピット**は位置や規模が不規則で柱穴を想定することは難しい。P1，P2は径が30cm前後で比較的小さなものであり，P3，P4，P5は50cmから60cm弱の径がある。深さではP2が25cmと一番深いが，他は13cmから17cmとほとんどが浅いピットであった。

P1は暗褐色土が主体で，ロームブロックを混入し，比較的やわらかい土層である。P2は暗褐色土が主体で，黒色土・ロームブロックを混入しやわらかい土層である。P3は暗褐色土が主体で，黒色土をわずかに混入し，ロームブロックも混入するやわらかな土層である。P4，P5はP3と同様の土層であった。

東隅のSC－SC′ラインの調査は当初，壁際に落ち込みが確認されたため行われたものである。土層は暗褐色土が主体で，黒色土・ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化材などが混入され，踏み固められた土層であった。当初は貯蔵穴を想定していたが，確認できなかった。床面を構築するために掘り方に埋められた土層の一部と考えられる。

第11表　01号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 甕	口径	18.0	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は球形を呈し，底部はやや上げ底	口唇部外面刻み目が周回する，口縁部ハケ整形の後ヨコナデ　胴部ハケ整形の後ヘラナデ　内面口縁部ハケ整形　胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい黄橙色　10YR7/4 良好	口縁部1/4欠損	北隅側一帯 上層主体で床直上まで	0103
		底径	5.4						
		器高	16.8						
		最大径	19.4						
2	土師器 甕	口径	15.6	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は球形を呈し，底部はやや上げ底	外面口縁部，胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形，胴部ヘラナデ	石英・スコリア・長石を含む 黄橙色　7.5YR7/4 黒褐色　7.5YR3/1 良好	胴部1/3欠損	北隅側一帯 下層に多く上層まで	0105
		底径	6.0						
		器高	17.0						
		最大径	17.7						
3	土師器 台付甕	口径	13.8	口縁部は外反し，胴部は球形を呈する　最大径が中位に位置する	外面口縁部，胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形，胴部ヘラナデ，ハケ整形	石英・長石を含む にぶい黄橙色　10YR7/4 良好	脚部欠損	中央から北東壁一帯 上層多く床直上まで	0104
		底径	—						
		器高	(20.5)						
		最大径	18.8						
4	土師器 台付甕	口径	15.6	口縁部は外反し，胴部は下半部でつぼまる無花果状を呈する　台付は欠損	外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ整形　内面口縁部ヨコナデ胴部ハケ整形，ヘラナデ	石英・長石を含む にぶい黄橙色　10YR7/3 良好	口縁部1/3欠損 脚部欠損	中央一帯 床直上から上層まで分散	0102
		底径	—						
		器高	(15.5)						
		最大径	14.9						
5	土師器 壺	口径	—	口縁部は外反し，胴部は扁球形を呈する	外面口縁部ヘラナデ，ハケ整形　胴部ハケ整形の後ヘラミガキ　内面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石・海綿骨針（少）を含む 赤色　10R5/8 良好	口縁部・底部欠損 胴部1/2残 外面、内面口縁部赤彩	中央から南東壁 床直上から上層まで	0111
		底径	—						
		器高	(22.9)						
		最大径	30.0						
6	土師器 鉢	口径	17.8	胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する　底部中央に1孔	外面口縁部ヨコナデ，胴部ハケ整形　内面口縁部ヨコナデ体部ハケ整形，ヘラナデ	石英・長石を含む にぶい橙色　7.5YR7/4 良好	1/3欠損	東隅から南東壁 上層から床直上まで	0108
		底径	4.0						
		器高	11.2						
		最大径	—						
7	土師器 坩	口径	8.8	口縁部は内湾気味に立ち上がり，開部は張らずなだらかなカーブで移行する　最大径が胴部下位にあり，以下急につぼまる	外面口縁部ヘラミガキ胴部ヘラナデ　内面口縁部ヘラミガキ胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 橙色　2.5YR7/8 良好	口縁部一部欠損 外面、内面口縁部赤彩 胴部に人為的な打ち欠き	北隅一帯 床直上主体から上層	0101
		底径	3.2						
		器高	13.2						
		最大径	12.5						
8	土師器 器台	器受径	(7.9)	器受部外側中央に段があり，脚部の二開く	器受部外面はハケ整形後，粗いミガキ　口縁内外を横ナデ　内面はミガキ　脚外面はハケ整形後，粗いミガキ　脚内外横ナデ　内面には一部ハケ整形後，粗いミガキ	白色細砂粒 外）にぶい橙7.5YR6/4 内）にぶい橙7.5YR6/3 良好	器受部内外及び脚外面に赤彩がわずかに残存	中央主体 床直上	0109
		脚径	(9.7)						
		器高	8.1						
		—	—						
9	土師器 鉢	口径	6.2	短い口縁が直立　最大径は胴部上位	口縁内外横ナデ，胴部外面下半縦位ハケ整形，胴部内側ヘラナデ	白色小砂粒 外）にぶい橙7.5YR7/4 内）にぶい橙7.5YR7/3 良好		中央 中層	0106
		底径	4.8						
		器高	6.7						
		最大径	8.6						
10	土師器 鉢	口径	(7.4)	口縁部く外反　最大径は胴部中位	口縁から頸部の外面に横ナデ　胴部にハケ整形の痕跡　内面はヘラナデ　輪積み痕が残る	砂粒 外）赤　10R4/8 内）橙　7.5YR7/6 良好	底部を除き外面前面と内面口縁から頸部まで赤彩	中央一帯 床直上と中層	0107
		底径	3.1						
		器高	(8.3)						
		最大径	(8.5)						
11	土師器 坏	口径	15.2	えみを持つ底部	口縁内外横ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	白色小砂粒 外）にぶい橙7.5YR5/3 内）にぶい橙7.5YR6/4 良好		南隅側 上層	0110
		底径	—						
		器高	6.1						
		最大径	—						

床面はほぼ平坦に造られているが，中央部分がやや低く，壁際と比べると10cmほどの差がみられる。

炉は中央北寄りに検出されており，床面が焼土化した地床炉であった。規模は20cm～30cmで大きなものではなかった。

位置を測定して取り上げた**遺物**は341点あり，縄文土器が3点ある以外はすべて土師器であった。出土遺物の多くは，住居跡の北東側半分にまとまる傾向にある。また，東隅には40cmほどの焼土ブロックとその周辺に14点の炭化材が出土している。多くが床面近くからの検出であった。

出土遺物の中から復元された11点の土器を図示した。

第18図1は北隅側にまとまり，覆土下層から上層までにまたがって出土する。4は床面直上層から覆土上層に広く分散し，住居跡の中央にまとまっている。6は東隅周辺の床面直上層から上層にかけて出土する。7は住居跡北隅の床面直上層を主体に出土している。8，10は住居跡中央の床面近くからの出土であった。

2は北西隅側から流れ込んだように出土している。3も同様に北東壁から中央に向かって流れ込むように上層から下層にかけて出土している。5も南東壁側から流れ込んだような出土傾向をもつ。9は住居跡の中央の覆土中層からまとまって出土している。11は一つだけ単独で住居跡南西側の覆土上層から出土しており，この住居跡に伴うものとは考えにくい。

06号住居跡（第19図～第21図・図版6）

調査区中央，P14グリッドで検出されている。

住居跡の形状が長軸・短軸ともに3mほどの方形の竪穴住居跡である。各壁は平面的にやや膨らみを持ち，各隅もゆるやかに屈曲している。

住居跡の覆土は自然埋没が想定されるが，埋没当初の5層・4層・3層と1層・2層との間には時間差があるように見られる。

第12表　06号住居跡

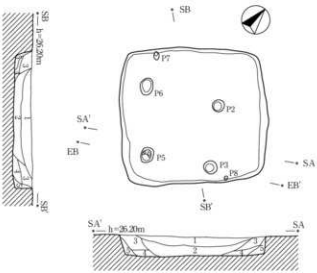
位置	P14			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸	3.10		短軸	2.86	深さ	0.43
長軸方向	N-48°-E						
炉	位置	なし		規模（cm）	—		—
ピット		位置	性格	規模（cm）			
				縦	横	深さ	
	P1	欠					
	P2	住居中央やや北	柱穴	26	26	9	
	P3	南西壁側中央	—	30	28	14	
	P4	欠					
	P5	南隅側寄り	柱穴	33	28	36	
	P6	西隅側寄り	柱穴	38	28	18	
	P7	北西壁際	壁柱穴	18	12	6	
	P8	南東壁際	壁柱穴	10	8	—	

住居跡の内部構造は周溝が検出されず，柱穴状のピット6ヵ所が検出されている。炉は検出されなかった。P2の北側の床面が一部焼土化しており，炉の可能性もあったため，半裁して調査したが，土層から炉とは考えられないと判断された。

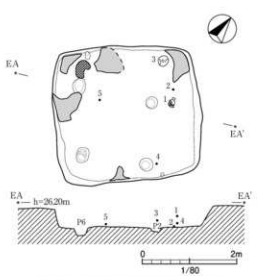
6ヶ所検出されている**ピット**は，位置や規模から主柱穴を想定することは難しい。P2，P3，P5，P6は径が30cm前後の比較的小さなものであり，深さも10cmから20cmほどといずれも浅いピットである。P7，P8は壁際から検出されている。径が10cmから20cmと小さく深さも浅いものであった。

P2は暗褐色土が主体で，ロームブロック・焼土粒子を混入し，やわらかい土層であった。P3は暗褐色土が主体で，褐色土・焼土粒子を混入しやわらかい土層であった。P5，P6はP3と同様の土層であった。

床面は南隅のP5周辺で若干掘りすぎてしまったが，ほぼ平坦である。



第19図　06号住居跡



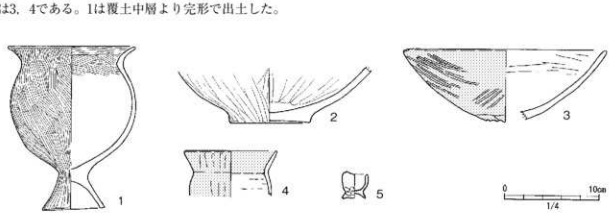
第20図　06号住居跡遺物出土状況

1　黒色土層　　ローム粒子を全体に
2　暗褐色土層　褐色土をわずかに混入，ローム粒子，焼土粒子を全体に
3　褐色土層　　暗褐色土をわずかに混入，焼土粒子，炭化粒子をわずか
4　暗褐色土層　褐色土を多く混入，炭化粒子，焼土粒子，しまり良く硬い
5　褐色土層　　焼土を多量，炭化材，粘性あり

位置を測定して取り上げた**遺物**は12点しかなく，すべて土師器であった。出土傾向は出土量が少ないため散漫であるが，住居跡の北東側にやや片寄る傾向がみられた。また，北隅から西隅にかけて大きな焼土ブロックが数ヶ所まとまって床面直上から検出されている。同時に，西隅には炭化粒子のブロックが約40㎝の範囲にまとまって床面から出土していた。

出土した遺物は5点図化することができた。

床面直上層から出土している遺物は第21図2，5であった。また，覆土の下層・中層から出土していたのは3，4である。1は覆土中層より完形で出土した。



第21図　06号住居跡出土遺物

第13表　06号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 小形台付甕	口径	13.6	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は下半部でつぼまり胴花果状を呈し，台部は「八」の字状に開く	外面ハケ整形 内面口縁部ヨコ撫 胴部ハケ整形 胴部へラナデ 台部へラケデ	石英・黒色粒子・長石を含む 橙色 7.5YR7/6 良好	口縁部1/3欠損	北東壁側中央 中層	0601
		底径	6.7						
		器高	17.2						
		最大径	13.4						
2	土師器 壺	口径	—	上げ底気味の底部から球形の胴部へ移行する	外面ヘラナデ 内面ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい黄橙色 10YR7/3 良好	底部残存	北隅側 床直上	0604
		底径	8.6						
		器高	(5.6)						
		最大径	—						
3	土師器 高杯	杯径	21.6	やや内湾しながら大きく開いて口縁に至る	杯外面はヘラケズリ後，結節を横ナデし，脚部全面にミガキ，平滑に仕上げ 杯の底近くに脚との接合のためヘラケズリによる整形 内面はヘラケズリ後ミガキにより平滑に仕上げる	細砂粒 外）赤 10R5/6 内）にぶい橙 5YR6/4 良好	杯部のみ残存 杯部外面全体に赤彩	北隅 下層	0602
		脚径	—						
		器高	(7.7)						
		—	—						
4	土師器 坩	口径	(9.8)	坏部は内湾しながら開き，口縁もわずかに内湾しながら立ち上がる 脚部は欠落しているが，脚高して間くと推定	外面は全体へラケズリ後，結節くミガキ 口縁の内面はヘラケズリ後，ミガキ 脚部はナデ	砂粒少 外）赤 10R4/8 内）にぶい黄橙10YR7/4 良好	赤彩は外面では全面で，内面では口縁から脚部の下まで	南東壁中央 下層	0605
		底径	—						
		器高	(4.8)						
		最大径	(8.8)						
5	土師器 ミニチュア土器	口径	2.6	わずかな差であるが胴部中位に最大径 底部から大きく開く台部	手捏ねで成形 台部の接合を指頭で整形	砂粒少 外）にぶい橙 7.5YR6/4 内）にぶい橙 7.5YR5/4 良好	台付の鉢または後を模したもの	中央 床直上	0603
		台径	2.4						
		器高	2.8						
		最大径	2.7						

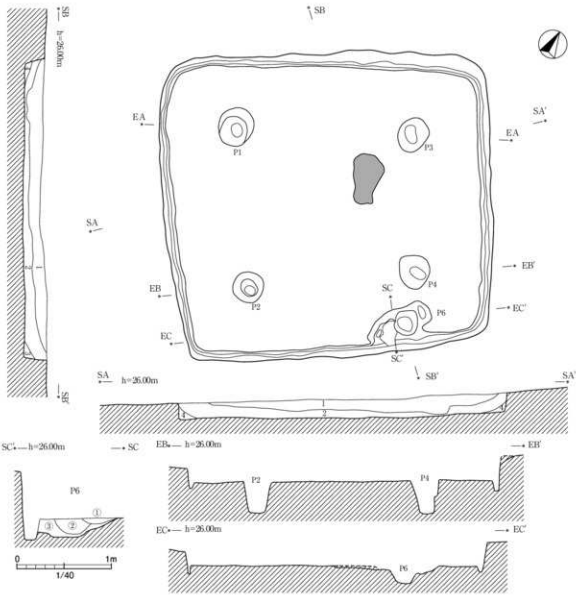
07号住居跡（第22図～第25図・図版7～9）

調査区中央，O16グリッド周辺で検出されている。

住居跡の形状が長軸・短軸が7m弱で方形を呈する竪穴住居跡である。しかし，西隅が外側に突き出し，台形に歪んでいる。壁は平面的にほぼ直線で，隅もゆるやかに

第14表　07号住居跡

位置	O16			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸	6.92		短軸	6.40	深さ	0.54
長軸方向	N- 58°-E						
炉	位置	中央やや北寄り		規模（cm）	104	66	
ピット		位置	性格	規模（cm）			
				縦	横	深さ	
	P1	西隅側	主柱穴	84	85	77	
	P2	南隅側	主柱穴	64	64	80	
	P3	北隅側	主柱穴	76	62	67	
	P4	東隅側	主柱穴	70	70	72	
	P5	欠					
	P6	南東壁中央やや東	貯蔵穴	52	50	40	



① 黒褐色土層　褐色土を混入，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子　しまり良
② 暗褐色土層　褐色土，ロームを混入，しまり良
③ 暗褐色土層　焼土粒子を多　やわらかい

1 黒褐色土層　褐色土を部分的に混入，ローム粒子を多　焼土粒子全体に
2 褐色土層　全体的に暗褐色土を混入，粘性あり
3 暗褐色土層　褐色土をわずかに混入，焼土粒子,炭化材をわずか，粘性あり
4 暗褐色土層　褐色土を混入，ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子をわずか

第22図　07号住居跡

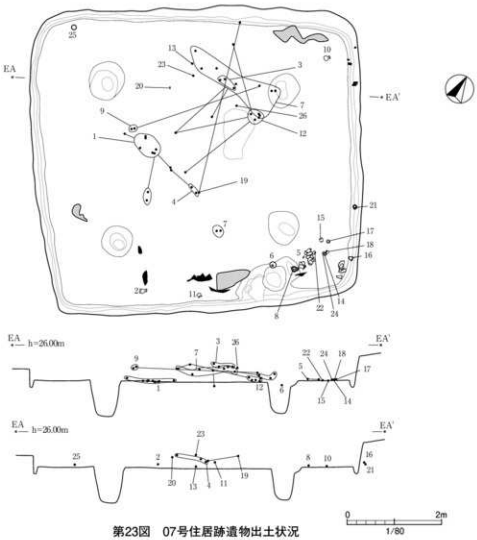
屈曲しているが，西隅のみ隅円を呈している。

住居跡の覆土は自然埋没が想定される土層の堆積を呈している。

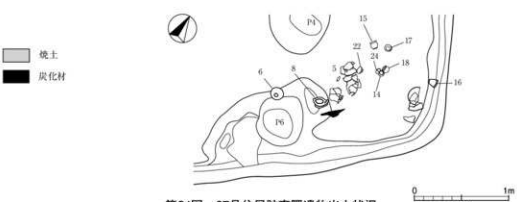
住居跡の内部構造は全周する周溝，主柱穴4ヵ所，貯蔵穴1ヵ所，炉1ヶ所が検出されている。

周溝は幅が15cmほどで，深さも10cm～20cmと深くしっかりしたものが全周している。南東壁側では貯蔵穴と一部重複している。覆土は暗褐色土が主体であり，ロームブロックを多く混入し，焼土粒子も全体的にみられ，やわらかい土層である。南東壁部分の覆土には焼土粒子と炭化粒子が多く混入していた。

主柱穴は4ヵ所検出されている。P1，P2，P3，P4は4基とも径が60cm～80cmと比較的大きなものであり，深さも70cm～80cmといずれも深くしっかりしたピットであった。P1は竪穴住居跡の形状にあわせて，やや外側にずれて位置している。



第23図　07号住居跡遺物出土状況



第24図　07号住居跡東隅遺物出土状況

Ｐ1は暗褐色土が主体で，ローム中小ブロック，1cmほどの炭化材，焼土粒子少量を混入し，やわらかい土層であった。Ｐ2は暗褐色土が主体で，ローム小ブロックが混入し，炭化粒子・焼土粒子を少量混入する比較的硬くしまった土層である。Ｐ3はＰ1と同様の覆土であった。Ｐ4は黒褐色土が主体で，暗褐色土の混入が多く，ローム大中ブロック，焼土粒子少量を混入し，他のピットよりも硬い土層であった。この柱穴の覆土上層には硬くしまったロームによる貼り床が確認されている。

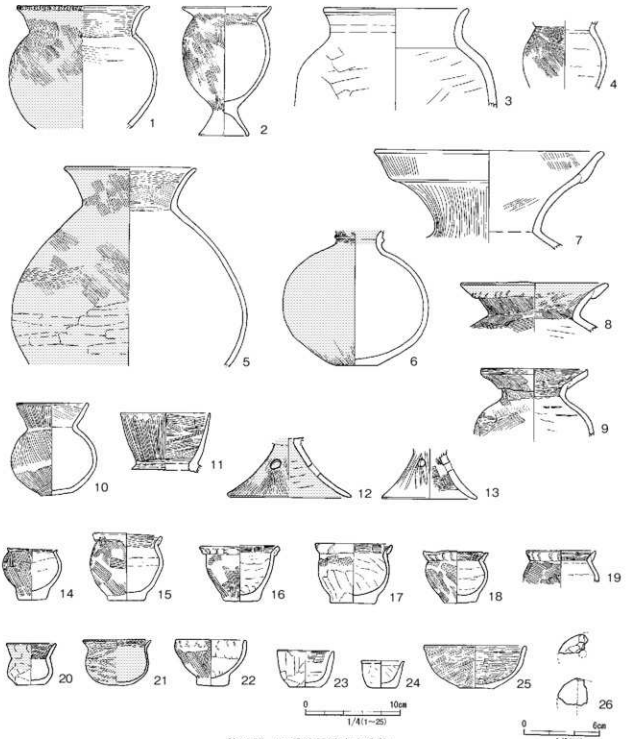
貯蔵穴は，南東壁際に周溝と重なるようにＰ6が検出されている。貯蔵穴の主体部は径が50cmで深さ40

cmほどであったが，周囲に付帯施設のような広がりが長さ約130cm，幅約70cmの範囲でみられた。

床面は軟弱なため掘りすぎた部分もあるが，全体ではハードロームで平坦な面を構築する。

位置を測定して取り上げた**遺物**は262点出土した。石が3点出土しているほかはすべて土師器であった。出土状況は全体に散漫であるが，住居跡の北隅側にややまとまる傾向がみられる。この住居跡では鉢類の出土が多いが，特に東隅の床面上に7点ほどの鉢がまとまって出土していた。（第24図）

また，北隅及び南東壁側に焼土ブロックが床面直上から数ヶ所検出されている。同時に，南東壁側及び



第25図　07号住居跡出土遺物

第15表　07号住居跡出土遺物観察表(1)

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No
1	土師器 甕	口径 14.0 底径 — 器高 (13.0) 最大径 15.7		口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈する	口唇部外面刻み目　口縁部・胴部ハケ整形、内面口縁部ハケ整形、胴部ヘラナデ	石英・海綿骨針・黒色粒子・赤石を含む 5YR/6 良好	胴下部・底部欠損	中央一帯 床直上	0717
2	土師器 小形台付甕	口径 9.7 底径 5.4 器高 13.6 最大径 9.4		口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は鼓長状を呈し、台部は「八」の字状に開く	外面ハケ整形　内面口縁部ヨコナデ、ハケ整形、体部ヘラナデ　台部ヘラナデ	石英・長石を含む 5YR/4 良好	口縁部1/2欠損 黒鉛1.7g/Kg-1	南東壁側 下層	0701
3	土師器 甕	口径 (15.5) 底径 — 器高 (10.5) 最大径 (21.4)		胴下半を欠損　最大径を胴部中位にもち、緩やかに内湾しながら頸部に至る　頸部でも緩やかに曲がり外反しながら縁やかに開く	胴部外面ヘラケズリ目調整から頸部まで内外面ともに横ハケ整形、平滑に仕上げられる　胴部ヘラナデ	砂粒やや多 内)ニぶい赤褐　5YR5/3 外)にぶい橙　5YR6/4 良好		北西側 上層	0725
4	土師器 小形甕	口径 — 底径 — 器高 (7.1) 最大径 (8.8)		口縁、底部欠損　胴部中位に最大径をもつが、やや緩やかに　頸部緩やかに曲がる	頸部から胴部上半にハケ整形　内面口縁下半に横ナデ、胴部ヘラナデ	砂粒やや多 外)にぶい黄橙10YR6/3 内)にぶい黄橙10YR7/4 良好	器面の剥離が激しい	中央 中層から上層	0721
5	土師器 甕	口径 14.0 底径 — 器高 (21.0) 最大径 24.9		口縁部は「く」の字状に外反し、胴部の張りはなく、胴部は下位に最大径をもつ	外面口縁部ハケ整形、胴部ナデ　内面口縁部ハケ整形、胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 7.5YR/4 良好	口縁部1/4残存 胴上部1/2残存 赤彩	東隅 床直上	0716
6	土師器 甕	口径 — 底径 4.8 器高 (14.4) 最大径 15.6		上下を押しつぶした扁球形の胴部　口縁部は急角度に立ち上がり、頸部に断面三角形の稜を有する	外面頸部ハケ整形　胴部ヘラナデ、内面ヘラナデ	石英・チャート・海綿骨針・長石を含む 5YR/6 良好	口縁部欠損 外面、内面口縁部赤彩	南東壁側 P6内上層	0703
7	土師器 甕	口径 (24.4) 底径 — 器高 (10.5) 最大径 —		胴部欠損　口縁は頸部で屈曲し、外反しながら大きく開き、有段になりわずかに屈折	頸部から口縁にかけて外面は縦位のミガキ　胴部から内面は縦位のミガキ　内面は有段部分で方向が中や変化するミガキ	白色ながら砂粒やや多 内)にぶい黄橙10YR7/3 内)淡黄～灰黄2.5YR8/3 7/2 良好		北西壁側 中層から上層	0718
8	土師器 甕	口径 15.6 底径 — 器高 (5.2) 最大径 —		胴部から張り引き締まった頸部を強く屈曲し、外反しながら開く　口縁は複合口縁	複合器下半に指頭による整形を残す。口縁内外を横ハケ整形から胴部上位をハケ整形　内面は頸部にハケ整形痕が残るが、その上位をミガキにより平滑に仕上げる　胴部ヘラナデ	砂粒やや多 外)橙　7.5YR6/6 内)赤　10R5/6 内)淡黄橙　7.5YR8/4 赤彩　10R4/6	胴内面　ぼろぼろに劣化　赤彩は内面頸部のミガキ部分から口縁複合器外面まで	南東壁側 P6内上層	0714
9	土師器 甕	口径 (11.2) 底径 — 器高 (7.0) 最大径 (12.6)		胴部下半は欠損　胴部中位に最大径を持ち、頸部はゆるく窄ぶしまり、口縁は複合ネリで中央外側に屈曲させてあさく開く　口縁部端部をわずかにつまんで面立させる	外面胴部ハケ整形　頸部から複合口縁部にかけてもハケ整形　内側は口縁から頸部にかけて横ハケ整形　胴部ヘラナデ、輪積み痕が残る	砂粒少 外)橙　5YR7/6 内)にぶい橙　7.5YR6/4 良好		中央西寄り 中層から上層	0719
10	土師器 坩	口径 7.6 底径 3.4 器高 9.8 最大径 9.1		胴部は球形　頸部で屈曲し、口縁は直線的に開く	外面全面で縦位のミガキ。口縁・胴部2段　内面は下位まで横位、斜位のミガキ	細砂粒 外)橙　7.5YR7/6 内)橙　2.5YR6/6 良好		北隅 床直上	0702
11	土師器 坩	口径 9.5 底径 — 器高 (6.3) 最大径 —		胴部は矢張っているが、口縁は頸部で著しく屈曲しわずかに内湾しながら直立する	口縁外面ハケ整形後、縦位のミガキ　頸部は横位のガキがわずかの残る　内面は口縁上部が横位のハケ整形、下半が横位のミガキ	砂粒少 外)淡黄橙　7.5YR8/4 内)にぶい橙　7.5YR7/3 良好		南東壁際中央 中層	0715
12	土師器 器台	器受径 — 脚径 (13.1) 器高 (16.5) — —		器受部欠損　やや外反しながら大きく開く	外面ヘラケズリ後、丹念なミガキ　内面ヘラケズリもそのまま残し、指を横ナデ	砂粒やや多 外)赤　10R5/6 良好	脚の中位に3孔　胎土自体がきわめて脆弱外面に赤彩	中央炉周辺 床直上及び上層	0724
13	土師器 器台	器受径 — 脚径 (5.1) 器高 (5.3) — —		器受部欠損　やや外反しながら直線的に開く	脚部外面ハケ整形後、粗いミガキ。脚内外面に横ナデ　内面はハケ整形	細砂粒やや多 外)橙　2.5YR6/8 内)にぶい橙　5YR7/4 良好	脚の上位に3孔	北西壁側中央 床直上	0723
14	土師器 鉢	口径 5.2 底径 2.9 器高 5.5 最大径 6.1		台部と見られる底部は胴部を薄くし、球状の胴部、頸部で屈曲してもう短い口縁が外反する	胴部は縦位のハケ整形、内面は口縁ハケ、胴部にナデ整形するが輪積み痕が残る	砂粒少 外)にぶい黄橙10YR7/4 内)にぶい黄橙10YR7/3 良好		東隅 床直上	0710
15	土師器 鉢	口径 7.4 底径 4.0 器高 7.1 最大径 7.8		最大径を胴部中位にもち、口縁は頸部より短く、やや外反し、折り返す	口縁外面はナデ、胴部からは縦の一重ネリで横ハケ整形　口縁内面横位のハケ整形、胴部は輪積み痕を程度のナデ	砂粒少 外)にぶい黄橙10YR7/3 内)にぶい黄橙10YR6/4 良好	胴部の外面中口縁などに土器の表面の剥離多　底に朱　口縁の内側に赤彩みるいは朱の付着か	東隅 床直上	0704
16	土師器 鉢	口径 8.5 底径 5.6 器高 5.8 最大径 —		底部よりわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁は頸部で屈曲してあさく開く折り返す	口縁外面に指頭痕を残す。胴部は荒いハケ整形　内面は縦部分で横位のハケ整形、胴部はヘラナデにより荒い整形、輪積み痕を残す	砂粒少 外)橙　5YR6/6 内)にぶい橙　5YR6/4 良好		東隅 床直上	0712
17	土師器 鉢	口径 8.2 底径 4.8 器高 6.2 — — 胴径 7.6		ゆるく膨らむ胴部　口縁は頸部からゆるく外反しながら開く　折り返し口縁	口縁外面は指頭による成形で指頭痕を残す　胴部上半荒いハケ整形、下半指頭による整形痕を残す　口縁内面横位のハケ整形、頸部ナデ　胴部ヘラナデ	砂粒少 外)にぶい黄橙10YR6/4 内)にぶい黄橙10YR6/4 良好	胴部内面の一部に朱が付着	東隅 床直上	0705
18	土師器 鉢	口径 6.9 底径 3.4 器高 6.7 胴径 6.7		胴部上位に胴部の最大径をもち、口縁は頸部で屈曲し直線的にたき開く。折り返し口縁	口縁外面は指頭による成形で指頭痕を残す　胴部ハケ整形、輪積み痕が残る　口縁内面横位のハケ整形　胴部はナデ	砂粒少 外)橙　7.5YR7/6 内)暗赤褐2.5YR5/8 良好	胴部の外面中口縁などに土器の表面の剥離多　底に朱　口縁の内側に赤彩みるいは朱の付着か	東隅 床直上	0706
19	土師器 鉢	口径 (7.4) 底径 — 器高 (3.5) 最大径 (8.0)		胴部下半から底部まで欠損　胴部中位に最大径をもち、頸部で屈曲し、折り返しによる複合口縁	複合口縁部外面に指頭整形痕を残し、胴部はハケ整形　内面は口縁に横位のハケ整形、胴部はナデ　輪積み痕が残る	砂粒 外)橙　7.5YR7/6 内)にぶい橙　7.5YR7/4 良好		中央から北西壁 中層から上層	0722

北隅には炭化材が9点ほど床面から検出されている。

接合等により遺物26点を図化することができた。

第25図7は北西壁側に分散し，中～上層で出土している。3，20，23，26は住居跡北西側の覆土上層から出土している。4，9，19は住居跡中央に広がり，覆土上層から中層にかけて出土する。11は南東壁際の中層からの出土であった。

12は炉周辺の床直上にまとまって出土し，一部破片が覆土上層より出土している。1は住居跡中央の床直上から，2は南東壁際の下層から完形での出土であった。13は北西壁側の床面直上からの出土である。6，8は貯蔵穴（P6）の上層から出土している。住居跡東隅一帯の床面から5，14，15，16，17，18，22，24がまとまって出土している（第24図・図版7-3）。21は北東壁際の周溝上から出土している。10は北隅の壁際床面直上から出土している。25は西隅の床面直上からの出土であった。

第15表　07号住居跡出土遺物観察表(2)

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No
20	土師器 鉢	口径	(5.4)	胴部中位に胴の最大径を持ち，開度で底面し，底線の長い口縁が開く	口縁外面ヨコナデ　口縁内面には八ケ整形，胴部手捏による指頭痕を残す	砂粒少 外)橙赤　10R3/6 内)橙赤　10R3/6 良好	赤砂は外面胴部中位から口縁，内面は口縁まで赤みがある　内面の底部には朱らし赤跡	北西側上層	0711
		底径	3.1						
		器高	4.5						
		胴径	4.8						
21	土師器 坩	口径	7.3	器厚は薄く，胴部の最大径を中位にもち，口縁は開度でゆるく外反しながら開く	外面全面に横位・斜位にミガキ　内面は口縁に横位のミガキ　胴部荒いハケナデ	砂粒やや多 外)赤　10R5/6 内)赤　10R5/8 良好	赤砂は内外面全すとこなく全面	北東壁際床直上	0707
		底径	2.6						
		器高	4.8						
		胴径	6.6						
22	土師器 鉢	口径	7.6	底部から内湾しながら立ち上がり口縁で直立	手捏による成形後，外面に荒いハケ整形，口縁の一部に指頭痕を残す　内面ナデによる整形するが輪積み痕を残す	砂粒少 外)橙　7.5YR7/6 内)浅黄橙　7.5YR8/4 良好	胴内部に朱であろうか，ややくすんでいるが明赤褐色(2.5YR5/6)がみられる	東隅床直上	0709
		底径	3.3						
		器高	4.9						
		最大径	—						
23	土師器 鉢	口径	(6.0)	底部からほぼ直線的に立ち上がる	外面は縦位のヘラケズリ　底部もヘラケズリのまま　内面口縁付近はハケ整形，体部ヘラナデ	砂粒少 外)ふい橙　7.5YR6/4 内)明灰褐　7.5YR7/2 良好		北西壁側中央上層	0726
		底径	(3.4)						
		器高	3.9						
		最大径	—						
24	土師器 鉢	口径	(2.6)	わずかに開きながら立ち上がり，口縁で短く外反	外面は手捏痕，ナデ　内面は指頭によるナデ	細砂粒 外)明黄橙　10YR7/6 内)黒　10YR1.7/1 良好		東隅床直上	0713
		底径	3.3						
		器高	2.9						
		最大径	—						
25	土師器 鉢	口径	10.9	底部から内湾しながら立ち上がり口縁に至る	内外面ともミガキ　外面は斜位，内面は横位　でいねいなミガキでなく荒いため，ごつごつした感じ	砂粒少 外)にぶい黄橙10YR6/4 内)にぶい黄橙10YR7/4 良好		西隅床直上	0708
		底径	3.4						
		器高	4.6						
		最大径	—						
26	土製品 土玉	高さ	(2.2)	球形　1/8残存(3.8g)		白色砂粒 外)にぶい橙　7.5YR5/4 良好		北西側上層	0728
		最大径	(2.2)						
		孔径	(0.6)						

08号住居跡（第26図～第28図・図版10）

調査区東端，S17グリッド周辺で検出されている。調査区の際であったため，東壁側が調査区域外に出ていた。

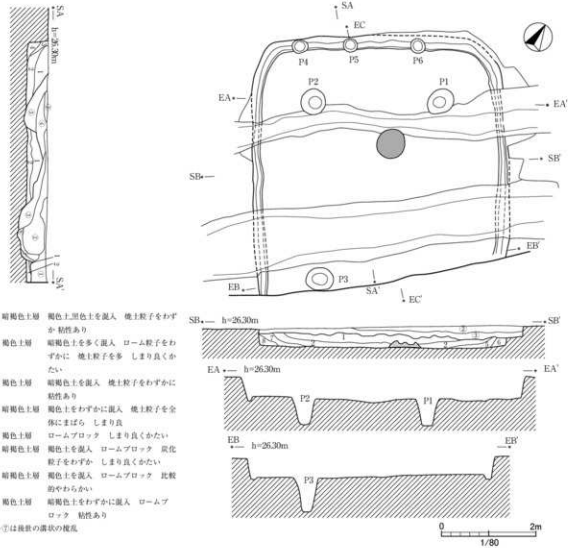
調査できた範囲では長軸方向で約5.2mであるが，柱穴の位置から推定すると，約6.6mほどになるとみられる。短軸が5.4mであり，**住居跡の形状**が長方形の竪穴住居跡である。各壁は平面的にやや膨らみを持ち，各隅もゆるやかに屈曲し隅円を呈している。

第16表　08号住居跡

位置	S17			形態	長方形		
規模（m）	主軸・長軸		推定6.6	短軸	5.4	深さ	0.46
長軸方向	N- 32°-W						
炉	位置	中央やや北寄り		規模（cm）	64	60	

		位置	性格	規模（cm）		
				縦	横	深さ
ピット	P1	北隅側	主柱穴	62	50	58
	P2	西隅側	主柱穴	56	52	58
	P3	南隅側	主柱穴	58	48	69
	P4	北西壁際周溝内	壁柱穴	36	30	25
	P5	北西壁際周溝内	壁柱穴	30	30	10
	P6	北西壁際周溝内	壁柱穴	32	30	10

住居跡の覆土は住居跡の中央を東西にはしる2本の溝状遺構により大半を撹乱されているが，残存する



1	暗褐色土層	褐色土黒色土を混入　焼土粒子をわずか 粘性あり
2	褐色土層	暗褐色土を多く混入　ローム粒子をわずかに　焼土粒子を多　しまり良くかたい
3	褐色土層	暗褐色土を混入　焼土粒子をわずかに粘性あり
4	暗褐色土層	褐色土をわずかに混入　焼土粒子を全体にまばら　しまり良
5	褐色土層	ロームブロック　しまり良くかたい
6	暗褐色土層	褐色土を混入　ロームブロック　炭化粒子をわずか　しまり良くかたい
7	暗褐色土層	褐色土を混入　ロームブロック　比較的やわらかい
8	褐色土層	暗褐色土をわずかに混入　ロームブロック　粘性あり

①～⑦は掘鍬の溝状の撹乱

第26図　08号住居跡

土層から自然埋没が推定される。

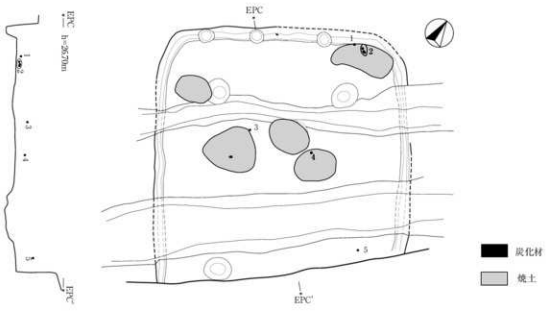
住居跡の内部構造は全周するとみられる周溝，主柱穴3ヵ所，炉1ヶ所，壁際の周溝内に小ピット3基が検出されている。

周溝は幅が15cmほどで，深さも10cm前後で掘り込まれている。覆土は暗褐色土が主体であり，黒色土を少量混入し，炭化材の小破片もわずかみられ，比較的やわらかい土層である。

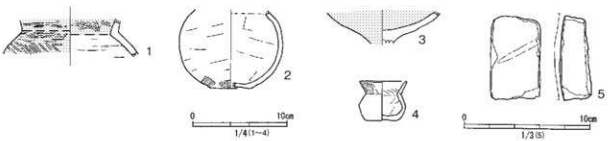
住居跡の一部が調査区域外に出ているため，**主柱穴**のピットは3ヵ所しか検出されなかった。Ｐ1，Ｐ2，Ｐ3は3基とも径が50cm～60cmと比較的大きく，大きさもそろっている。深さは60cm～70cmといずれも深くしっかりしたピットであった。

Ｐ1とＰ2の覆土は暗褐色土が主体で，褐色土を多く混入し，ローム粒子・ロームブロックを多量に混入するしまりのある覆土であった。Ｐ3は暗褐色土が主体で，褐色土が混入し，ローム粒子を多量に，焼土粒子を少量混入していた。

壁柱穴はＰ4，Ｐ5，Ｐ6の3基が検出された。これらのピットの覆土は暗褐色土が主体で，黒色土を混入し，ローム粒子を少量に含む比較的やわらかい覆土であった。



第27図　08号住居跡遺物出土状況



第28図　08号住居跡出土遺物

第17表　08号住居跡出土遺物観察表　　（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 壺	口径	—	頸部のみ残存　頸部で屈曲して口縁に開く	外面ハケ整形後，残存する全面ミガキ　内面口縁部ヘラケ　底部ミガキ，ミガキ，胴部はナデ	白色小砂粒 外）極暗赤褐7.5R2/3 内）口縁　極暗赤褐7.5R2/3 胴部　黒褐7.5YR3/1 良好	外面は残存する全面と口縁内面に赤彩	北隅 下層	0805
		底径	—						
		器高	(4.1)						
		最大径	—						
2	土師器 壺	口径	—	小さな底部から最大径を胴部中位にもつ球形状の胴部　口縁欠損	胴部外面をハケ整形後，ナデ整形　胴部内面はヘラナデによりきれいに仕上げる	白色細砂粒 外）にぶい橙5YR6/4 内）灰褐　5YR6/2 良好		北隅 床直上	0804
		底径	(4.4)						
		器高	(6.2)						
		最大径	(11.0)						
3	土師器 高坏	坏径	—	やや内湾して大きく開く	内外面ナデ整形　内面口縁近くに横ナデがみられる	白色、雲母小砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　10R5/6 良好	坏部の残存部分では内外面ともに赤彩	中央 中層	0802
		脚径	—						
		器高	(2.4)						
4	土師器 鉢	口径	(5.0)	胴部最大径を中位にもち，そろばん玉状に胴部中位で屈曲する　口縁は頸部で屈折し直線的に開く	手捏後，口縁外面に幅の狭いヘラナデ　口縁内面はナデ	白色砂粒 外）にぶい赤褐2.5YR5/4 内）明褐灰　7.5YR7/2 良好		中央 中層	0801
		底径	3.3						
		器高	4.2						
		最大径	5.0						
5	石器　砥石	幅	3.9	厚さ　2.4	表面に面全体に擦痕，溝状の擦痕もあり			東隅 中層	0803
		長さ	(6.6)	重量　108.9g					

床面は大きな撹乱を受けているため，大きく削られていて，多少の凹凸はあるが，本来の床面はほぼ平坦であると推定された。

位置を測定して取り上げた**遺物**は68点出土した。石が2点，縄文土器が2点，近世の陶磁器が1点出土し，そのほか63点が土師器であった。出土傾向は出土量が少ないため散漫である。また，北隅及び中央に焼土ブロックが数ヶ所床面直上から検出されている。同時に，北西壁際及び中央に炭化材の小片が2点床

面から検出されている。

接合等により遺物5点を図化することができた。

第28図3，4は住居跡中央の覆土中層から出土する。5は住居跡東隅の覆土中層からの出土であった。1，2は住居跡北隅の床面直上層または下層から出土している。

09号住居跡（第29図～第32図・図版11，12）

調査区中央，O19グリッドで検出されている。

住居跡の形状が長軸・短軸で3mほどの方形を呈する小さな竪穴住居跡である。各壁は平面的にほぼ直線で，各隅はゆるやかに屈曲している。

第18表　09号住居跡

位置	O19			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		3.3	短軸	3.2	深さ	0.32
長軸方向	N-4°-W						
炉	位置	なし		規模（cm）		—	—
ピット		位置	性格	規模（cm）			
				縦	横	深さ	
	P1	北西隅側	主柱穴	24	23	20	
	P2	北東隅側	主柱穴	30	26	12	
	P3	南東隅側	主柱穴	21	18	11	
	P4	南西隅側	主柱穴	18	18	14	

住居跡の覆土は単純な埋没状況を示し，自然埋没と推定される。

住居跡の内部構造は全周する周溝，柱穴4ヵ所が確認され，貯蔵穴・炉は検出されていない。

周溝は幅が10cm～15cmほどで，深さも10cm前後としっかりしたものが全周している。覆土は暗褐色土が主体であり，ローム小ブロックや炭化粒子を混入し，比較的やわらかい覆土である。

4ヶ所検出された**柱穴**は主柱穴と考えられるが，位置がやや壁側に寄って位置している。P1，P2，P3，P4は4基とも径が18cm～30cmと比較的小さなものであり，深さも11cm～20cmといずれも浅いピットであった。

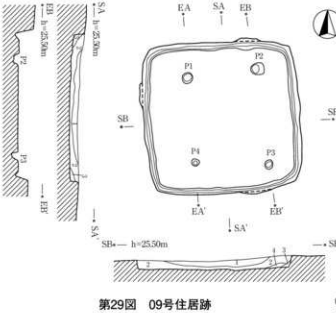
P1は暗褐色土が主体で，ローム大小ブロックを混入し，比較的硬い覆土であった。P2も暗褐色土が主体で，ローム小ブロックが混入し，比較的硬くしまった覆土である。P3も暗褐色土が主体で，ローム小ブロックが混入し，焼土粒子もみられる比較的硬くしまった覆土である。P4も暗褐色土が主体で，ローム小ブロックが混入し，焼土粒子も少しみられる覆土である。

床面はほぼ平坦に形成されている。

位置を測定して取り上げた**遺物**は54点出土した。取り上げられた遺物はすべて土師器であった。遺物の出土状況は散漫であるが，住居跡の北西壁際に完形の遺物がまとまって出土していた。また，南西隅側に50cmほどの範囲で焼土ブロックが1ヶ所床面近くで検出されている。

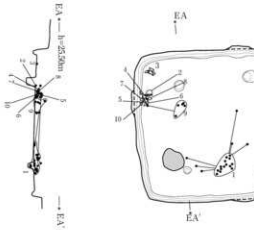
接合等により遺物10点を図化することができた。出土遺物数が少ない割には，完形で出土した遺物も多く，さらに接合率も高いため，図化した遺物も多くなった。

第32図1は住居跡の南側の中央一帯に広く分布し，床面直上層を主体に中層にかけて出土している。9はP1の南側周辺の床面直上層から覆土上層にかけて出土していた。3は住居跡北西隅の床面直上で出土している。2，4，6，7，8，10は西壁際にまとまり，床面直上層から覆土下層で出土している。ほとんどが完形に近い状況での出土であった（第31図・図版12-1）。5はこのまとまりの中から出土しているが，覆土の下層から中層にかけて出土しており，さらに破片が住居跡の東壁際の中層から上層にかけても出土し，分散しての出土であった。



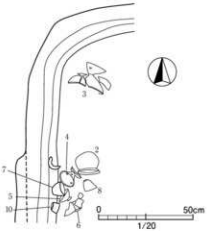
第29図　09号住居跡

0　2m
1/80



第30図　09号住居跡遺物出土状況

0　2m
1/80



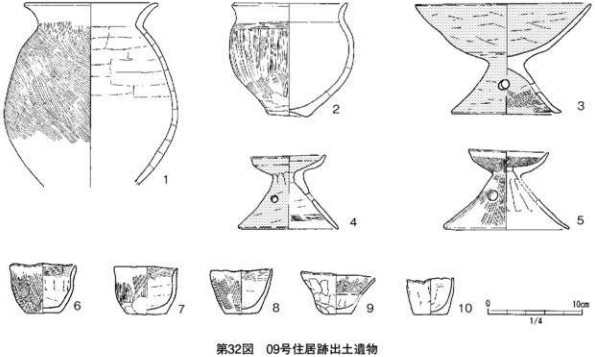
第31図　09号住居跡北西隅遺物出土状況

0　50cm
1/20

第19表　09号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 壺	口径	14.4	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は長目の算盤玉状を呈する	外面口縁部ヨコナデ　胴部ハケ整形　内面口縁部ヨコナデ　体部ヘラナデ	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石を含む 浅黄橙　7.5YR3/4 黒褐　7.5YR3/1 良好	口縁部1/6　残存 胴上部1/4残存	南壁際一帯 床直上から中層	0909
		底径	—						
		器高	(19.3)						
		最大径	18.7						
2	土師器 小型壺	口径	12.4	広口の壺　口縁部は外反し、胴部は扁球形を呈し、底部は上げ底	外面口縁部ヨコナデ　胴部ハケ整形の後ヘラミガキ	海綿骨針・石英・長石を含む にぶい橙　7.5YR7/4 赤　10R5/6 良好	完存品	西壁際中央 床直上	0901
		底径	4.5						
		器高	12.0						
		最大径	13.3						
3	土師器 高坏	坏口径	18.7	短い脚が八の字に開く坏部は底近くで屈曲し、緩やかに内湾しながら大きく開く	外面全体をハケ成形後、丁寧にナデ　内面はナデ、脚はヘラケズリ、ハケ整形	白色、雲母細砂粒やや多 内）赤　10R5/8 外）赤　10R4/6 良好	脚内面も含め赤彩。ところどころぼろ剥中位に3孔	北西隅 床直上	0910
		脚径	11.6						
		器高	11.8						
		—	—						
4	土師器 器台	器受径	7.9	器受部は大きく開き、口縁部でやや屈曲しさらに上がる　脚は直線的に開く	器受部口縁内外横ナデ、体部外面ナデ　脚内面接合部にヘラケズリ、ハケ整形後ナデ整形　内面は器受部でナデ、脚部でヘラナデ、ハケ整形、板を横ナデ	白色小砂粒多 内）赤　10R5/6 外）脚 にぶい橙7.5YR7/4 良好	脚中位に3孔　赤彩は外面全面と器受部内面	西壁際中央 下層	0902
		脚径	10.7						
		器高	7.9						
		最大径	—						
5	土師器 器台	口径	8.5	器受部は大きく内湾しながら開き、口縁部でやや屈曲し立ち上がる　脚はやや外反しながら開く	器受部口縁内外面横ナデ、残り内外面はすべていねいなミガキ　器受部内面も丁ねいなミガキ　脚部内面はヘラケズリ後、板を横ナデ	細砂粒少 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好	脚中位に3孔される、外面ではまきいに塗れされているが、内面の孔の縁辺を打ち欠く	西壁際中央・東壁際下層	0903
		底径	13.5						
		器高	8.5						
		最大径	—						



第32図　09号住居跡出土遺物

第19表　09号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
6	土師器鉢	口径	7.0	胴部は底部から内湾しながら立ち上がり，中位で直立　口縁は頸部からやや外傾して立ち上がる	手捏後，外面では胴部ハケ整形，口縁に横ナデ　内面では上半にヘラナデ，下半ナデ整形	細砂粒少 外）浅黄橙　7.5YR8/4 内）浅黄橙　7.5YR8/6 良好		西壁際中央 床直上	0904
		底径	3.6						
		器高	5.2						
		最大径	—						
7	土師器鉢	口径	6.7	胴部は底部から内湾しながら立ち上がり，中位で直立　口縁は頸部からやや外反して立ち上がる	手捏後，外面では胴部ハケ整形，口縁に横ナデし，底部縁辺にケズリ　内面では口縁ではけ整形，胴部はナデ整形	白色，雲母細砂粒やや多 外）にぶい黄橙10YR7/4 内）にぶい黄橙10YR7/3 良好		西壁際中央 床直上	0906
		底径	4.1						
		器高	5.0						
		最大径	—						
8	土師器鉢	口径	6.5	胴部は底部からやや内湾しながら立ち上がり，口縁までそのまま立ち上がる	手捏後，外面では胴部ハケ整形，口縁に横ナデ　内面では上半ではけ整形，胴部にはていねいなナデ整形	細砂粒少 外）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR7/3 良好		西壁際中央 下層	0905
		底径	3.8						
		器高	4.7						
		最大径	—						
9	土師器鉢	口径	7.9	胴部は底部から直線的に大きく開き，中位でわずかに屈曲し，口縁でやや内湾して立ち上がる	手捏後，外面では胴部に粗いヘラケズリ　内面は下半で指頭の痕跡を残し，上半でミガキ	砂粒 外）にぶい橙　7.5YR5/4 内）にぶい橙　7.5YR6/4 良好		中央西寄り 床直上から上層	0907
		底径	3.0						
		器高	4.5						
		最大径	—						
10	土師器鉢	口径	4.9	底部からやや内湾しながら立ち上がり口縁に至る	外面ヘラナデ　内面ヘラナデ	細砂粒少 外）にぶい黄　2.5Y6/3 内）にぶい黄　2.5Y6/3 良好		西壁際中央 床直上	0908
		底径	3.4						
		器高	3.9						
		最大径	—						

12号住居跡（第33図～第38図・図版13～16）

調査区北端，G5グリッドからG6グリッド周辺で検出されている。

住居跡の形状が長軸7.9m，短軸7.6mでほぼ方形を呈する大型の竪穴住居跡である。各壁は平面的にほぼ直線で，各隅はほとんど丸みをもたない。

住居跡の覆土は単純な埋没状況を示し，自然埋没が想定される。

住居跡の内部構造は周溝と主柱穴4ヵ所が確認され，壁柱穴16ヶ所，貯蔵穴1ヶ所，性格は不明であるが2ヶ所のピットがあり，一応補助柱穴とした。北隅の落ち込みも一応ピットとした。炉は1ヶ所検出されている。

周溝は幅が15cm～25cmほどで，深さも4cmほどの浅い部分から，20cmと深くしっかりと掘り込まれた部分とがあり，北東壁から南東壁の中央までの住居跡全体の4/5ほどめぐっている。周溝内には北西壁から

南東壁にかけて，**壁柱穴**が15ヶ所と西隅の周溝外に1ヶ所の壁柱穴が確認されている。P12は周溝の検出時から確認されており，覆土は暗褐色土を主体としながらも褐色土がわずかに含まれている。ローム粒子が多量に混入し，炭化材も少量あり，やわらかい覆土であった。床面からの深さが約20cmほどである。P11の覆土は暗褐色土を主体とし，ローム粒子が多量に混入し，焼土粒子・炭化材も少量検出されるやわらかい覆土であった。

第20表　12号住居跡

位置	G5			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		7.9	短軸	7.64	深さ	0.8
長軸方向	N-34°-W						
炉	位置	中央やや北西		規模（cm）	70	86	
ピット		位置	性格	規模（cm） 縦	横	深さ	
	P1	南隅側	主柱穴	68	58	52	
	P2	西隅側	主柱穴	82	64	54	
	P3	北隅側	主柱穴	76	60	54	
	P4	東隅側	主柱穴	76	70	74	
	P5	南東壁側やや東	貯蔵穴	56	46	45	
	P6	南東壁側中央	出入り口	50	46	20	
	P7	欠					
	P8	欠					
	P9	北東壁側中央	補助柱穴	39	30	20	
	P10	北隅側中央寄り	補助柱穴	28	26	20	
	P11	西隅周溝内	壁柱穴	30	30	12	
	P12	北西壁周溝内	壁柱穴	36	14	14	
	P13	北西壁周溝内	壁柱穴	20	16	5	
	P14	北西壁周溝内	壁柱穴	18	14	8	
	P15	北西壁周溝内	壁柱穴	16	16	8	
	P16	北西壁周溝内	壁柱穴	19	16	6	
	P17	北西壁周溝内	壁柱穴	20	18	11	
	P18	北西壁周溝内	壁柱穴	12	8	6	
	P19	北西壁周溝内	壁柱穴	14	12	7	
	P20	北西壁周溝内	壁柱穴	16	10	12	
	P21	南西壁周溝内	壁柱穴	20	15	15	
	P22	南西壁周溝内	壁柱穴	20	13	—	
	P23	南東壁周溝内	壁柱穴	64	16	19	
	P24	南東壁周溝内	壁柱穴	17	13	5	
	P25	南東壁周溝内	壁柱穴	18	12	2	
	P26	南東壁周溝内	壁柱穴	28	24	18	
	P27	北隅壁際	—	150	90	19	

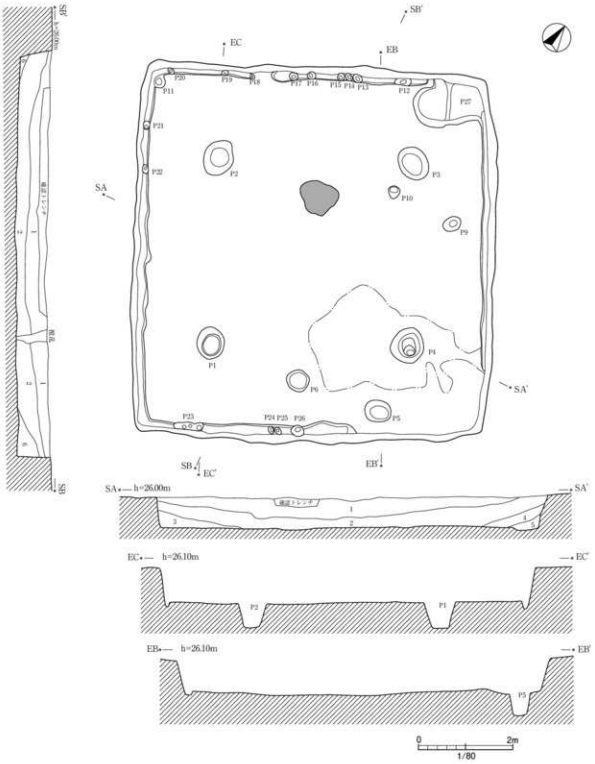
主柱穴は4ヵ所検出されている。P1，P2，P3，P4は4基とも径が60cm～80cmと大きなものであり，深さも50cm～70cmといずれも深くしっかりしたピットであった。各ピットの覆土はいずれも同様で，暗褐色土を主体としながらも褐色土を含み，ローム粒子を混入したしまりの良い土層であった。これらピットの上層部分では10cm～20cmほどの厚さでロームが踏み固められた状態で検出されている。柱の周囲を貼り床したものとみられる。

P5は**貯蔵穴**とみられる。暗褐色土が主体で，黒色土が少量含まれる。ロームブロック・粒子が混入し，焼土粒子も少量みられる。粘性があり，やわらかい土層であった。P6は**出入り口**のためのピットとみられる。暗褐色土が主体で，黒色土が少量含まれる。ローム粒子が多量に混入し，焼土粒子が少量みられるしまりのある覆土である。

P9・P10は不規則な位置にあり，性格を明確にすることはできなかった。一応**補助柱穴**とした。P9は暗褐色土が主体で，ローム粒子・ブロックが混入し，ややしまった土層であった。P10は褐色土が主体で，ローム粒子が混入し，やややわらかい土層であった。P27は北隅の壁際に位置するが，深さが19cmほどと浅く，貼り床の一部と思われる。

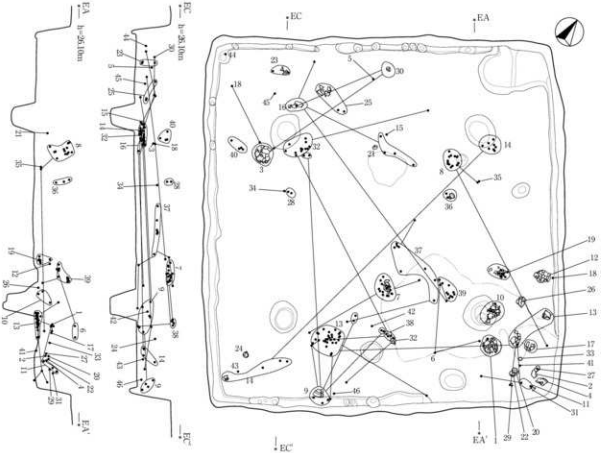
炉は住居跡中央よりやや北東に位置している。70cm×86cmの範囲で床面が焼土化した地床炉であった。

床面の状況は概ね平坦に見えるが，住居跡北側の炉周辺一帯が南東壁側から比較して10cmほど低くなっている。主柱穴のP4を中心とした東隅一帯の床面が踏み固められて硬化していた。また，貯蔵穴であるP5北西側に8cmほどの高さの周堤がみられた。断面を図化して判断できたが，調査時には平面で確認することはできなかった。床硬化面が観察されたP4周辺では，他の床面部分よりも高くなっているようにみられたが，他の部分が軟弱な床であり，多少掘り過ぎたものである。

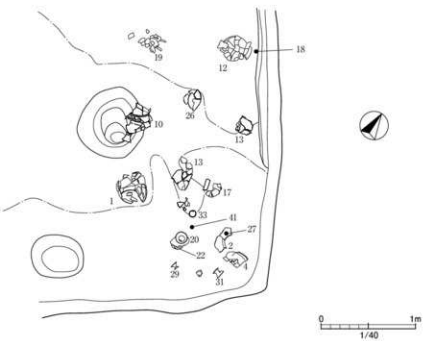


1　黒色土層　　褐色土をわずかに混入　焼土粒子，ローム粒子わずかに　しまり良
2　褐色土層　　暗褐色土を多く混入　ロームブロック・粒子をまばらに　焼土粒子わずかに　しまり良くかたい
3　暗褐色土層　褐色土を混入　ローム中小ブロックをまばらに　ローム粒子を全体に　しまり良くかたい
4　暗褐色土層　褐色土を混入　ローム中小ブロックをまばらに　ローム粒子を全体に　炭化材　しまり良くかたい
5　暗褐色土層　褐色土を多く混入　ロームブロック・粒子　しまり良くかたい
6　暗褐色土層　褐色土を混入　焼土，炭化粒子をわずかに　ローム粒子　やや粘性あり

第33図　12号住居跡



第34図　12号住居跡遺物出土状況



第35図　12号住居跡東隅遺物出土状況

位置を測定して取り上げた遺物は447点出土した。取り上げられた遺物は縄文土器が8点，弥生土器が1点，須恵器が3点，石が10点含まれていた。石の内訳は敲石2点，砥石2点，軽石が1点あり，その他は自然石であった。残りの遺物はすべて土師器であった。出土傾向は遺物が多いものの全体にまとまる傾向は特になく，ほぼ平均的に分散して出土する。覆土中に焼土や炭化材，粘土等のブロックはまったくみられなかった。

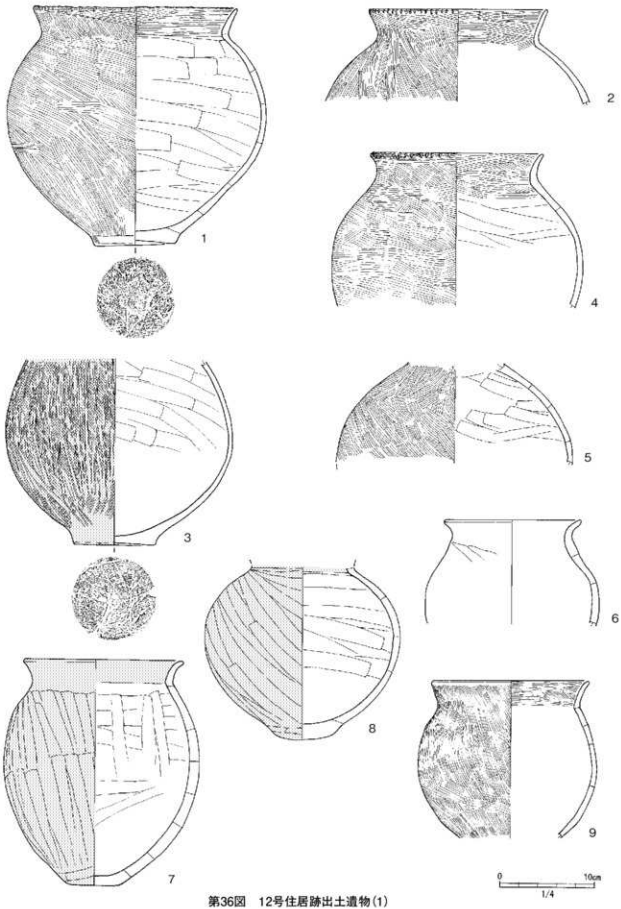
接合等により遺物47点を図化することができた。

住居跡の覆土上層を主体に出土するものは6，7，28，38，39，40であった。これらの遺物はこの住居跡との関係は薄いものと判断される。中層から上層にかけて出土しているものは8，36である。下層から中層にかけて出土しているものは1，2，3，4，5，9，11，12，14，15，16，17，18，20，21，22，23，24，25，27，29，30，31，33，34，37，42，44，45がある。床面直上から下層で出土する遺物は10，13，19，26，35，41，43，46であった。その中で東隅一帯から出土するものは1，2，4，10，12，13，18，19，20，22，26，27，29，33，41である（第35図・図版13）。ほとんどが床面近くからの出土であった。16は西隅から中央が周辺の下層から出土する。15，21は中央が北側の中層から出土する。46は南東壁際の下層から出土する。43は南隅下層からの出土である。32は住居跡中央のＰ2周辺を主体として，南東壁側などに広く分布し，覆土下層からの出土であった。

第21表　12号住居跡出土遺物観察表(1)

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 甕	口径	21.4	広口の甕　口縁部は外反し，胴部は扁球形を呈し，底部は上げ底	口唇部外面刻み目　口縁部ハケ整形　外面ロクロナデ・胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形，体部ヘラナデ	石英・黒色粒子・スコリア・長石を含む にぶい黄橙　10YR7/3 良好	完形品 外面胴部下半部スス付着 底部木葉痕	東隅 中層	1201
		底径	8.3						
		器高	25.2						
		最大径	27.5						
2	土師器 甕	口径	19.0	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は球形を呈する	口唇部外面刻目　外面ハケ整形　内面口縁部ハケ整形，胴部ヘラナデ	石英・チャート・長石を含む 浅黄橙　10YR8/4 橙　5YR7/6 黒褐　10YR3/1 良好	口縁部1/4	東隅 下層	1247
		底径	8.2						
		器高	—						
		最大径							
3	土師器 壺	口径	—	胴部はほぼ球形を呈し，底部は上げ底状	外面ハケ整形の後ヘラミガキ　内面ヘラナデ，底部木葉痕	角閃石・黒色粒子・石英・長石を含む 橙　7.5YR7/6 良好	胴下部残存 外面赤彩 底部木葉痕	南西壁側P2南 中層	1244
		底径	9.0						
		器高	(19.6)						
		最大径	24.2						
4	土師器 甕	口径	16.4	口縁部はゆるく外反し，胴部は扁球形を呈する	口唇部外面刻み目　口縁部・胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形，体部ヘラナデ	石英・長石を含む 明赤褐　2.5YR5/8 黒褐　7.5YR3/1 良好	口縁部から胴上部1/3残存	東隅 下層	1210
		底径	(16.3)						
		器高	26.6						
		最大径							
5	土師器 壺	口径	—	胴部の張りなく，無花果状の胴部を呈するものと推定する	外面ハケ整形　内面ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 黒褐　10YR3/1 良好	胴上部1/2残存	北西壁側中央 中層	1246
		底径	—						
		器高	(10.4)						
		最大径	25.1						
6	土師器 壺	口径	14.6	口縁部はゆるく短く外反し，肩の張りなく胴長化する	外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ，内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい橙　7.5YR6/4 良好	口縁部1/3欠損 胴上部1/4残存	南東壁側 上層	1235
		底径	(11.0)						
		器高	18.4						
7	土師器 甕	口径	16.2	口縁部は外反し，胴部は胴長状を呈する	外面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石・角閃石を含む 赤橙　10R6/8 良好	口縁部・体部一部欠損 外面・内面口縁部赤彩 内面下半部スス付着	中央 上層	1206
		底径	5.8						
		器高	23.9						
		最大径	20.5						
8	土師器 甕	口径	—	底部は丸底状を呈し，胴部は球形	外面胴部斜行するヘラケズリ　内面ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 橙　5YR7/8 良好	上半部欠損 外面・内面口縁部赤彩	中央北寄りP10周辺 中層から上層	1207
		底径	(6.3)						
		器高	(18.2)						
		最大径	20.7						
9	土師器 甕	口径	16.8	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は球形を呈する	外面ハケ整形，内面口縁部ハケ整形，胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 橙　7.5YR7/6 良好	底部欠損	南東壁周辺 下層から中層	1211
		底径	—						
		器高	(16.6)						
		最大径	19.0						

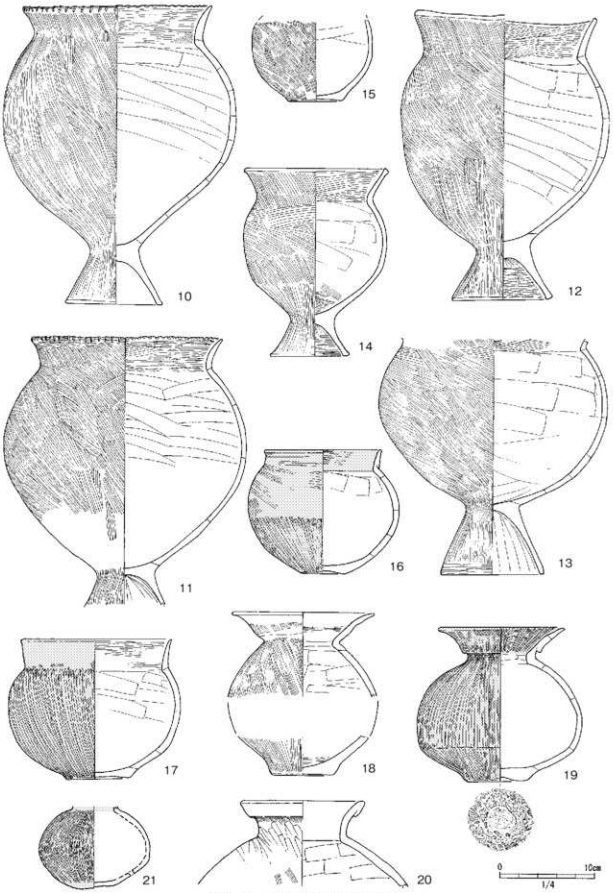


第36図　12号住居跡出土遺物(1)

第21表　12号住居跡出土遺物観察表(2)

(　　)復元値　(　　)現存値

No.	器種	計測値(cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
10	土師器 台付甕	口径	19.9	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は下半部でつぼまり無花果状を呈し、台部は「ハ」の字状に開く	口唇部外面刻み目、口縁部、胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形　体部ハラナデ、ハケ整形　台部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 赤黒　2.5YR2/1 良好	完形品 外面胴部中部スス付着	東隅P4周辺 床直上から下層	1202
		底径	10.0						
		器高	31.8						
		最大径	24.7						
11	土師器 台付甕	口径	10.2	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は下半部でつぼまり無花果状を呈し、台部は「ハ」の字状に開く	外面口縁部、胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形、胴部ヘラナデ、ハケ整形　台部ヘラナデ	石英・長石を含む 赤黒色　2.5YR2/1 良好	体部1/2欠損 脚部3/4欠損	東隅一帯 下層から中層	1204
		底径	—						
		器高	(28.4)						
		最大径	25.8						
12	土師器 台付甕	口径	19.5	口縁部は外反し、胴部は長胴化を呈する　台部は「ハ」の字状に開く	外面口縁部、胴部、台部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形胴部ヘラナデ、ハケ整形　台部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 明赤褐　2.5YR5/8 良好	体部1/2欠損 脚部3/4欠損	北東壁際中央 中層	1203
		底径	10.8						
		器高	(25.5)						
		最大径	21.9						
13	土師器 台付甕	口径	—	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は下半部でつぼまる扁球形状を呈し、台部は「ハ」の字状に開く	外面口縁部、胴部、台部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形胴部ヘラナデ、ハケ整形　台部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい橙　7.5YR5/3 良好	口縁部欠損	東隅及び南東壁側 床直上	1205
		底径	10.8						
		器高	(25.0)						
		最大径	24.2						
14	土師器 台付甕	口径	15.0	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は下半部でつぼまり無花果状を呈し、台部は「ハ」の字状に開く	外面口縁部、胴部ハケ整形　内面口縁部ハケ整形、胴部ヘラナデ、ハケ目　台部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 暗赤褐　5YR3/2 良好	体部1/2欠損	南隅及び P3周辺 下層から中層	1209
		底径	8.4						
		器高	19.8						
		最大径	15.3						
15	土師器 小形甕	口径	—	胴部はほぼ球形を呈する	外面ハケ整形 内面ヘラナデ	石英・長石・スコリアを含む 浅黄橙　7.5YR8/6 良好	口縁部欠損	中央　炉北側 中層	1219
		底径	5.7						
		器高	(8.5)						
		最大径	12.9						
16	土師器 小型甕	口径	12.4	広口の壺　口縁部は垂直気味に立ち上がり、胴部は上下を押しつぶした扁球形　底部は上げ底	外面ハケ整形の後ヘラミガキ　内面口縁部ハケ整形　体部ヘラナデ	石英・長石を含む 赤橙　10R6/6 良好	体部一部欠損 外面、内面口縁部赤彩	西隅から中央炉周辺 下層	1214
		底径	4.3						
		器高	13.1						
		最大径	16.0						
17	土師器 小型甕	口径	16.0	広口の壺　口縁部は垂直気味に立ち上がり、胴部は上下を押しつぶした扁球形　底部は上げ底	外面口縁部・胴部ハケ整形の後ヘラミガキ　内面口縁部ハケ整形の後ヘラミガキ　体部ヘラナデ	石英・長石を含む 橙　2.5YR7/8 良好	体部1/3欠損 外面赤彩	東隅 中層	1208
		底径	6.7						
		器高	14.8						
		最大径	18.3						
18	土師器 壺	口径	15.2	口縁部は大きく外反し、肩部の張りなく、胴部無花果状を呈する	外面口縁部ハケ整形の後ヘラナデ、胴部ハケ目　内面口縁部ハケ整形の後、ヨコナデ　胴部ハケ整形、ヘラナデ	石英・長石を含む にぶい橙　7.5YR6/4 良好	胴部欠損	西隅及び北東壁側 中層から上層	1234
		底径	6.1						
		器高	—						
		最大径	—						
19	土師器 壺	口径	13.0	二重口縁で、強屈はやや角張る　肩部の張りはなく胴部の最大径が下位に位置し、肩平な無花果状を呈する　底部は輪状	外面口縁部ハケ整形の後ヘラミガキ、胴部ハケ整形の後ヘラミガキ　内面口縁部ハケ整形の後ヘラミガキ、胴部ヘラナデ	石英・海綿骨針・長石を含む 橙　10R5/8 良好	口縁部一部欠損 外面・内面口縁部赤彩	北東壁側中央 床直上から下層	1213
		底径	6.5						
		器高	16.3						
		最大径	17.7						
20	土師器 壺	口径	13.0	二重口縁で、強屈は丸みをもつ肩部の張りは弱い	外面口縁部ヨコナデ　頸部ハケ整形の後ヘラナデ、胴部ハケ整形の後ヘラナデ　内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 浅黄橙　10YR8/4 良好	口縁部残存	東隅 中層	1212
		底径	—						
		器高	(9.0)						
		最大径	—						
21	土師器 壺	口径	—	小さな底部より中位に最大径をもつ、やや扁平な球状の胴部　口縁欠損	外面全面ミガキ	雲母細砂粒 外)赤　10R4/6 良好	赤彩は外面で底面を除き全面、内面はわずかに残る頸部にみられる　胴部下半に穿孔	北西壁側中央 中層	1218
		底径	2.9						
		器高	(8.7)						
		最大径	11.7						
22	土師器 坩	口径	12.1	やや下平に最大径をもち、横長な胴部　口縁は頸部で屈曲し、やや外反し、気味に開く　底部は凹み	口縁内外面で横ナデ、胴部はハケ整形　内面は口縁から頸部でハケ整形が残る、胴部ではヘラナデ、底部周辺には指頭の整形痕	白色雲母など小砂粒 外)浅黄橙　7.5YR8/4 内)にぶい橙　5YR7/4 良好		東隅1212の下 下層	1217
		底径	3.2						
		器高	7.4						
		最大径	12.2						
23	土師器 坩	口径	10.5	胴部は中位に胴部最大径をもちも、横長な球状　口縁は頸部で屈曲し、やや外反気味に開く	外面は口縁で横ナデ、胴部はハケ整形後、ミガキ、底部周辺には指頭の整形痕　口縁内面ではハケ整形後やるく横ナデ、胴部内面では最高が見れているがナデ又はヘラナデ	白色小砂粒やや多 内)口縁　赤　7.5R4/6 底部　にぶい黄橙 10YR7/4 外)口縁　赤　7.5R4/6 胴　にぶい黄橙 10YR7/4 良好	外面は底部周辺を除き全面、内面は口縁部のみ赤彩	西隅 下層から中層	1216
		底径	3.8						
		器高	7.8						
		胴径	9.7						
24	土師器 坩	口径	8.5	胴部は小さな底部から中位に最大径もち、球状を呈する　口縁は頸部から屈曲し短く直線的に開く	口縁は内外面で横ナデ　胴部外面はミガキ、器面が荒れているためはっきりとは見えない　内面はヘラナデ	雲母、白色細砂粒 外)にぶい赤7.5R4/4 内)にぶい黄橙 10YR7/4 口縁　赤7.5R4/6 良好	外面は底部から口縁までの全面、内面は口縁から胴部上位までの部	南隅 中層	1215
		底径	2.1						
		器高	7.0						
		最大径	9.6						

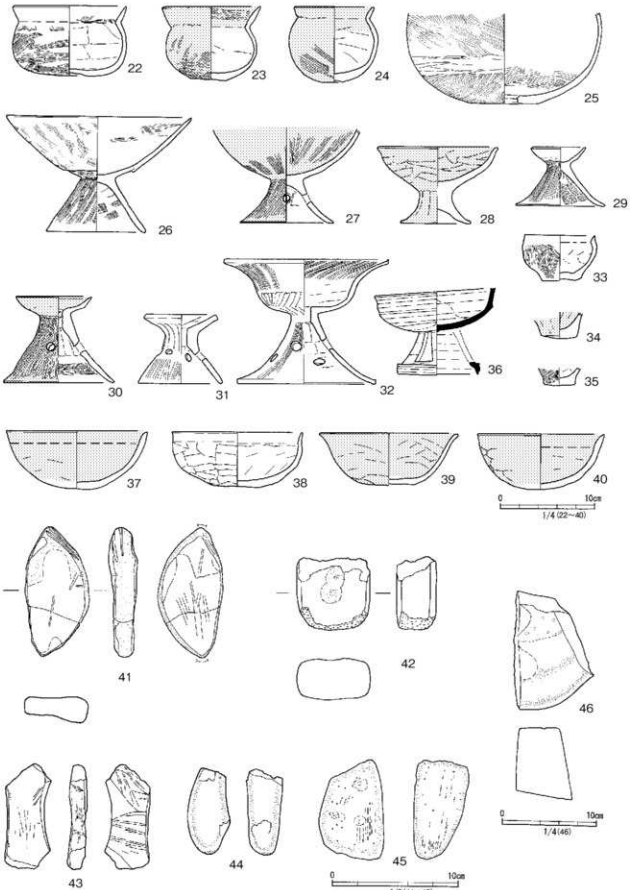


第37図　12号住居跡出土遺物(2)

第21表　12号住居跡出土遺物観察表(3)

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
25	土師器 鉢	口径 — 底径 7.4 器高 (9.6) 最大径 20.6	単孔式　胴部は上下を押しつぶした扁球形	外面ハケ整形の後一部ヘラミガキ　内面ハケ整形ヘラナデ	石英・チャート・黒色粒子・長石を含む 浅黄橙 10YR8/4 良好	底部残存	北西壁側中央 中層	1245
26	土師器 高坏	坏径 19.6 脚径 15.4 器高 12.2 — —	脚はハの字に開く　坏は下位で段を持つが内湾しながら大きく開く	坏口縁内外面横ナデ　坏底は内ハケ整形後、ミガキ　内面も同様にハケ整形後に仕上げキ　脚の外面もハケ整形後ミガキ、内面は後の分割痕を残し、ハケ整形、縦横ナデ	細砂粒中やや多 内）にぶい橙 5YR7/4 外）淡橙 5YR6/3 良好		北東壁側 床直上	1220
27	土師器 高坏	坏径 — 脚径 (9.9) 器高 (10.0) — —	坏口縁欠損　坏は緩やかに内湾しながら大きく立ち上がる　脚は緩やかに外反しながら開く	坏の外面はハケ整形後、ミガキにより平滑に仕上げる　内面はミガキをていねい横内の外面はハケ整形後、ミガキ　内面は指頭整形後ヘラケズリ、縦ミガキ	黒白細砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　赤　7.5R4/8 脚　橙　7.5YR7/6 良好	脚中位に4孔、赤彩は外面全面と坏内面	東隅 下層	1224
28	土師器 高坏	坏径 12.8 脚径 (7.5) 器高 8.1 — —	坏は内湾気味に立ち上がり、口縁端で外反する　脚は大く、幅広短く大きく開く	坏はヘラケズリ後、口縁内外横ナデ、内面にヘラナデ　脚外面はヘラケズリ、縦内外横ナデ、内面はヘラケズリ	白黒砂粒 外）赤　10R4/6 内）明赤　赤　7.5R4/8 脚　にぶい橙 7.5YR7/3 良好	赤彩は外面全面と坏内面	南西壁側中央 上層	1226
29	土師器 器台	器受径 5.3 脚径 9.5 器高 6.2 — —	器受部は直厚が薄く、内湾気味に立ち上がる　脚は緩やかに開きながら徐々にすわげに外反	器受部も脚も全体をハケ整形後、器受部口縁、縦内外横ナデ、脚内面は横ナデ	白色細砂粒 外）淡黄橙　7.5YR6/4 内）淡黄橙　7.5YR6/6 良好		東隅 下層	1228
30	土師器 器台	器受径 8.0 脚径 11.7 器高 9.1 — —	器受部は大き く開き、中ほどでやや屈曲しながら大きく開く　脚は急角度で開く	器受部の口縁内外面を横ナデ　体部外面ナデ　脚外面はハケ整形後縦位ミガキ、内面はヘラ削りの整形を残し、下半ハケ整形、縦横ナデ	白色砂粒やや多 外）赤　10R5/6 内）橙　淡黄橙7.5YR8/4 良好	赤彩は外面全面、器受部内面にみられる　脚の中位に3孔穿孔の位置決めの線がある	北西壁側一帯 中層	1221
31	土師器 器台	器受径 7.8 脚径 8.9 器高 7.3 — —	器受部は丸く、短く直線的に開く　脚はやや内湾気味に立ち上がる	器受部口縁外面は横ナデ、下半から脚上位までハケ ケズリ　脚下半にハケ整形内面は横ナデ、縦ケズリ、横ナデ	細砂粒 外）淡黄橙　10YR8/3 内）淡黄橙　10YR8/4 良好	脚上位に4孔、2孔づつ接近し2対で穿孔される	東隅 中層	1227
32	土師器 器台	器受径 (17.4) 脚径 (14.6) 器高 13.2 — —	器受部は緩やかに立ち上がり、中位で内反しながらデ 脚は下方に開き、端部でわずかに外反　脚は大きく外反しながら開く	器受部の内面は横ナデ、脚内面にもハケ ケズリ後、上半ミガキ、内面は脚外面はミガキ、内面は横広のヘラ削り、縦内外面横ナデ	砂粒 外）橙　2.5YR6/6 内）淡赤橙　2.5YR7/4 良好	脚中位に3単位の穿孔が上下2段の孔あけられる	西隅側P2周辺及び北東下層から中層	1222
33	土師器 鉢	口径 7.5 底径 3.5 器高 4.8 最大径 7.9	胴部上位に最大径をもち、内湾して立ち上がる　わずかにすぼまった頸部から短く外開して開く	外面ハケ整形後、口縁内外横ナデ　胴部内面には指頭の成形痕が残る	白色小砂粒やや多 外）灰黄褐　10YR4/2 内）黄褐　10YR3/2 不良		東隅 下層	1229
34	土師器 鉢	口径 — 底径 3.7 器高 (2.8) 最大径 —	底部のみ残存　安定の悪いため底から立ち上がる	外面ナデ　内面ヘラナデ	石英、雲母細砂粒 外）赤橙　10R6/6 内）赤橙　10R6/6 良好	赤彩は底面を除く外面全面と内面全面にみられる　まばらに残る	南西壁側 上層	1242
35	土師器 鉢	口径 — 底径 3.2 器高 (1.8) 最大径 —	底部のみ残存	外面ハケ整形　内面ヘラナデ	白色細砂少 外）橙　5YR7/6 内）橙　2.5YR6/8 良好	赤彩は内面にみられる	北東側 下層	1243
36	須恵器 高坏	坏径 12.8 脚径 8.6 器高 9.3 — —	坏はゆるく内湾しながら開き中位で段を持って立ち上がる　脚は直線的に開く	ロクロ成形、坏底部に切り離し後回転ヘラケズリ	白色細砂 外）灰　10Y6/1 内）灰白　7.5Y7/1 良好	脚に大きく方形の透かしが3孔　坏内外に自然釉	中央北寄り 中層から上層	1223
37	土師器 坏	口径 (15.0) 底径 — 器高 6.1 最大径 —	丸い底部から球形な体部、口縁内側でかすかに稜をもち、端部でわずかに外反	外面ヘラケズリ後、ナデにより平滑に仕上げ　口縁内外を横ナデ　体部はナデにより かなり平滑に仕上げ	白色微小砂粒やや多 内）にぶい黄橙10YR7/2 体部　明赤褐2.5YR5/8 内）赤　7.5R4/6 良好	赤彩は内面で底部を除く全面と内面全面	中央一帯 中層主体から床直上、上層まで	1230
38	土師器 坏	口径 (13.8) 底径 — 器高 5.8 最大径 —	平底端な底部はなく、緩やかに立ち上がりやや屈曲する球形の体部、口縁内側で稜をもち、端部でやや外反	底部から体部にかけてヘラケズリ後、口縁内外に横ナデ　内面はヘラナデ	白色微砂粒 内）にぶい橙　7.5YR7/4 内）にぶい橙　7.5YR7/4 良好	外面のところどころにかすかに赤彩がみられる	南東壁側中央 上層主体及び床直上	1231
39	土師器 坏	口径 (14.8) 底径 5.4 器高 5.0 最大径 —	底部より内湾しながら緩やかに立ち上がり口縁で わずかに外反する	体部は底部ヘラケズリ、徐々に下端にもヘラケズリ、体部ナデ　口縁内外面横ナデ、内面はナデ	白色微小砂粒やや多 内）にぶい黄橙10YR6/4 体部　赤　10R4/8 内）にぶい黄橙10YR6/4 体部　赤　7.5R4/6 良好	赤彩は外面では底部を除く全面、内面は底部の中心部を除く全面にみられる	中央 上層主体から下層	1232
40	土師器 坏	口径 13.4 底径 — 器高 5.9 最大径 —	丸い底部から球形な体部、口縁内側でかすかに稜をもち、端部でわずかに外反	外面ヘラケズリ後、口縁内外を横ナデ　体部内面はナデ	石英、雲母小砂粒多 内）にぶい黄橙10YR7/3 体部　赤　10R5/8 内）赤　10R4/8 良好	赤彩は外面では底部を除く全面、内面は全面にみられる	南西壁側 上層	1233
41	石器　砥石	幅 5.0	長さ　10.3	厚さ　2.3	重量　115.8g	両面砥石として使用し、上下両端に敲痕	東隅 床直上	1239
42	石器　凹石	幅 5.8	長さ　(5.8)	厚さ　3.2	重量　198.4g	敲部敲痕	南東側 中層	1241
43	石器　砥石	幅 3.6	長さ　(8.3)	厚さ　1.0	重量　46.2g		東隅 下層	1237
44	石器　敲石	幅 3.3	長さ　(6.8)	厚さ　2.9	重量　90.8g	先端に敲痕	西隅部 中層	1240
45	石器　軽石	幅 5.2	長さ　7.9	厚さ　4.3	重量　28.7g	表裏両面に擦痕	西隅 中層	1238
46	石器　敲石	幅 (8.5)	長さ　(12.4)	厚さ　7.4	重量　1160.9g		南東壁際 下層	1236



第38図　12号住居跡出土遺物(3)

第２節　古墳時代後期の竪穴住居跡

古墳時代後期に該当する竪穴住居跡は第22表のとおり3軒ある。これらの住居跡は調査区中央にまとまって検出されている。

第22表　古墳時代後期　竪穴住居跡一覧表

〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値

遺構名称	位置（グリッド名称）	規模（m）				平面形態	主軸・長軸方向	炉	主柱穴	周溝	貯蔵穴	出入口ピット	備考
		長軸・主軸	短軸	深さ									
02号住居跡	N12	7.16（6.6）	6.70	0.54		方形	N-30°-W	炉	4本	全周	なし	張出し部あり	主軸（　）内は張出しを除く
03号住居跡	J14	5.82	5.90	0.53		方形	N-81°-E	カマド	4本	全周	南東隅1ヶ所方形	なし	主軸はカマドを除く
04号住居跡	M17	5.66（5.29）	5.36	0.56		方形	N-10°-E	カマド	4本	全周	なし	南壁中央1ヶ所	主軸（　）内はカマドを除く

02号住居跡（第40図～第42図・図版17）

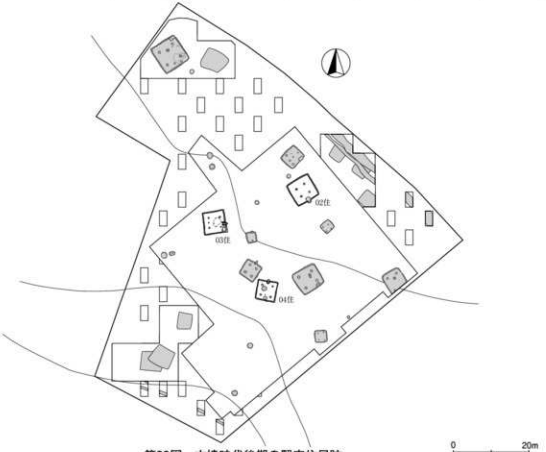
調査区中央，N12グリッドで検出されている。

住居跡の形状が一辺6.6m前後の方形を呈する竪穴住居跡である。壁は平面的にほとんど直線で，各隅は丸みをもたずに屈曲する。

第23表　02号住居跡

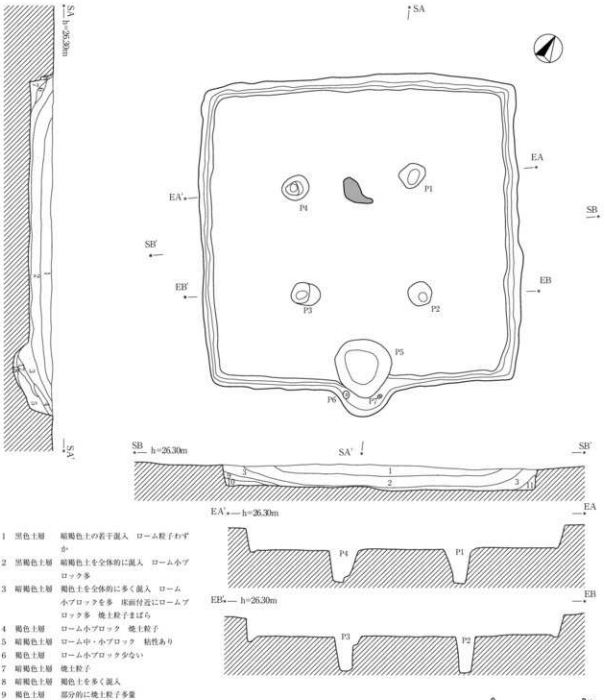
位置	N12		形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸	7.16	短軸	6.7	深さ	0.54
長軸方向	N-30°-W		張出し部南東壁中央にピット 56cm張出し			
炉	位置	中央やや北より	規模（cm）	76		36

		位置	性格	規模（cm） 縦	横	深さ
ピット	P1	北隅側	主柱穴	56	50	74
	P2	東隅側	主柱穴	52	50	76
	P3	南隅側	主柱穴	62	48	73
	P4	西隅側	主柱穴	60	50	66
	P5	南東壁中央	張出し	120	125	33
	P6	南東壁張出し西	補助柱穴?	18	14	—
	P7	南東壁張出し東	補助柱穴?	12	8	—



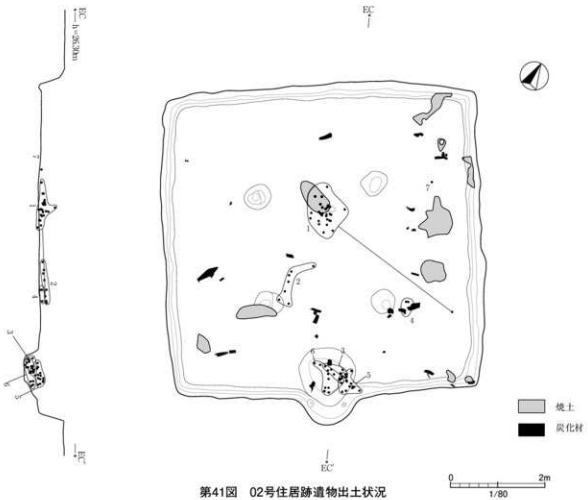
第39図　古墳時代後期の竪穴住居跡

住居跡の覆土は壁際に堆積した崩落土とその後に緩やかに自然埋没した状況を伺わせる土層であった。南東壁中央に設けられた張り出し部(P5)の埋没過程も住居跡と同一に自然埋没したものと判断された。**住居跡の内部構造**は全周する周溝，柱穴4ヶ所，炉などが検出されている。また，南東壁中央に張り出し部及びピット(P5)が設けられている。



1　黒色土層　暗褐色土の若干混入　ローム粒子わずか
2　黒褐色土層　暗褐色土を全体的に混入　ローム小ブロック多
3　暗褐色土層　褐色土を全体的に多く混入　ローム小ブロックを多　床面付近にローム小ブロック多　焼土粒子まばら
4　褐色土層　ローム小ブロック　焼土粒子
5　暗褐色土層　ローム中・小ブロック　粘性あり
6　褐色土層　ローム小ブロック少ない
7　暗褐色土層　焼土粒子
8　暗褐色土層　褐色土を多く混入
9　褐色土層　部分的に焼土粒子多量
10　暗褐色土層　焼土粒子，炭化材の小破片
11　暗褐色土層　黒色土を混入　炭化粒子多
17　暗褐色土層　褐色土を全体的に混入　ローム粒子，炭化粒子　5層より明るい　しまり良
18　褐色土層　暗褐色土を若干混入　ローム粒子，炭化粒子わずか　焼土粒子　粘性あり

第40図　02号住居跡



第41図　02号住居跡遺物出土状況

周溝は張り出し部で途切れてはいるものの全周している。幅は15cmほどあり，深さ5cm～12cmの比較的浅い掘り込みであった。覆土は暗褐色土が主体で，ローム小ブロックを混入し，焼土粒子・炭化粒子が含まれるやや軟弱な土層であった。

主柱穴は4ヶ所検出されている。P1，P2，P3，P4は50cm～60cmの径があり，深さが70cm前後のしっかりと掘り込まれたピットである。柱穴の位置がやや内側に寄って位置している。

P1からP4の覆土はいずれも同様で，暗褐色土を主体とし，ローム小ブロック・粒子を混入し，焼土粒子，炭化材が含まれる比較的やわらかい土層であった。

張り出し部に設けられたP5は径が120cm前後と大きなものであり，深さは床面から30cmほど掘り込まれている。覆土はA－A'セクションラインでみると，3層，5層が主体で暗褐色土層からなり，ローム小ブロックが混入される軟弱な土層であった。このピットの底部，5層の下端から炭化材が検出されている。

P6，P7はP5の壁際に設けられ，P5に関連する**補助柱穴**とみられる。10cm～20cmの小さなピットである。覆土は暗褐色土が主体となっていた。

炉は住居跡の中央の北西寄りに検出されているが，76cm×36cmの範囲の床面が焼土化した地床炉であった。

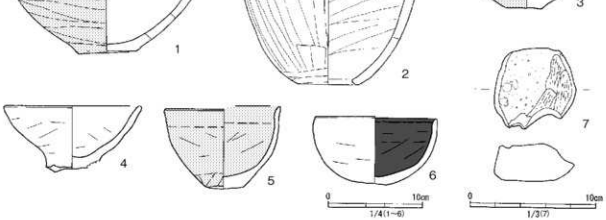
床面はほぼ平坦であるが，中央部分でやや低くなり，壁側の床面より6cmほど低い。特に床面が硬化する部分はみられず，ハードローム面で床が形成されている。

位置を測定して取り上げた**遺物**は274点あり，軽石1点，自然石3点，粘土塊が1点あるほかは土師器が出

土している。出土遺物は，炉の周辺及び張り出し部のピット内に集中して出土している。その他は散漫な出土状況であった。また，焼土ブロックは住居跡の東半分に多く，大小10ヶ所検出されている。また，炭化材の検出は小破片が30点近く出土している。多くが床面近くからの検出であった。

出土遺物の中から復元された7点の遺物を図示した。

第42図1は住居跡中央の炉周辺にまとまって出土している。床面直上層が多く，中層まで分布していた。4はＰ2東側の床面直上層から出土している。2は住居跡中央Ｐ3北側に分布している。覆土下層からの出土であった。3，5，6は張り出し部Ｐ5内から出土している。7は北東壁側の床面直上から出土していた。



第42図　02号住居跡出土遺物

第24表　02号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 甕	口径	17.2	口縁部は直立気味に立ち上がり，胴部は上下を押しつぶした扁球形を呈する	外面口縁部ヨコナデ，胴部横位のヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	石英・長石を含む　橙色　10R6/8　良好	胴部一部欠損　外面，内面口縁部赤彩	中央　伊高辺　床直上主体から中層まで	0201
		底径	6.0						
		器高	16.3						
		最大径	20.9						
2	土師器 甕	口径	22.4	東孔式　体部は内湾気味に外傾し，口縁部は外反する	面縦位のヘラケズリ　内面ヘラナデ	石英・黒色粒子を含む　橙色　7.5YR7/6　良好	胴部1/2残	中央　P3北　下層	0205
		底径	5.8						
		器高	19.6						
		最大径	—						
3	土師器 小型壺	口径	(13.6)	胴部中位に最大径をもち，縁まならい頸部からわずかに外傾する短い口縁	口縁内外横ナデ，胴部外面ヘラナデ，胴部内側ヘラナデ	白色粒大小砂粒　外）赤橙　10R6/8　内）赤　10R5/6　良好	赤彩は外面では底部を除き全面，内面は口縁から胴部下半まで	P5内　P5下層から中層	0202
		底径	3.9						
		器高	11.4						
		最大径	(15.2)						
4	土師器 高坏	坏径	14.6	坏の口縁は直線的に開く	坏部口縁の内外面は横ナデ，体部はナデ整形	白色粒大小砂粒　外）赤黒　7.5R2/1　内）灰赤　10R6/2　良好	器面全体が熱を受けて荒れている	東側P2東　床直上	0203
		脚径	—						
		器高	(7.1)						
		—	—						
5	土師器 鉢	口径	12.3	頸部でわずかに凹み，口縁が短くわずかに外反形状は歪む	口縁内外横ナデ　体部外面ヘラケズリ後，ナデ整形　内面ていねいなヘラナデ　底面ヘラケズリ	白色粒大小砂粒　外）赤　10R5/6　内）赤　10R4/6　良好	赤彩は外面では底部を除き全面，内面は全面	P5内から周溝　P5中層から上層	0204
		底径	4.1						
		器高	8.8						
		最大径	—						
6	土師器 椀	口径	12.7	短い口縁が内湾　最大径は口縁直下の胴部上位　形状は歪んでいる	口縁内外横ナデ　体部外面ヘラナデ　内面荒いヘラナデ	白色粒大小砂粒　外）にぶい赤橙　5YR5/3　内）黒褐色　5YR2/1　良好	内面全体を黒色処理する	P5内　P5下層から中層	0206
		底径	4.5						
		器高	7.2						
		最大径	13.2						
7	軽石	幅	6.5	厚さ　2.9	表面の一部に擦痕があり，砥石とし使われたものか			北東壁側　床直上	0208
		長さ	6.4	重量　27.3g					

03号住居跡（第43図～第46図・図版18，19）

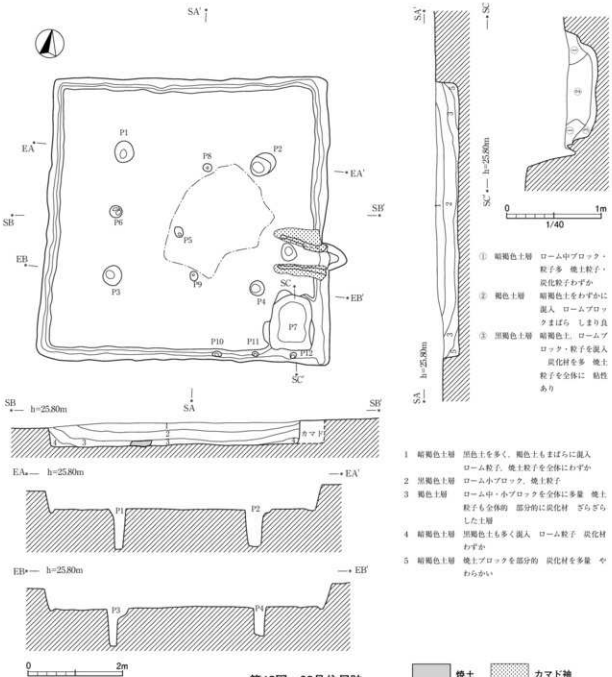
調査区中央，Ｊ14グリッドで検出されている。

住居跡の形状が一辺6m弱の方形を呈する竪穴住居跡である。各壁は平面的にほとんど直線で，各隅は丸みをもたずに屈曲する。

住居跡の覆土はゆるやかに自然埋没した状況を呈している。

住居跡の内部構造は東壁中央よりやや南側に偏った位置のカマド，カマドと貯蔵穴を除いて全周する周溝，主柱穴4ヶ所と主柱穴間に補助柱穴が3ヶ所，住居跡中央にピットが1ヶ所，周溝内に壁柱穴3ヶ所，貯蔵穴1ヶ所が検出されている。

周溝はカマドと貯蔵穴部分で途切れてはいるものの全周する。幅は10cm～20cmほどあり，深さ5cm前後



第43図　03号住居跡

の比較的浅い掘り込みであった。周溝の覆土は暗褐色土が主体で，褐色土が混入し，さらにローム中小ブロックも混入する。焼土粒子・炭化材が含まれるやや軟弱な土層であった。

主柱穴は4ヶ所検出されている。P1，P2，P3，P4は30cm～60cmほどの径があり，深さが60cm～80cmほどのしっかりと掘り込まれたピットである。

第25表　03号住居跡

位置	J14			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		5.82	短軸	5.90	深さ	0.53
長軸方向	N-81°-E						
カマド	位置	東壁中央より南側にずれる					
ピット		位置		性格	規模（cm）		
					縦	横	深さ
	P1	北西隅側		主柱穴	46	42	85
	P2	北東隅側		主柱穴	58	44	78
	P3	南西隅側		主柱穴	42	40	78
	P4	南東隅側		主柱穴	32	32	62
	P5	住居跡中央		補助柱穴?	24	18	23
	P6	西壁側中央		補助柱穴	26	26	30
	P7	南東隅		貯蔵穴	120	88	36
	P8	南壁側中央		補助柱穴	18	20	11
	P9	北壁側中央		補助柱穴	20	18	13
	P10	南壁周溝内		壁柱穴	20	12	14
	P11	南壁周溝内		壁柱穴	14	12	19
	P12	南壁周溝内		壁柱穴	14	14	17

P1は暗褐色土を主体とし，黒褐色土を多量に混入し，ローム中小ブロックの混入も多い。焼土粒子・炭化材が含まれるしまりの良い覆土であった。P2とP3の覆土はP1とほぼ同様であるが，黒褐色土の混入がP1よりも少ない。P4はP1の覆土に近いものであった。

P5は住居跡中央に位置する。径が20cm前後で深さ23cmのピットであるが，**補助的な柱穴**とも考えられる。覆土は暗褐色土を主体とし，ローム小ブロック・粒子の混入があり，焼土粒子・炭化粒子がわずかに含まれる比較的やわらかい土層である。

P6，P8，P9は主柱穴間に位置する**補助柱穴**と考えられる。P6はP1とP3の中間に位置し，径が26cmで深さが30cmほど掘り込まれている。覆土は暗褐色土を主体とし，ロームブロックの混入も多く，焼土粒子・炭化粒子も含まれるしまりの良い土層であった。P8はP1とP2の中間に位置し，P9はP3とP4の中間に位置している。いずれも径が20cm前後の深さが10cm程度のピットであった。

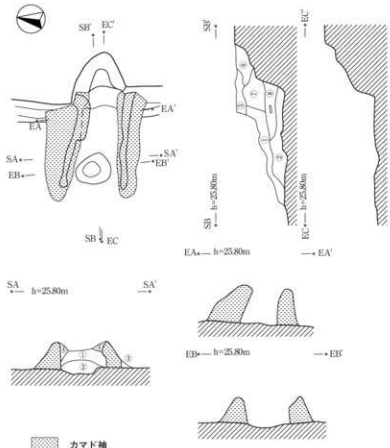
P7は**貯蔵穴**で，南東隅の壁際に設けられている。120cm×90cm弱の長方形状を呈するピットである。断面の形状は椀状を呈しているが，中ほどに段がある。覆土は暗褐色土や褐色土が主体となっている。底部の土層には粘性があり，炭化材の混入が多くみられる。甕(1)や坏等(2,5)の完形土器が出土した。

P10，P11，P12は南壁東側の周溝内で検出されている。貯蔵穴(P7)に隣接して設けられた**壁柱穴**である。径が12cm～20cmで，深さも14cm～19cmと浅いものであった。

カマドは東壁中央よりもやや南側に偏って付設されている。カマドの火床が壁面から70cmほど離れて造られており，奥行きの深いカマドとなっている。煙道は壁面をわずかに削り，急傾斜で立上げている。カマド内部の土層は自然埋没過程を表しているようだが，天井部の崩落土もみられない。内部からは支脚（8）が直立して出土していた。カマドの袖の下から周溝が検出されている。カマドを付設するために周溝を埋め戻したものと考えられる。

床面はほぼ平坦に形成されている。カマド前面の床には踏み固められた硬化面がみられた。P2，P4，P9，P8を囲むように，幅2m40cm，奥行き2mほどの範囲で硬化していたことが観察されている。

位置を測定して取り上げた**遺物**は209点あり，縄文土器4点，須恵器1点，近世の陶器1点，支脚片7点，土製品1点ほかは土師器が出土している。出土遺物はカマドの周辺にやや多い感じがするが，ほぼ住居跡

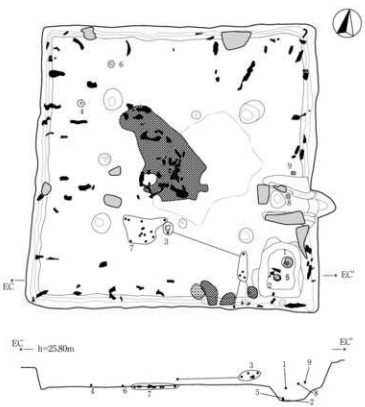


第44図　03号住居跡カマド

03号住居跡カマド掘り方

① 暗褐色土層　焼土粒子、炭化粒子　しまり良
② 褐色土層　焼土粒子・ブロック多　炭化材わずか　やわらかい
③ 暗褐色土層　焼土粒子、灰白色粘土粒子を混入　ロームブロック
④ 暗褐色土層　黒色土を混入　焼土粒子多　やわらかい
⑤ 暗褐色土層　褐色土を混入　しまり良
⑥ 褐色土層　暗褐色土の混入は少ない　粘性あり
⑦ 褐色土層　暗褐色土全⑥層より多く混入　焼土粒子わずか　しまり良
⑧ 暗褐色土層　砂粒子わずか　焼土粒子・炭化材を全体に　しまり良く硬い

0　1m
1/40



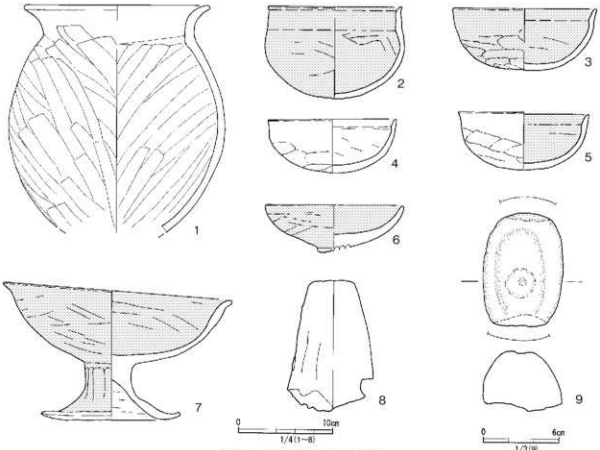
第45図　03号住居跡遺物出土状況

0　1m
1/40

P7（貯蔵穴）内遺物出土状況

炭化材　焼土
炭化粒子範囲　粘土

0　2m
1/80



第46図　03号住居跡出土遺物

第26表　03号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 甕	口径	19.2	口縁部は一ブを描き外反し、胴部はやや長胴化を呈する	外面口縁部ヨコナデ　胴部斜行のヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ　体部斜行ヘラナデ	石英・長石を含む 浅黄橙色　7.5YR8/6 良好	底部欠損 内外面下半部スス付着	P7内 P7上層	0301
		底径	—						
		器高	(24.0)						
		最大径	23.0						
2	土師器 鉢	口径	(14.2)	球状の胴部から直立する頸部　口縁は短く外反	口縁から頸部内外横ナデ　胴部外面ヘラケズリ後、ヘラナデ整形　底部はヘラケズリのまま　胴部内面はていねいなヘラナデ	白色、雲母等小砂粒多 内）赤　10R5/6 外）赤　10R5/8 良好	器面全体が熱を受けて荒れているが、赤彩された痕跡が内外全面にみられる	P7内 P7底面	0303
		底径	—						
		器高	9.8						
		最大径	(14.8)						
3	土師器 坏	口径	15.2	丸い底部から球形な体部、口縁の内側で稜をもち、わずかに外反しながら開く	口縁内外横ナデ　底部から体部外面をヘラケズリ　内面ヘラナデ後、さらにナデにより平滑な仕上げ	白色砂粒多 内）赤　10R5/6 底部にふい燈7.5YR6/3 内）赤　7.5R4/6 良好	赤彩は外面底部を除き内外面全面	南壁側一帯 中層	0305
		底径	—						
		器高	6.5						
		最大径	—						
4	土師器 坏	口径	13.6	丸い底部から球形な体部、口縁の内側で稜をもち、やや内湾気味に立ち上がる	口縁内外横ナデ　底部から体部外面をヘラケズリ　内面ヘラナデ	細砂粒多 内）にぶい黄橙10YR7/3 外）浅黄橙　10YR4/2 良好	底部周辺の内外黒色変化	西壁側P1西 床直上	0307
		底径	—						
		器高	5.7						
		最大径	—						
5	土師器 坏	口径	13.8	丸い底部から球形な体部、口縁の内側で稜をもち、わずかに外反しながら開く	口縁内外横ナデ　底部から体部外面をヘラケズリ　内面ナデにより平滑な仕上げ	白色砂粒、雲母等細砂粒 内）橙　7.5YR7/6 外）明褐　2.5YR5/8 良好	赤彩は内面全面、外面は荒れがひどいためか部分的にみられる	P7内 2の上	0306
		底径	6.1						
		器高	—						
		最大径	—						
6	土師器 高坏	坏径	14.6	厚い器厚の体部が内湾しながら開き口縁に至る	外面ヘラケズリ後、ナデ整形　口縁内外横ナデ　体部内面もナデ整形し、ていねいに平滑に仕上げる	整き砂かい砂粒 外）赤　7.5R4/8 内）赤　7.5R4/6 良好	赤彩は内外面全面	北壁側P1北 床直上	0304
		脚径	—						
		器高	(5.1)						
		—	—						
7	土師器 高坏	坏径	24.4	坏と脚に接合に歪み　坏は大きく内湾しながら開き口縁で外反　脚の裾は反り返る	坏部口縁の内外面は横ナデ、体部は内へラケズリ整形　脚外面はヘラケズリ、内面へラケズリ及びヘラナデ	砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　10R5/8 良好	赤彩は外面全面及び坏内面	南壁側P3東 床直上	0302
		脚径	14.8						
		器高	14.6						
		—	—						
8	土製品 支脚	上面径	4.4	下端部が崩落している　下部に1.5cmほどの円形の抜けが両側にあり	指頭及びヘラナデ	細砂粒 外）にぶい橙　7.5YR7/4 不良		カマド内 火床上	0308
		底径	—						
		器高	(13.8)						
		最大径	(8.1)						
9	石器 敲石	幅	6.4	長さ　8.9	厚さ　(4.7)	重量　411.3g	両側に敲痕　上面を凹石として利用	カマド北側脇 床直上	0309

の全域でまばらに分布していた。また，焼土のブロックは9ヶ所あり，カマド周辺と各壁際に多くみられる。炭化材の検出は住居跡中央部一帯に炭化粒子の大きなブロックと炭化材多数が出土し，また，中小破片が周辺に出土している。多くが床面近くからの検出であった。さらに，貯蔵穴の底部からの出土もみられた。その他に粘土ブロックが南壁中央の壁際から検出されている。

出土遺物の中から復元された7点の土器と支脚，石器各1点の合計9点を図示した。覆土中から一括遺物として石鏃が出土したが，縄文時代の遺物として扱った。

第46図1，2，5は貯蔵穴(Ｐ7)の中から出土している（第45図，図版18-3・4）。1はＰ7の上層からの出土である。2がＰ7の底部から出土し，その上に乗るように5が出土している。8の支脚はカマドの火床上から出土し，使用の状況を示していると考えられる。7は住居跡中央の南側，Ｐ3脇でまとまって床面直上で出土している。6はＰ1の北の北壁際で床面直上から出土した。3は住居跡南側一帯の中層からの出土である。4は西壁側のＰ1脇の床面直上からの出土である。9の敲石はカマド北側の床面直上から出土している。

04号住居跡（第47図～第51図・図版20，21）

調査区中央，M17グリッド周辺で検出されている。

住居跡の形状が一辺5.3m前後の方形を呈する竪穴住居跡である。各壁は平面的にほぼ直線で，各隅はほとんど丸みをもたずに屈曲する。

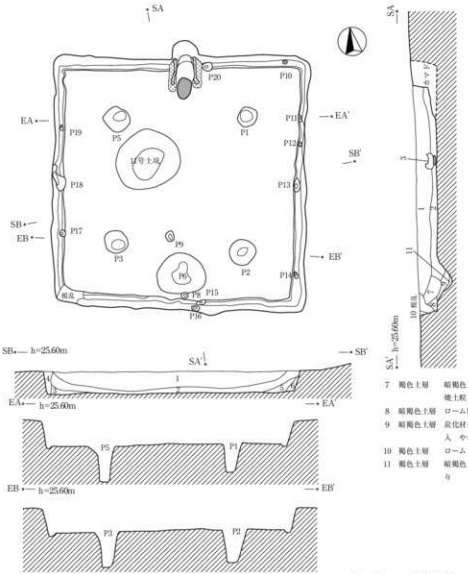
住居跡の覆土はなだらかに堆積し，自然埋没した状況を伺わせる土層である。南壁中央の壁際で検出されているＰ6の埋没過程も住居跡の埋没過程と同一である。

住居跡の内部構造は北壁中央に位置するカマド，カマドを除いて全周する周溝，主柱穴4ヶ所，南壁中央の壁際で検出されているＰ6は出入り口施設と関連するものであろうか。補助柱穴と推定されるもの2ヵ所，壁柱穴11ヶ所を検出した。また，住居跡中央に径が1.4mほどの深くて大きなピットが検出されたが，覆土の堆積状況から住居跡の廃棄前後に掘削廃棄されたものと判断されたため，住居跡とは別な遺構として扱うこととした。

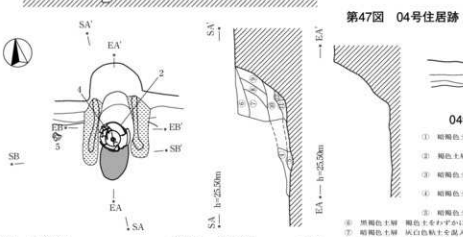
第27表　04号住居跡

位置	M17			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		5.29	短軸	5.36	深さ	0.56
長軸方向	N-10°-E						
カマド	位置	北壁中央					
ピット		位置		性格	規模（cm）		
					縦	横	深さ
	P1	北東隅側		主柱穴	42	43	62
	P2	南東隅側		主柱穴	54	56	71
	P3	南西隅側		主柱穴	50	48	76
	P4	欠番					
	P5	北西隅側		主柱穴	53	52	75
	P6	南壁中央壁際		出入口	87	106	50
	P7	住居跡中央やや北西			住居に伴わないため11号土坑に変更		
	P8	P6の南		補助柱穴?	14	13	11
	P9	東壁側中央		補助柱穴	20	18	13
	P10	北西隅周溝内		壁柱穴	10	8	3
	P11	東壁周溝内		壁柱穴	16	8	9
	P12	東壁周溝内		壁柱穴	12	8	3
	P13	東壁中央周溝内		壁柱穴	30	14	5
	P14	南東隅周溝内		壁柱穴	16	8	2
	P15	南壁中央周溝内		壁柱穴	22	10	4
	P16	南壁中央壁際		壁柱穴	18	12	—
	P17	西壁周溝内		壁柱穴	15	14	5
	P18	西壁中央周溝内		壁柱穴	60	22	—
	P19	西壁周溝内		壁柱穴	12	8	—
	P20	北壁カマド西側		壁柱穴	22	20	8
	P21	北壁カマド下		壁柱穴	15	12	8

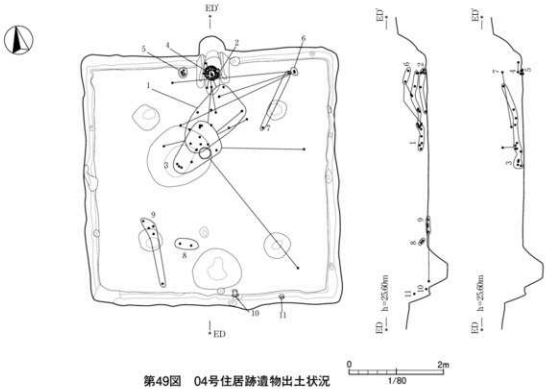
周溝はカマド部分で途切れてはいるが全周する。幅は15cm前後で，深さ8cmほどの比較的浅い掘り込みであった。覆土は暗褐色土が主体で，ローム小ブロックも混入し，焼土粒子・炭化材が多量に含まれるやや軟弱な土層であった。



第47図　04号住居跡



第48図　04号住居跡カマド



第49図　04号住居跡遺物出土状況

第50図　04号住居跡焼土・炭化材検出状況

主柱穴であるＰ1，Ｐ2，Ｐ3，Ｐ5は40㎝～50㎝ほどの径があり，深さが60㎝～70㎝ほどのしっかりと掘り込まれたピットである。

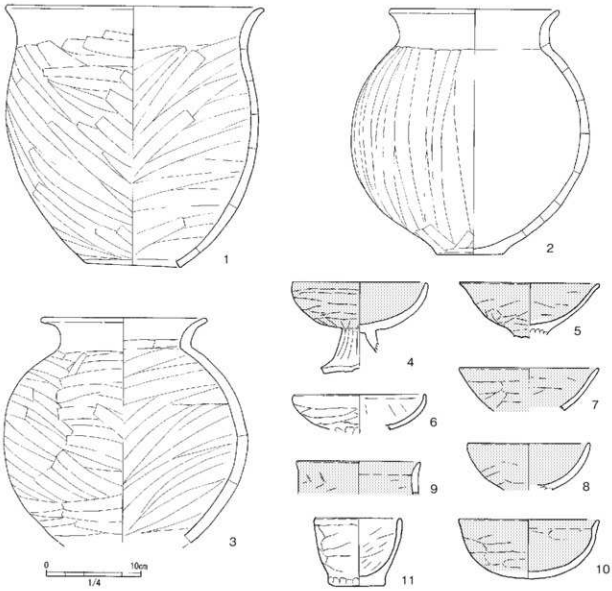
Ｐ1は暗褐色土を主体とし，ローム小ブロックの混入が多く，焼土粒子・炭化材も多く含まれるしまりの良い覆土であった。Ｐ2はＰ1とほぼ同様の覆土であった。Ｐ3は暗褐色土を主体とし，ローム小ブロックを混入し，焼土粒子・炭化材の小片を少量含む，やや軟弱な覆土であった。Ｐ5は暗褐色土を主体とし，ローム小ブロックの混入が多く，焼土粒子が多量で，炭化材をわずかに含むややわらかい覆土であった。

出入口施設に関連するP6は住居跡の南壁中央の壁際，カマドと正対する位置にある。02号住居跡のような張り出し部は持たない。径は87cm×106cmと大きく，深さも約50cmある。覆土は暗褐色土を主体とし，炭化材の混入があり，比較的やわらかい土層である。

P8はP6の南側で周溝とのわずかな隙間に位置する。P6に関連する**補助的な柱穴**であろうか。14cmほどの径で深さ10cmほどであった。P9はP2とP3の主柱穴の中間に位置する**補助柱穴**と考えられる。径が20cmほどで深さが13cmほど掘り込まれている。

P10～P20は**壁柱穴**である。周溝内あるいは壁面に掘られている。10cm～20cmほどの大きさが多く，30cm，60cmとやや大きなものも一部にみられる。深さが10cmに満たないものがほとんどである。

11号土坑としたピットは床面での観察で，暗褐色土を主体とし，褐色土の混入がみられ，炭化材が多量に混入し，炭化材の小片が覆土内部に多くみられた。焼土粒子・ローム小ブロックも多量に混入していた。比較的しまりの良い土層である。しかし，周辺の床面が硬く踏みしめられているのに比較するとやわ



第51図　04号住居跡出土遺物

第28表　04号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No
1	土師器 甕	口径	27.0	単孔式　胴部は内湾気味に外傾し，口縁部は外反	外面口縁部ヨコナデ　胴部斜行のヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ　胴部斜行ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい黄橙色　10YR7/3 良好	胴部一部欠損	カマド前一帯 下層から中層まで	0401
		底径	9.8						
		器高	27.5						
		最大径	26.8						
2	土師器 甕	口径	17.8	口縁部は垂直気味に立ち上がり，端部でわずかに外反し，胴部は球形を呈する。	外面口縁部ヨコナデ，胴部縦位のヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 浅橙色　5YR8/4 良好	完形品	カマド内 火床上	0402
		底径	7.0						
		器高	25.9						
		最大径	25.4						
3	土師器 甕	口径	17.5	口縁部は「く」の字状に外反し，胴部は球形を呈する	外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ　内面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 橙色　2.5YR7/6 良好	底部欠損	カマド前一帯 床直上主体から中層	0403
		底径	—						
		器高	(23.7)						
		最大径	26.0						
4	土師器 高坏	坏径	14.5	坏部は内湾しながら開き，口縁もわずかに内湾しながら立ち上がる。脚の裾は欠落しているが，脚直して開く	上端内外横ナデ　坏部外面をヘラケズリ　内面ていねいなナデにより平滑な仕上げ　脚外面ヘラケズリ，裾は不明　内面はヘラケズリ	緻密な粘土　細砂粒 外）赤橙 10R6/8 （脚　橙7.5YR7/6） 内）赤　10R5/8 （脚にぶい橙7.5YR7/4） 良好	赤彩は外面は脚の上端から坏部全面，坏部内面	カマド内 火床上　2の下	0405
		脚径	—						
		器高	(9.7)						
		—	—						
5	土師器 高坏	坏径	7.9	やや内湾しながら開き，口縁部端でやや外反して開く	坏体部外面はヘラケズリ，ヘラナデで荒く整形。口縁内外に横ナデ　坏内面はヘラナデ，荒く整形	砂粒多 外）赤　10R4/6 内）赤　10R4/8 良好	赤彩は坏内面の底部を除き内面全面みられる	カマド西側脇 床直上	0406
		脚径	—						
		器高	(5.7)						
		—	—						
6	土師器 高坏	坏径	(7.2)	やや内湾しながら大きく開き，口縁は内湾しながら短く立ち上がる	口縁内外横ナデ　坏体部外面をヘラケズリ　内面へラケズリ後，ナデにより平滑な仕上げ	荒い砂粒 外）浅黄橙　7.5YR8/4 内）橙　7.5YR7/6 良好	坏底部の状況から，脚の接合が推定される。	北東隅一帯 上層から中層	0409
		脚径	—						
		器高	(4.0)						
		—	—						
7	土師器 高坏か	坏径	(14.8)	わずかに内湾しながら開き，口縁でわずかに外反	口縁内外横ナデ　体部外面をヘラケズリ　内面はヘラケズリ後，ヘラナデ，平滑な仕上げ	砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　10R4/6 良好	残存する坏部の内外全面赤彩	北東 中層から上層	0412
		脚径	—						
		器高	(4.6)						
		—	—						
8	土師器 坏	口径	(13.0)	内湾しながら開く	外面ヘラケズリ後，ナデ整形，平滑に仕上げ　内面ナデ整形により平滑な仕上げ	細砂粒少 外）赤　10R5/6 内）赤橙　10R6/6 良好	底部わずかに平坦部が残存　残存する内外面赤彩	南側P3東 下層	0411
		底径	—						
		器高	(5.0)						
		最大径	—						
9	土師器 鉢	口径	(13.2)	頸部はゆるく絞り，口縁は外反する　胴部は直線的に立ち上がる	口縁内外横ナデ　胴部外面ヘラケズリ　頸部の絞りは指頭による　胴部内面ヘラナデ	細砂粒少 外）赤　7.5R4/6 内）暗赤　7.5R3/6 良好	残存する内外全面赤彩	南西側P3周辺 床直上	0410
		底径	—						
		器高	(3.5)						
		最大径	—						
10	土師器 坏	口径	14.9	えい底部から球形な体部，口縁の内側で稜をもち，わずかに外反しながら開く	口縁内外横ナデ　底部から体部外面をヘラケズリ　内面ヘラナデ後，さらにナデにより平滑な仕上げ	石英などの砂粒多 外）赤橙　10R6/8 内）赤　10R5/8 良好	熱のため半分が黒色化しているが，もとともとは体部下位から口縁及び内面全面に赤彩される	南壁際中央 床直上	0408
		底径	—						
		器高	6.3						
		最大径	—						
11	土師器 鉢	口径	9.3	底部よりやや内湾気味に立ち上がり，口縁はば直立	胴部及び底部をヘラケズリ，口縁内外を横ナデ　内面ヘラナデによりきれいに仕上げ	石英などの砂粒 外）にぶい橙7.5YR7/4 内）橙　7.5YR7/6 良好	口縁外面の一部に赤彩	南壁際 上層	0407
		底径	5.5						
		器高	7.2						
		最大径	—						

らかく，床面としての使用は考えにくい。一方住居跡の土層や覆土中の遺物出土状況及び炭化材の検出状況から埋没後の掘削は考えられず，住居跡廃棄後早い時期に掘削廃棄されたピットと判断された。

カマドは北壁中央に付設されている。カマドの火床は壁面から50cmほど離れている。煙道は壁面を10cmほど掘り込み，急傾斜で立上げている。カマド内部の土層は自然理没過程を表しているようだが，天井部の崩落土がわずかにみられる。カマド内部からは高坏の坏部(4)が火床上から出土し，その上に甕(2)が重なって出土していた。カマドの袖を撤去すると周溝の続きとＰ21が検出された。周溝とＰ21を埋め戻した後にカマドが付設されたものと考えられる。

床面はほぼ平坦であるが，中央部分がやや低く，壁側の床面より5cmほど下がっている。また，図化は

できなかったが，主柱穴（P1，P2，P3，P5）間で床面が硬く踏み固められていた。また床面のところどころが焼土化しており，焼失家屋の可能性が伺えた。

位置を測定して取り上げた**遺物**は170点あり，軽石2点のほかは土師器が出土している。出土遺物はカマドの周辺にやや多く集まり，その他は住居跡の全域でまばらに分布していた。また，焼土のブロックは大小10ヶ所あり，ほとんどが床面近くの土層から検出されている。炭化材は一部が住居跡の中心部に集中し，残りは大きな破片を含めて中心から放射状に出土していた。それらの多くが床面近くからの検出であった。

出土遺物の中から復元された11点の土器を図示した。

第51図3は土層観察面（第47図　SA-SA'セクション）に表れているとおり，甕の底部を欠損し，住居跡の中央に倒置された状態で出土していた。その他の破片はカマドの前面に広く分布し，覆土の中層から下層の間で出土している。4はカマド内部の火床直上からの出土である。坏部が逆さまに置かれている。2はその上に破損した状態で直立していた。1は破損していたが，2の上に横倒しになった状態で出土した。その他の破片はカマドの前面に広く散布していた。5はカマド西側の床面直上から出土した。6，7はカマド周辺の中層から上層にかけて出土している。8，9は住居跡南側から出土している。9は床面直上，8は下層からの出土であった。10，11は南壁際で11は上層，10は下層から出土していた。

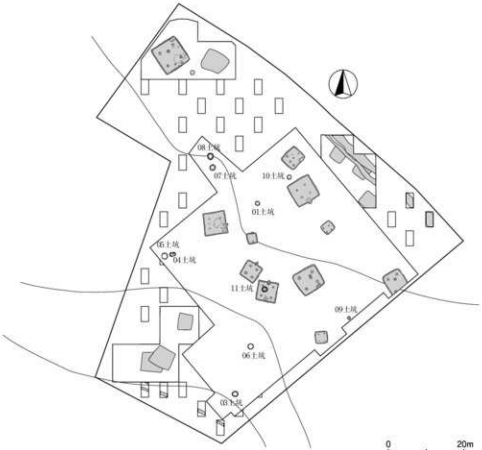
第３節　古墳時代の土坑

本節で扱うのは，古墳時代の土坑ではあるが，はっきりと時期が特定できたものは少なく，多くは遺物が出土せず，時期を特定できなかった。そのため，他の時期の可能性もあるが，土坑についてはここで扱うことにした。

土坑の検出状況は第52図のようにまとまりや，傾向はあまりみられない。出土遺物の関連では隣接する04号土坑と05号土坑の出土遺物に接合関係がみられた。また，07号土坑と隣接した08号土坑にも遺物の接合関係が確認された。さらに，05号土坑と08号土坑から貝ブロックが検出されている。

第29表　古墳時代　土坑一覧表

遺構名称	位置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	時代・時期	備考
		長軸・主軸	短軸	深さ			
01号土坑	L12	1.20	1.10	0.25	円形	古墳時代か	
03号土坑	K22	1.60	1.46	0.88	円形	古墳時代か	
04号土坑	G15	1.57	1.07	0.17	楕円形	古墳時代か	
05号土坑	G15	1.70	推定1.6	0.62	円形	古墳時代	貝ブロック
06号土坑	K20	1.55	1.50	0.61	円形	古墳時代か	
07号土坑	I10	1.58	推定1.5	0.63	円形	古墳時代	
08号土坑	I10	推定1.7	推定1.5	0.60	円形	古墳時代	貝ブロック
09号土坑	Q18	0.75	0.75	0.30	円形	古墳時代か	
10号土坑	M11	1.10	1.07	0.38	円形	古墳時代か	
11号土坑	L17（04住居内）	1.36	1.20	2.06	円形	古墳時代	深さは04号住居跡床面より



第52図　古墳時代の土坑

01号土坑（第53図・図版22）

調査区中央，Ｌ12グリッドで検出されている。

形状は径が110cmほどのほぼ円形を呈する。深さが30cmほどの浅い掘り込みである。東側の半分に撹乱を受けており，良好な遺存状況ではなかった。

覆土は自然埋没した状況を伺わせる土層である。

遺物は出土していない。

03号土坑（第54図・図版22）

調査区南側，Ｋ22グリッドで検出されている。

形状は径が150cmほどの円形を呈する。深さが80cmほどで箱型に掘り込んでいる。

覆土は自然埋没した状況を伺わせる土層である。

遺物は測定せずに取り上げた一括遺物のみで，土師器1点，縄文土器2点が出土している。

06号土坑（第55図・図版23，25）

調査区南側，Ｋ20グリッドで検出されている。

形状は径が150cmほどの円形を呈する。深さが50cmほどで箱型に掘り込んでいる。

覆土は自然埋没した状況を伺わせる土層である。

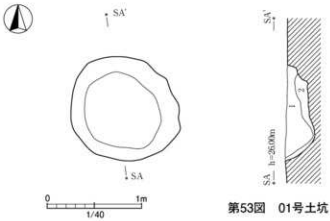
測定して取り上げた**遺物**は土師器1点（P6-1）のみであった。その他に測定せずに取り上げた一括遺物は，縄文土器1点と陶器1点が出土している。

第30表　06号土坑出土遺物観察表　　（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
P6-1	土師器 椀	口径	(12.8)	底部欠損　胴部は内湾しながら立ち上がり口縁直下で内傾に稍ともち，口縁でやや外反して開く	外面胴部はヘラケズリ　口縁から頸部にかけて内外面ともにヨコナデ　胴部下半内面はナデ	白色小砂粒 外）赤　10R5/8 内）口縁　赤　10R5/6 胴　浅黄橙　7.5YR8/4 良好	残存する外面全面と口縁内面に赤彩	中央 上層	P601
		底径	—						
		器高	(7.0)						
		最大径	(13.8)						

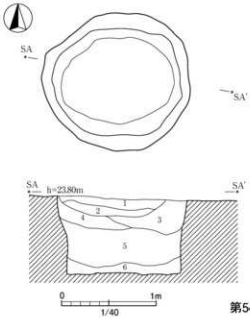
第31表　04号土坑出土遺物観察表　　（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
P4-1	土師器 鉢か	口径	—	底部のみ残存，底部より意識的に立ち上がる	胴部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	白色砂粒，雲母細砂粒 外）赤　10R5/8 内）橙　2.5YR6/8 良好		東側下層から上層	P402
		底径	(6.2)						
		器高	(4.0)						
		最大径	—						
P4-2	土師器 鉢	口径	—	胴部下半のみ残存	胴部外面はヘラケズリ　内面もヘラケズリ	細砂粒 外）赤　10R5/8 内）にぶい橙7.5YR6/3 良好		東側下層及び05土坑上層	P401
		底径	(5.4)						
		器高	(5.1)						
		最大径	—						



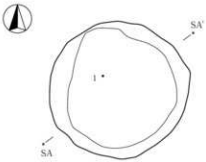
1　暗褐色土層　褐色土を混入　焼土粒子をわずかに　しまり良
2　褐色土層　　暗褐色土を混入　やや粘性あり

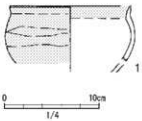
第53図　01号土坑



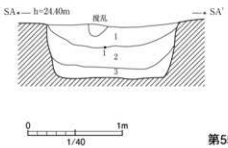
1　暗褐色土層　褐色土をわずかに混入　しまり良
2　暗褐色土層　褐色土を多く混入　ローム中ブロックをわずかに　しまり良くかたい
3　暗褐色土層　褐色土をわずかに混入　ローム中ブロックをわずかに　しまり良
4　褐色土層　暗褐色土を混入　ローム中ブロック　しまり良
5　暗褐色土層　褐色土を混入　ロームブロック・粒子　しまり良　4層よりやわらかい
6　褐色土層　　暗褐色土をわずかに混入　ロームブロック　粘性あり

第54図　03号土坑





06号土坑出土遺物



1　暗褐色土層　ローム中小ブロックを多　焼土粒子をわずかに　しまり良く極めてかたい
2　暗褐色土層　褐色土を混入　ローム中小ブロックをわずかに　しまり良いが1層よりやわらかい
3　暗褐色土層　褐色土を全体に混入　底周辺にロームブロック　しまり良く粘性あり

第55図　06号土坑

05号土坑（第56図～第58図・図版22，23，25）

調査区中央，Ｇ15グリッドで検出されている。04号土坑の約60cm西側に隣接して検出されている。

形状は径が160cmほどの円形を呈する。深さが約60cmで箱型に掘り込んでいる。西側の1/3に撹乱を受けており，完全な遺存状況ではなかった。

覆土は1層から3層，4層から6層とでは同一の埋没過程ではないと思われる。6層から4層まで埋没した後，一部再度掘削され，貝ブロックが主体となる2層を人為的に埋め戻し，3層，1層と自然埋没したものと考えられる。

遺物は土師器が58点，須恵器3点が出土している。遺物のほとんどが1層から3層内の出土であった。これ以外にも貝ブロック中からも遺物が多く含まれており，貝と一緒に一括して取り上げた。貝の分析中に検出した遺物は，土師器47点，須恵器1点，土玉3点であった。その他粘土塊や石などが含まれていた。調査時には気が付かなかったが，貝層中の土砂には灰や小さな炭化片が多量に混入していた。また，この貝層中から出土した土器の多くは鉢や甕の破片であったが，これらの土器は火熱を受けており，さらに表面に白い付着物がみられるものが多かった。

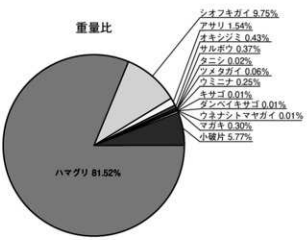
図化した遺物は8点と，貝層中から一括で出土した土玉が3点である。

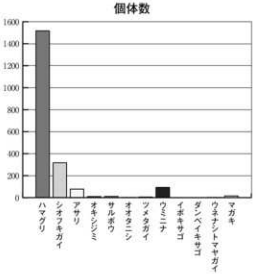
2層の**貝ブロック**は土層全体をすべて取り上げている。取り上げた全量はテン箱で10箱ほどとなった。出土した貝は，長年の保管のため，出土位置を示すラベルがぼろぼろに腐り，判読できなくなっていた。そのため，整理時において08号土坑の貝と混交してしまい，あわせて整理せざるを得なかった。

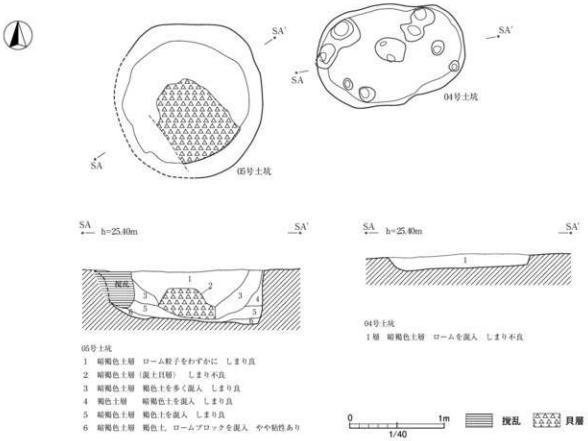
第32表　05号土坑・08号土坑出土貝の種類別重量比及び個体数比

貝種	重量（g）	重量比（%）	個体数	個体比（%）
ハマグリ	33,973.3	81.52	1,518	73.40
シオフキガイ	4,063.6	9.75	318	15.38
アサリ	642.0	1.54	79	3.82
オキシジミ	177.2	0.42	11	0.53
サルボウ	153.9	0.37	13	0.63
オオタニシ	6.5	0.02	4	0.19
ツメタガイ	23.7	0.06	7	0.34
ウミニナ	103.2	0.25	94	4.55
イボキサゴ	1.3	0.01	2	0.10
ダンベイキサゴ	3.9	0.01	1	0.05
ウネナシトマヤガイ	0.1	0.01	4	0.19
マガキ	123.8	0.30	17	0.82
小破片	2,404.5	5.77		
合計	41,677.0	100.0	2,068	100.0

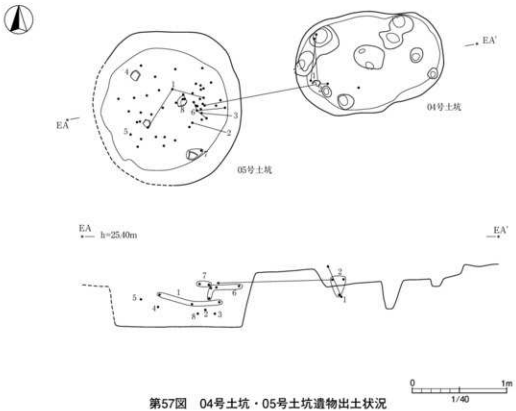
＊種類別個体数は各種の右殻・左殻をそれぞれカウントし，多い数量をその種の個体数としている。
＊小破片の中には，種を分類することができるものが多くみられたが，重量比に大きな差が生じることがないと判断し，分類しなかった。



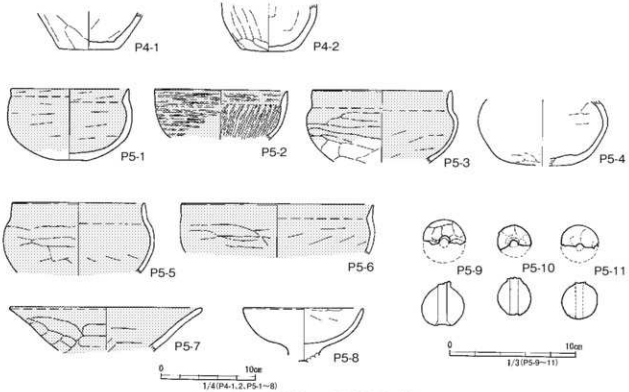




第56図　04号土坑・05号土坑



第57図　04号土坑・05号土坑遺物出土状況



第58図　04号土坑，05号土坑出土遺物

第33表　05号土坑出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
P5-1	土師器 椀	口径	(12.4)	小さな底部から胴部中位に最大径をもち，球形状の胴部．頸部でわずかにすぼまり，口縁で短く外反	外面ヘラケズリ後，ナデ 内面ナデ	白色，雲母細砂粒 外）赤　10R4/6 内）赤　7.5R4/6 良好	赤彩は外面で胴部下半から口縁まで，内面は全面	中央一寄 中層	P505
		底径	(3.3)						
		器高	7.6						
		最大径	(13.2)						
P5-2	土師器 坏	口径	(14.0)	底部欠損．胴部は内湾しながら立ち上がり口縁部下で内傾に稜をもち，口縁はやや外反して直立	外面ナデ整形後，稜位の荒いミガキ　内面は口縁で横位のミガキ，胴部で縦位の粗いミガキ	細砂粒 外）赤　7.5R4/6 内）赤　7.5R4/8 良好	残存する内外全面に赤彩	中央 中層	P506
		底径	—						
		器高	(5.2)						
		最大径	—						
P5-3	土師器 椀	口径	(14.6)	底部欠損．胴部上位に最大径をもち，球形に近い形状．頸部から直立して口縁	胴部外面ヘラケズリ，口縁から頸部まで内外面ともに横ナデ．胴部内面はナデでていねいな仕上げ	砂粒，雲母細砂粒 外）赤　7.5R4/6 胴）にぶい黄橙10YR6/3 内）にぶい赤　7.5R4/4 良好	赤彩は外面で胴部上半から口縁まで，内面は全面	東側 下層	P504
		底径	—						
		器高	(7.6)						
		最大径	(16.2)						
P5-4	土師器 椀	口径	—	胴部のみ残存，やや扁平な球状	胴部外面ヘラケズリ，内面ヘラナデ	白色砂粒多 外）にぶい橙7.5YR7/4 内）灰赤　2.5YR5/2 良好		北側 中層	P509
		底径	—						
		器高	(6.9)						
		最大径	(13.8)						
P5-5	土師器 椀	口径	(14.0)	底部欠損．胴部は球状に立ち上がり，頸部で内傾に稜をもち　口縁はやや内傾し，直線的に立ち上がる	外面胴部はヘラケズリ　口縁から頸部にかけて内外面ともに横ナデ　胴部下半内面はナデ	砂粒，雲母細砂粒 外）赤橙　10R4/4 内）赤　10R4/6 良好	残存する内外全面に赤彩	西側 中層	P507
		底径	—						
		器高	(7.4)						
		最大径	(16.0)						
P5-6	土師器 椀か	口径	(20.4)	底部欠損．胴部は球状に立ち上がり，頸部で内傾に稜をもつ　口縁は内傾し直線的に立ち上がる　口径は復元は大きすぎるか	外面胴部はヘラケズリ　口縁から頸部にかけて内外面ともに横ナデ　胴部下半内面はナデ	雲母細砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　10R4/8 良好	残存する内外全面に赤彩	東側 中層から上層	P508
		底径	—						
		器高	(5.3)						
		最大径	—						
P5-7	土師器 高坏か	坏径	(20.5)	直線的に開く口縁部のみ残存	体部外面ヘラケズリ後，口縁内外横ナデ　内面ナデ	白色，雲母細砂粒 外）橙赤　7.5R3/6 内）橙赤　10R3/6 良好	内外面とも赤彩	南側 上層	P502
		脚径	—						
		器高	(4.7)						
		—	—						
P5-8	土師器 高坏	坏径	(12.8)	胴部のみ残存　縦やかに内湾しながら立ち上がる	外面器面が荒れているが，ヘラケズリ後，ナデ　口縁内外横ナデ　内面ナデ整形であるが，中心部の器面の荒れが激しい	白色，雲母細砂粒多 外）にぶい橙7.5YR6/4 内）にぶい赤褐5YR5/3 良好		中央 下層	P503
		脚径	—						
		器高	(5.6)						
		—	—						
P5-9	土製品 土玉	高さ	3.4	球形　1/2残存 孔径　0.6cm 重量　(16.3g)	白色砂粒多 良好	外）にぶい橙　7.5YR6/4		貝層中	P510
		最大径	3.4						
P5-10	土製品 土玉	高さ	3.0	球形　2/3残存 孔径　0.7cm 重量　(11.4g)	白色砂粒多 良好	外）黒　7.5YR2/1		貝層中	P512
		最大径	2.7						
P5-11	土製品 土玉	高さ	2.8	球形　1/2残存 孔は隅角形　孔径　0.6cm 重量　(13.4g)	白色砂粒多 良好	外）にぶい褐　7.5YR5/3		貝層中	P511
		最大径	2.9						

07号土坑（第59図～第61図・図版23，25）

調査区中央，Ｉ10グリッドで検出されている。

形状は径が150cmほどのほぼ円形を呈する。深さが60cmほどで箱型に掘り込んでいる。西側の一部に撹乱を受けており，良好な遺存状況ではなかった。

覆土の状態は自然埋没したものと思われる。

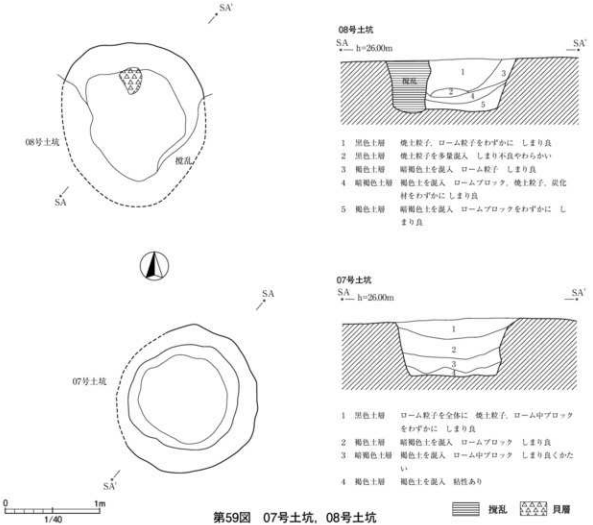
測定して取り上げた**遺物**は土師器が10点出土している。遺物のほとんどが1層，2層内からの出土であった。第61図1は08号土坑の出土土器3点と接合している。また，08号土坑8と接合した土師器1点が出土している。

08号土坑（第59図～第61図・図版23，24，25，26）

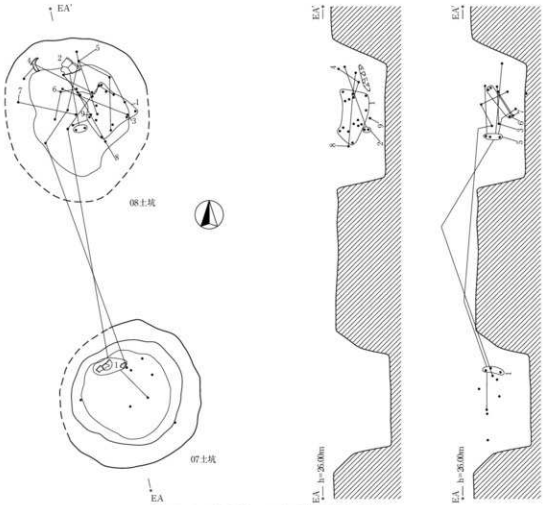
調査区中央，Ｉ10グリッドで検出されている。07号土坑の北側に約1.3mと隣接して検出されている。

平面形状は径が150cm～170cmほどの円形を呈する。深さが60cmほどで断面を箱型に掘り込んでいる。07号土坑とほとんど似た規模と形状をしている。南側の多くに撹乱を受けており，良好な遺存状況ではなかった。

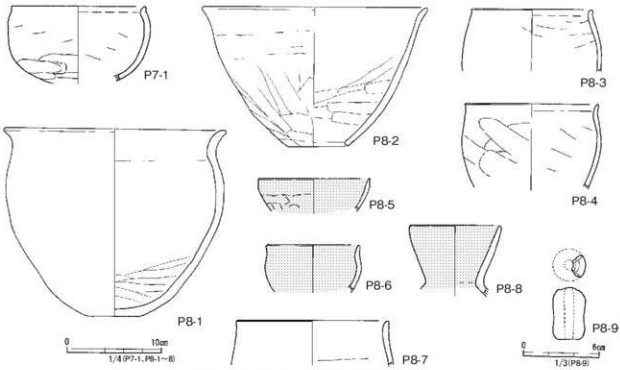
覆土は自然埋没にやや不自然な観もあり，同様に貝ブロックが出土した05号土坑の土層と似ている。



第59図　07号土坑，08号土坑



第60図　07号土坑，08号土坑遺物出土状況



第61図　07号土坑，08号土坑出土遺物

第34表　07号土坑出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
P7-1	土師器 碗	口径	14.2	底部欠損　胴部は内湾しながら立ち上がり，口縁で短く外反	外面は胴部下半でヘラケズり，上半はナデ　口縁から頸部にかけて内外面ともに横ナデ　胴部下半内面はナデ	白色砂粒他 外）橙　2.5YR6/6 内）にぶい橙　5YR7/4 良好		北側 中上層	P701
		底径	—						
		器高	(8.2)						
		最大径	15.2						

第35表　08号土坑出土遺物観察表

（　　）復元値　（　　）現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
P8-1	土師器 甕	口径	23.6	広口の甕　口縁部はゆるやか に外反し，胴部は内湾気味に外傾する	外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラケズり　内面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 茶橙　7.5YR4/2 良好	1/2残存 底部残存	東側 中上層	P801
		底径	6.0						
		器高	19.8						
		最大径	23.1						
P8-2	土師器 鉢	坏径	24.0	単孔式　胴部は大きく外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに外反する	外面口縁部ヨコナデ，胴部ヘラケズり　内面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	石英・長石を含む にぶい黄橙　10YR5/4 良好	底部1/3欠損 赤彩	北から中央 上層から中層	P802
		器高	14.7						
		脚径	6.6						
		—	—						
P8-3	土師器 鉢	口径	(12.8)	口縁から胴部上半のみ残存　ゆるく緩やかに頸部より，口縁は短くわずかに外反	外面器面の剥離激しいが，ヘラケズり　口縁内外面は横ナデ　内面はヘラケズり	白色小砂粒多 外）橙　2.5YR7/6 内）暗赤灰　2.5YR3/1 良好		中央 中層	P806
		底径	—						
		器高	(6.7)						
		最大径	(17.6)						
P8-4	土師器 鉢	口径	(14.2)	底部欠損　胴部上位に最大径をもち，緩傾斜状の胴部　頸部から外反して開く口縁	胴部外面ヘラケズり，口縁から頸部まで内外面ともに横ナデ　胴部内面はヘラナデ	白色砂粒，雲母細砂粒多 外）赤橙　10R6/6 内）地は赤だが黒変化 良好		北側 中上層	P804
		底径	—						
		器高	(8.9)						
		最大径	(14.8)						
P8-5	土師器 坏か	口径	(11.8)	底部欠損　わずかに内湾しながら開き　口縁で直線的に立ち上がる	外面体部はヘラケズり　口縁内外面ともに横ナデ　胴部内面はナデ	砂粒 外）赤　10R5/8 内）赤　10R5/8 良好	残存する内外全面に赤彩　一部地が見える浅黄橙7.5YR8/4	中央 中層 及び07土坑中層	P808
		底径	—						
		器高	(3.5)						
		最大径	—						
P8-6	土師器 碗	口径	(9.8)	底部欠損　胴部は内湾しながら立ち上がり，口縁はやや外反して，短く立ち上がる	外面胴部はヘラケズり後，ナデ　口縁から頸部にかけて内外面ともに横ナデ　胴部内面は器面剥離のため不明	小砂粒 外）赤　10R4/8 内）赤　10R5/6 良好	残存する内外全面に赤彩	中央 中層	P807
		底径	—						
		器高	(5.0)						
		最大径	(10.2)						
P8-7	土師器 鉢	口径	(16.2)	口縁から胴部上半のみ残存　ゆるく緩やかに頸部より，口縁はわずかに外反	外面器面の剥離激しいが，ヘラケズり　口縁内外は横ナデ　内面は上位ヘラナデ，下位ヘラケズり	小砂粒多 外）暗赤灰　10R4/1 内）赤黒　10R2/1 良好		中央 中層	P805
		底径	—						
		器高	(4.9)						
		最大径	(17.2)						
P8-8	土師器 坩	口径	(9.6)	口縁部の一部残存，直線的に立ち上がる口縁	外面ナデ　口縁高内外面横ナデ　内面ナデ	細砂粒，雲母 外）赤　10R4/6 内）赤　10R4/6 良好	残存する全外面，内面は口縁部のみに赤彩　一部地が見えるにぶい橙5YR6/4	中央 中層	P810
		底径	—						
		器高	(7.5)						
		最大径	—						
P8-9	土製品 土玉	外径	(2.6)	長さ　4.1	細砂粒　にぶい橙　7.5YR7/4　良好			中央 中層	P809
		孔径	(0.8)	1/4残存					

測定して取り上げた**遺物**は土師器が102点，土玉1点，粘土塊2点出土している。遺物のほとんどが1層～4層内の出土であった。07号土坑との接合関係は前述のとおりである。また，3層ないし4層中から**貝ブロック**が検出されている。前述のごとく，貝サンプルは05号土坑のものと混交してしまっている。貝の出土量は少なく，当時の資料ではビニール袋1杯分で，テン箱およそ1/4弱であった。

09号土坑（第62図・図版24）

調査区西端，Q18グリッドで検出されている。

形状は径が80cmほどのほぼ円形を呈する。深さが25cmほどの緩やかな椀状の掘り込みである。

覆土は2層に分層した。

遺物は出土していない。

10号土坑（第63図・図版24）

調査区中央やや北寄り，M11グリッドで検出されている。

形状は径が120cmほどのほぼ円形を呈する。深さが40cmほどで箱型に掘り込んでいる。底面には小さなピットが3ヶ所みられた。

覆土は自然埋没した状況を伺わせる土層である。

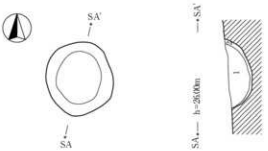
遺物は測定せずに取り上げた土師器1点が出土している。

11号土坑（第64図・図版24）

調査区中央，L17グリッドで検出されている。当初，04号住居跡の床面から検出されていたピットであったため，住居跡付属のピットとしていたが，ピット周辺の住居跡の床面の状況から，住居跡廃棄後早い時期に掘削，廃棄されたピットと判断し，11号土坑とした。

形状は径が140cm×120cmほどの円形を呈する。深さが200cm以上あり，しっかりと掘り込んでいる。

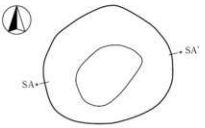
覆土は自然埋没した状況を伺わせる土層である。**遺物**の出土はないものの，遺構検出面では炭化材が多量に出土している状況が観察されている。住居跡覆土中にあった炭化材が流れ込んだものとみることができるだろう。

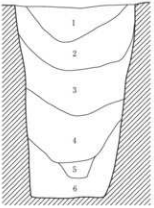


1　黒色土層　褐色土をわずかに混入　ローム粒子　しまり良
2　暗褐色土層　褐色土をわずかに混入　粘性あり

0　1m
1/40

第62図　09号土坑

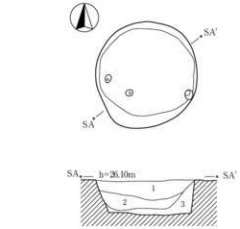




1　暗褐色土層　黒色土を全体的に混入　ローム粒子，焼土粒子をわずかに　しまり良
2　暗褐色土層　褐色土を混入　ローム小ブロックをまばらに　1層よりやわらかい
3　褐色土層　　ロームブロックを全体に　ややしまり良
4　暗褐色土層　ローム小ブロック全体に　しまり不良
5　ロームブロック
6　褐色土層　　暗褐色土を混入　しまり不良

0　1m
1/40

第64図　11号土坑



1　褐色土と暗褐色土の混土層　ローム粒子　しまり良
2　黒褐色土層　褐色土，ロームブロックを混入　しまり良
3　褐色土層　　ロームブロック　やや粘性あり

0　1m
1/40

第63図　10号土坑

第４節　古墳時代の検出遺構とグリッド出土遺物

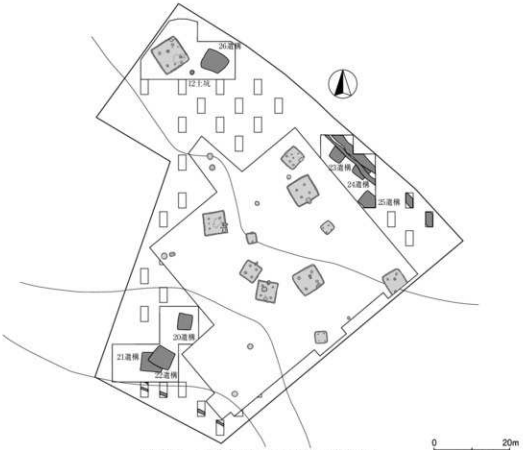
調査区域の中の現状保存区域で，竪穴住居跡あるいは土坑と推定される遺構が確認されている。これらの遺構は覆土の状態などから古墳時代に属するものと推定された。

遺構は第36表のとおり，竪穴住居跡と想定される遺構が7軒，土坑1基が検出されている。

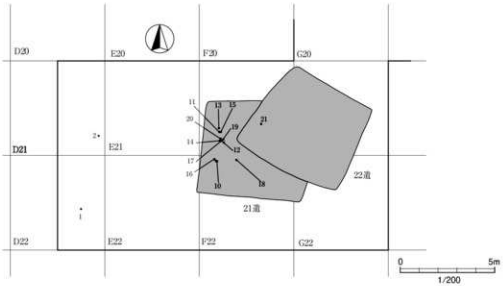
第36表　その他の古墳時代の検出遺構一覧表

〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値

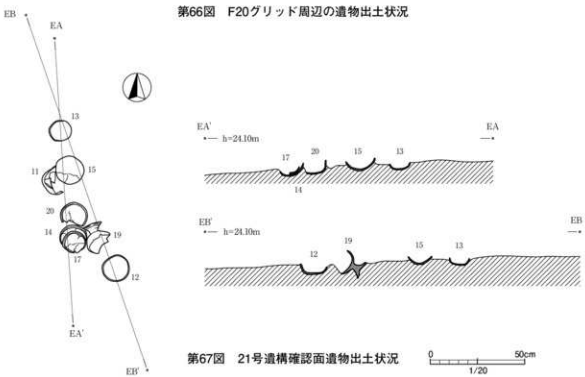
遺構名称	種別	位置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	カマド・炉	時代・時期	備考
			長軸・主軸	短軸	深さ					
20号遺構	竪穴住居跡	H19	推定4.1	推定3.8	—	方形	N-8°-E	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
21号遺構	竪穴住居跡	F21	推定5.7	推定5.1	—	方形	N-87°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
22号遺構	竪穴住居跡	G21	推定5.6	推定5.1	—	方形	N-59°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
23号遺構	竪穴住居跡	P10	推定3.8	推定3.8	—	推定方形	N-51°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
24号遺構	竪穴住居跡	R11	推定4.1	推定3.8	—	推定方形	N-49°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
25号遺構	竪穴住居跡	R12	推定4.4	推定4.0	—	方形	N-49°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
26号遺構	竪穴住居跡	J5	推定6.2	推定5.3	—	方形	N-58°-W	—	古墳時代か	ブラン確認（現状保存）
12号土坑	土坑	H5	推定1.2	推定1.1	—	円形	—	—	不明	ブラン確認（現状保存）



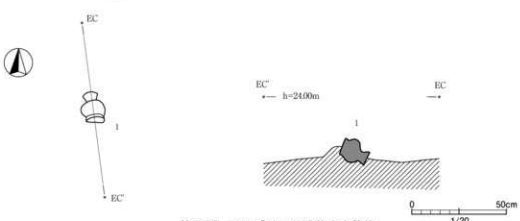
第65図　その他検出された古墳時代の遺構



第66図　F20グリッド周辺の遺物出土状況



第67図　21号遺構確認面遺物出土状況



第68図　D21グリッド遺物出土状況

Ｆ20グリッド周辺で検出された遺構と遺物（第65図～第69図・図版26～28）

Ｈ19グリッド周辺で1軒（20号遺構），Ｆ20，Ｆ21，Ｇ20，Ｇ21グリッドから2軒（21号遺構，22号遺構）の遺構が検出されている。

20号遺構の確認面での覆土は，黒褐色土を主体とするものであった。あまり撹乱を受けておらず，遺存状況は良好なものとみられた。確認面でのまとまった出土はみられない。

21号遺構と**22号遺構**は重複している。確認面での観察では，21号が古く，22号が新しいものとみられた。しかし，いずれの遺構も覆土の主体は黒褐色土であり，明瞭な差は表れていない。確認面上でまとまって遺物が出土していたが，明らかに覆土上層からの出土であり，遺構の時期を特定することはできない。21号遺構上面では第69図10～20がまとまって出土していた。器種は半完形の甕が1点，完形の坏が5点，高坏が完形・半完形合めて5点である。出土状況からこの遺構が廃棄されほとんど埋まりきった後に，同一面で意図的に残されたか，あるいは同一時期にまとまって廃棄された様相がうかがえる。第69図21は22号遺構上面からの出土であった。

第69図1はＤ21グリッドから出土している。遺構の確認面としているⅢ層のソフトローム上面で，横転して検出された（第68図）。この付近では遺構の検出はみられない。土器単独の出土である。

第69図2はＤ20グリッドから出土している。

Ｑ11グリッド周辺で検出された遺構と遺物（第65図，69図・図版27，28）

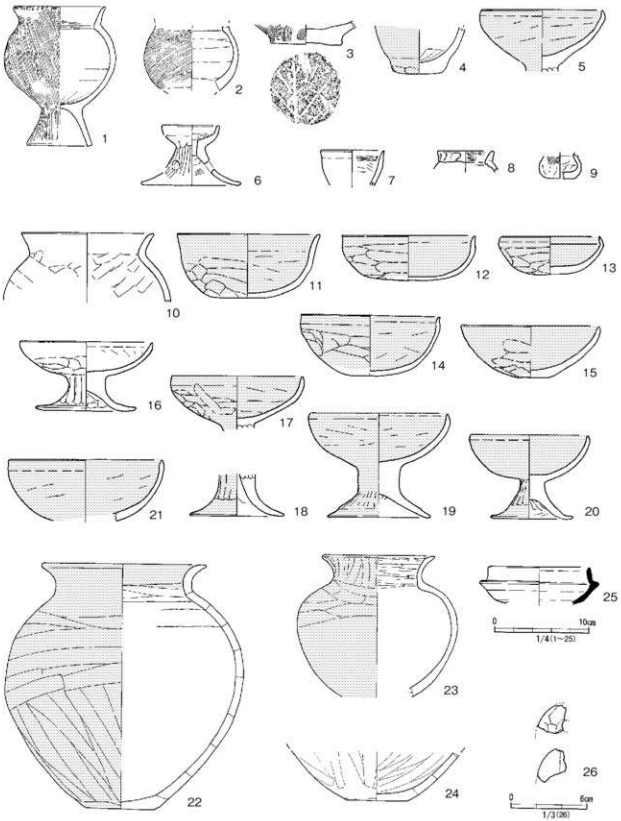
Ｐ9，Ｐ10グリッドで23号遺構，Ｑ10，Ｑ11グリッドで24号遺構，Ｑ12，Ｒ12グリッドで25号遺構が検出されている。

23号遺構の覆土の主体は黒褐色土であり，褐色土の混入もみられた。**24号遺構**の覆土の主体は黒褐色土であった。これら2軒の遺構は北壁側に溝状遺構の撹乱を受けていた。**25号遺構**の覆土の主体は黒褐色土である。遺構の南隅と東隅は検出していない。第69図22～24は25号遺構の確認面から出土している。23号，24号遺構周辺からは土師器の散布は見られるが，図化できる資料はなかった。

Ｉ5グリッド周辺で検出された遺構と遺物（第65図・図版28）

Ｉ4，Ｉ5，Ｊ4，Ｊ5グリッドから**26号遺構**が検出されている。竪穴住居跡が想定されるが，確認面から土師器の散布がみられるものの時期を特定することはできなかった。

Ｈ5グリッドでは径が1.1mほどの円形の**12号土坑**が検出されている。



第69図　古墳時代のグリッド出土遺物

第37表　グリッド出土遺物観察表(1)

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No
1	土師器 小型台付甕	口径	9.6	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は球形を呈し、台部は「八」の字状に開く	口唇部外面刷み目、口縁部・胴部・台部ハケ整形、内面口縁部ハケ整形、体部ヘラナデ、台部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい橙　7.5YR5/4 良好	完形品	D21	G001
		底径	6.8						
		器高	14.8						
		最大径	11.9						
2	土師器 小型台付甕	口径	—	胴部は扁球形を呈する	外面ハケ整形　内面ヘラナデ	石英・長石を含む にぶい黄橙　10YR6/4 良好	胴部破片	D20	G002
		底径	—						
		器高	(6.9)						
		最大径	10.0						
3	土師器 甕	口径	—	底部のみ残存　底部に本葉痕	外面ハケ整形	白色砂粒多 外）底面　橙　5YR7/8 内）灰白　5YR8/2 良好	赤彩は外面全面と坏内面	F6	G007
		底径	7.4						
		器高	(2.6)						
		最大径	—						
4	土師器 鉢	口径	—	胴部は内湾気味に外傾して立ち上がる	外面ヘラナデ　内面ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む 赤　10R4/8 良好	底部破片 外面赤彩	21・22号遺構確認面	G003
		底径	5.2						
		器高	(4.9)						
		最大径	—						
5	土師器 高坏	坏径	12.8	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁で直立する　脚欠損	坏外面はナデによって平滑に仕上げる　口縁内外横ナデ、坏内面もナデによりきれいに仕上げ	白色小砂粒 外）赤　10R5/6 内）赤　10R4/6 良好	残存する坏部内外全面に赤彩	E21、F20、F21	G004
		脚径	—						
		器高	(7.5)						
		—	—						
6	土師器 器台	器受径	(6.1)	器受部は大きく直線的に短く開き、口縁で直立する　脚は大きく外反しながら開く	器受部外面はヘラケズリ後、口縁内外に横ナデし、底はヘラナデ　脚外面はヘラケズリ後、縦内外面に横ナデ、内面はハケ整形	白色、雲母小砂粒 外）にぶい黄橙10YR6/4 内）鈍橙に近い橙　7.5YR6/3 脚　灰褐　7.5YR6/2 良好		R19	G008
		脚径	(10.6)						
		器高	6.3						
		—	—						
7	土師器 鉢	口径	(6.6)	底部欠損	口縁内外横ナデ　胴部内外ともにナデ	小砂粒 外）にぶい黄橙10YR7/3 内）橙　5YR6/6 良好		K14	G015
		底径	—						
		器高	(3.7)						
		最大径	—						
8	土師器 鉢	口径	(6.0)	胴部以下欠損　口辺を折り返し機台口縁	機会帯に指頭の圧痕を残す　内面は口縁にハケ整形、胴部にナデ	細砂粒 外）にぶい黄橙10YR7/4 内）にぶい黄橙10YR7/4 良好		F20	G017
		底径	—						
		器高	(2.2)						
		最大径	—						
9	土師器 ミニチュア土器	口径	—	口縁部欠損	外面は手捏痕、ハケ整形	小砂粒 外）赤橙　10R5/4 内）橙　5YR7/6 良好	壺を模したものか	N16	G014
		底径	(3.0)						
		器高	(2.6)						
		最大径	(4.5)						
10	土師器 甕	口径	(14.0)	胴部中位で最大径をもち口縁は緩至で緩やかに屈曲し外反する	胴部ヘラケズリ口縁内外面横ナデ　胴部内面にも荒いヘラケズリ	白色砂粒 外）にぶい橙7.5YR7/3 内）浅黄橙　7.5YR8/4 良好		21号遺構確認面	2110
		底径	—						
		器高	(7.3)						
		最大径	(17.7)						
11	土師器 椀	口径	15.1	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁直下内面に稜をもち、口縁でやや外反する	体部外面にヘラケズリ、口縁内外面に幅広く横ナデ　内面ナデ、底部にはヘラケズリのまま、全体に内面は荒い仕上げ	白色、雲母小砂粒多 外）赤　10R4/6 内）にぶい黄橙　10YR7/3 赤　10R4/6 良好	外面では底部を除く全面、内面は全面に赤彩	21住居確認面上	2105
		底径	6.2						
		器高	6.8						
		脚径	—						
12	土師器 坏	口径	14.2	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁直下の内面に稜をもち、口縁で外反する	体部外面にヘラケズリ、口縁内外面に横ナデ　内面ナデ	白色砂粒等多 外）赤　7.5R4/8 内）赤　7.5R4/6 底部にぶい橙　7.5YR7/3 良好	外面では底部を除く全面、内面は全面に赤彩	21号遺構確認面	2102
		底径	3.4						
		器高	4.8						
		最大径	—						
13	土師器 坏	口径	10.4	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁直下に中や屈曲しながら口縁で内傾する	体部外面にヘラケズリ、口縁内外面に横ナデ　内面ナデ	石英小砂粒 外）赤　10R4/8 底部にぶい橙　7.5YR6/4 内）赤　10R4/6 良好	外面では底部を除く全面、内面は全面に赤彩	21号遺構確認面	2104
		底径	3.7						
		器高	4.1						
		最大径	11.1						
14	土師器 坏	口径	14.8	丸い底部から、球形の体部　口縁で直立し、先端で外反する	体部外面ヘラケズリ、口縁内外を横ナデ　体部内ヘラナデ、丁寧に仕上げる	白英等小砂粒 外）赤橙　10R4/4 底部にぶい黄橙10YR7/4 内）赤　10R5/6 良好	底部に「十」字の線刻	21号遺構確認面	2101
		底径	—						
		器高	7.4						
		最大径	—						
15	土師器 坏	口径	14.7	底部より緩やかに内湾しながら大き く開き、口縁でやや直立	体部外面にヘラケズリ、口縁内外面に広く横ナデ　底ナデ	白色砂粒等多、雲母細片 外）赤橙　10R6/8 内）赤橙　10R6/6 良好	外面では底部を除く全面、内面は全面に赤彩　ややまだら	21号遺構確認面	2103
		底径	3.9						
		器高	5.5						
		最大径	—						
16	土師器 高坏	坏径	(14.1)	坏は緩やかに大きく内湾しながら立ち上がり口縁で直立　脚の裾は大い脚から外反しながら開く	坏体部外面でヘラケズリ、口縁内外面を横ナデ、内面はヘラケズリ　内面の器面が荒れている　脚外面にはヘラケズリ、裾を横ナデ、内面にはヘラケズリ	白色砂粒 外）橙　5YR6/6 内）橙　5YR6/6 良好		21号遺構確認面	2106
		脚径	(10.8)						
		器高	7.3						
		—	—						

第37表　グリッド出土遺物観察表(2)

（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No
17	土師器 高坏	坏径	14.2	坏は緩やかに大きく内湾しながら立ち上がり口縁で直立　脚は欠損	坏体部外面でヘラナデ・ヘラケズリ、口縁内外面を横ナデ、内面はヘラナデでいねいな仕上げ	白色砂粒やや多 外）赤　10R4/6 内）赤　10R5/6 良好	残存する坏部内外全面に赤彩　内面はややまばらな残存	21号遺構確認面	2108
		脚径	—						
		器高	(5.8)						
		—	—						
18	土師器 高坏	坏径	—	坏部欠損　器厚は厚く、大きく外反しながら開く	脚は外面ヘラケズリ、脚内外面に横ナデ、脚内面にもヘラケズリが残る	細砂粒 外）赤　10R4/6 内）黄橋　7.5YR3/1 良好	赤彩は残存する脚外面	21号遺構確認面	2111
		脚径	10.0						
		器高	(4.4)						
		—	—						
19	土師器 高坏	坏径	14.6	坏は緩やかに大きく内湾しながら立ち上がり口縁で直立　脚の裾は太い脚から直線的に開く　裾に横もつ	全体に器面が荒れる　坏体部外面でナデ、口縁内外面を横ナデ、内面はナデ　平滑に仕上げる　脚外面にはミガキか、裾を横ナデ、内面にも横ナデ	白色砂粒多 外）赤　10R5/6 内）赤　10R4/6 脚）にぶい橋　7.5YR5/4 良好	赤彩は外面全面と坏内面	21号遺構確認面	2107
		脚径	11.0						
		器高	11.0						
		—	—						
20	土師器 高坏	坏径	12.4	坏は緩やかに大きく内湾しながら立ち上がり口縁で直立　脚の裾は脚から外反しながら開く	坏体部外面でヘラナデ、口縁内外面を横ナデ、内面はていねいなナデ、平滑に仕上げる　脚は外面ヘラケズリ、脚内外面に横ナデ、脚内面にもヘラケズリが残る	白色小砂粒 外）赤　10R4/6 内）赤　7.5R4/6 脚　にぶい橙　7.5YR6/4 良好	外面全面、坏内面に赤彩	21号遺構確認面	2109
		脚径	(8.8)						
		器高	8.9						
		—	—						
21	土師器 坏	口径	(16.2)	底部は欠損しているが、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁で直立する	体部外面にヘラケズリ、口縁内外面に横ナデ　内面ナデ	白色砂粒 外）赤　10R5/6 内）褐赤　10R3/6 良好	残存する内外面で赤彩	22号遺構確認面	2202
		底径	—						
		器高	(6.5)						
		最大径	—						
22	土師器 甕	口径	17.3	口縁部はカーブを描き外反し、胴部は無花果状を呈する	外面口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石を含む 浅黄橙　7.5YR8/6 黒　7.5YR2/1　良好	体部一部欠損 外面、内面口縁部赤彩	25号遺構確認面	2503
		底径	7.4						
		器高	26.0						
		最大径	25.4						
23	土師器 小型甕	口径	12.0	口縁部はカーブを描き外反し、胴部は扁球形を呈する	外面口縁部ヘラナデ、胴部ヘラケズリ　内面口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ	石英・長石を含む 明赤褐　2.5YR5/6 良好	口縁部1/2・胴上部1/2残存 赤彩	25号遺構確認面	2502
		底径	—						
		器高	(15.0)						
		最大径	17.0						
24	土師器 甕	口径	—	平底の底部から胴部は球形を呈する	外面ヘラケズリ　内面ヘラナデ	石英・長石を含む 橙　2.5YR7/8 黒　10YR2/1 良好	底部残存	25号遺構確認面	2501
		底径	6.5						
		器高	(5.0)						
		最大径	—						
25	須恵器 坏身	口径	(10.8)	底部欠損　支から口縁が内傾しながら立ち上がる	ロクロ成形後、底部にヘラケズリ	白色小砂粒 灰　N5/ 良好		G15	G005
		底径	—						
		器高	(4.0)						
		—	—						
26	土製品 土玉	高さ	(2.7)	球形　1/9残存 孔径不明 重量 (6.3g)	白色砂粒　　外）灰橋　7.5YR4/2 良好			O16	G019
		最大径	(2.2)						

第Ⅳ章　奈良・平安時代以降

本章で扱うのは，奈良・平安時代以降の遺構と遺物である。遺構では奈良・平安時代の竪穴住居跡が2軒，時期を特定できないが，近世以降の新しいものと考えられる6条の溝状遺構が該当する。4条の溝状遺構は保存区域にあり調査がされていないため，記載は省略する。また，本調査対象区域にある2条の溝状遺構は08号住居跡にかかっているため，土層図は記載しているが，詳細については省略した。

グリッド出土遺物については，須恵器・陶磁器・擂鉢・砥石などが出土している。また，銭貨として，中近世のものと，昭和期の5円硬貨が出土していた。

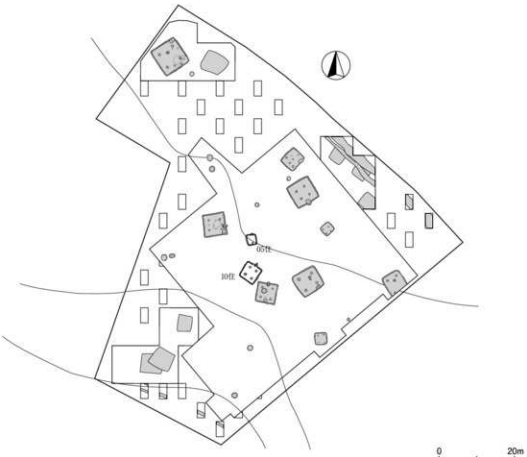
第１節　奈良・平安時代の竪穴住居跡

調査区域内で奈良・平安時代に該当する遺構は，竪穴住居跡が2軒である。調査区中央に位置し，周辺に他の遺構が存在する可能性は伺われない。

第38表　奈良・平安時代　竪穴住居跡一覧表

〔　〕現存または調査区域内で計測できた計測値

遺構名称	位置（グリッド名称）	規模（m）			平面形態	主軸・長軸方向	カマド・炉	主柱穴	周溝	貯蔵穴	出入口ピット	備考
		長軸・主軸	短軸	深さ								
05号住居跡	K14	2.9	2.73	0.74	方形	N-12°-W	カマド	1本	全周	なし	なし	
10号住居跡	L16	5.42〔4.62〕	4.64	0.58	方形	N-33°-E	カマド	4本	全周	なし	なし	主軸〔 〕内はカマドを除く



第70図　奈良・平安時代の竪穴住居跡

05号住居跡（第71図～第74図・図版29）

調査区中央，K14グリッドで検出されている。

住居跡の形状が一辺3m弱の方形を呈する竪穴住居跡である。各壁は平面的にほとんど直線で，各隅はなだらかに屈曲する。

住居跡の覆土はなだらかな堆積を示し，自然埋没した状況を伺わせる土層である。

住居跡の内部構造は北壁中央のやや東寄りにカマド，カマド部分を除いて全周する周溝，柱穴が1ヶ所検出されている。

第39表　05号住居跡

位置	K14			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		2.9	短軸	2.73	深さ	0.74
長軸方向	N-12°-W						
カマド	位置	北壁中央					
ピット		位置	性格	規模（cm）			
				縦	横	深さ	
	P1	南壁側中央	柱穴	32	34	43	

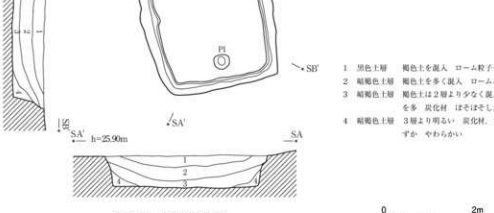
周溝はカマド部分で途切れてはいるものの全周する。周溝の幅が10cm前後で，深さが8cmほどであるが，しっかりと掘り込まれた周溝となっている。覆土は暗褐色土を主体とし，黒褐色土やローム粒子を混入し，粘りのある土層であった。

P1は**柱穴**と考えられるが，1ヶ所のみで他にピットは検出されていない。ピットの覆土は暗褐色土を主体とし，ロームブロックを混入し，とても硬くしまった土層であった。

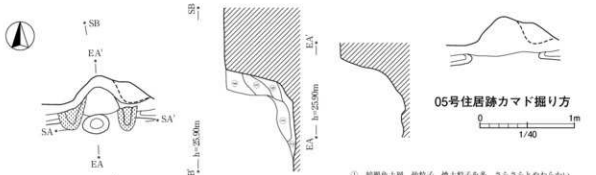
床面は遺構確認面から70cmほどしっかりと掘り込まれており，ほとんど平坦であった。図化はできなかったが，住居跡の中央付近，P1の北側に70cm～80cmほどの範囲で床面が踏み固められて，やや硬くなった状況が観察されている。

カマドの構造は，約30cm×20cmの規模の火床を壁際に配置し，煙道を床から斜めに40cmほど削って作り出している。袖は暗褐色土に白色粘土と砂粒を混入して構築している。天井を含めかなり崩壊している。カマドの袖等を撤去し精査したが，カマド構築以前に周溝等を掘った痕跡は認められなかった。

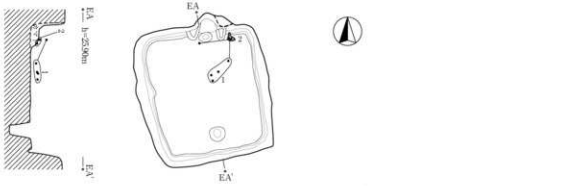
測定して取り上げられた**遺物**は37点あり，その内縄文土器が3点，須恵器8点，土師器26点であった。出土傾向は出土量が少なく，住居跡全体に分布する。



第71図　05号住居跡



第72図　05号住居跡カマド　　カマド袖



第73図　05号住居跡遺物出土状況

第74図　05号住居跡出土遺物

第40表　05号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　〈　　〉現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	須恵器 坏	口径	13.8	ロクロ成形　体部の開きは直立気味に立ち上がる	体部下端回転ヘラケズリ 底部はあきり後、外縁回転ヘラケズリ	細砂粒 外）灰　7.5Y6/1 内）灰　7.5Y5/1 良好	内外面に火だすき	カマド前 下層から中層	0501
		底径	8.8						
		器高	4.5						
		最大径	—						
2	須恵器 坏	口径	(13.2)	ロクロ成形　体部の開きは緩やかに立ち上がる	体部下端手持ちヘラケズリ 底部はあきり後、外縁手持ちヘラケズリ	1mm大の砂粒 外）灰　7.5Y6/1 内）灰　7.5Y5/1 良好	内外面に火だすき	カマド東側脇 下層	0502
		底径	(8.2)						
		器高	4.3						
		最大径	—						
3	須恵器 坏	口径	—	ロクロ成形　体部の開きは緩やか	体部下端回転ヘラケズリ 底部は回転ヘラケズリか	白色細砂粒少 外）灰白　10Y7/1 内）灰　7.5Y6/1 良好		覆土一括及び K14、J13出土	0503
		底径	(5)						
		器高	(1.9)						
		最大径	—						

図化した遺物は須恵器が3点のみであった。土師器は小破片が多く図化できるものはなかった。第74図1，2はカマド前面の床面近くからの出土であった。

10号住居跡（第75図～第78図・図版30，31）

調査区中央，L16グリッド周辺で検出されている。

第41表　10号住居跡

位置	L16			形態	方形		
規模（m）	主軸・長軸		4.62	短軸	4.64	深さ	0.58
長軸方向	N-33°-E						
カマド	位置	北東壁中央					
		位置	性格	規模（cm）			
				縦	横	深さ	
ピット	P1	西隅側	主柱穴	62	58	31	
	P2	南隅側	主柱穴	64	62	40	
	P3	東隅側	主柱穴	72	70	65	
	P4	北隅側	主柱穴	58	56	62	

住居跡の形状が一辺4.6m前後の方形を呈する竪穴住居跡である。各壁は平面的にほぼ直線で，各隅はほとんど丸みをもたない。

住居跡の覆土はなだらかに堆積し，自然埋没した状況を示している。

住居跡の内部構造は北東壁中央に位置するカマド，カマド部分を除いて全周する周溝，主柱穴4ヶ所が検出されている。

周溝はカマド部分で途切れてはいるものの全周している。幅は15cm～20cmで，深さ10cm前後のしっかりした掘り込みであった。覆土は暗褐色土が主体で，褐色土・黒褐色土の混入がみられ，ローム小ブロックも多量に混入し，やや硬くしまった土層であった。

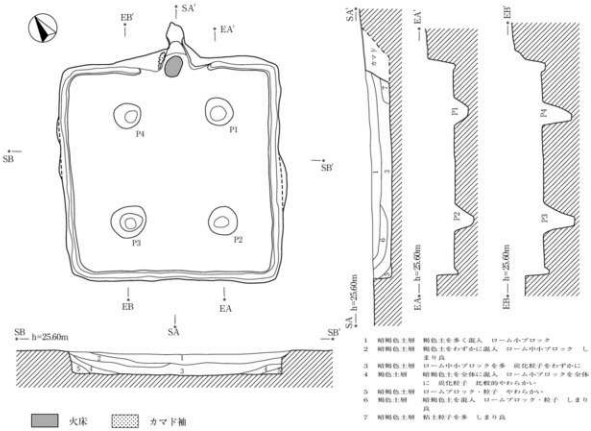
主柱穴は4ヶ所検出されている。P1，P2，P3，P4は60cm～70cmと比較的大きな径であり，深さが30cm～60cmほどと，ばらつきがみられるものの，しっかりと掘り込まれたピットである。

P1は暗褐色土を主体とし，ローム小ブロックの混入が多く，焼土粒子も多く含まれるしまりの良い覆土であった。P2はP1とほぼ同様の覆土であるが，比較的やわらかい土層であった。P3もP1と同様の覆土であるが，黒褐色土を混入し，焼土粒子を含むややわらかい土層であった。P4は暗褐色土を主体とし，黒褐色土を混入し，ローム小ブロックや焼土粒子を少量含む覆土であった。

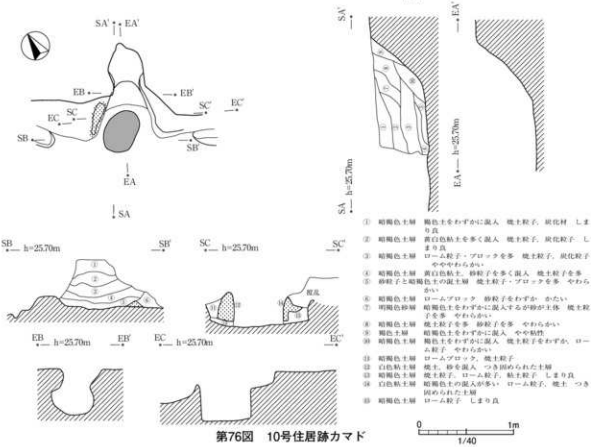
カマドは北東壁の中央に付設されている。火床は壁面を掘り込んで設けられ，さらに壁面を掘り込んで煙道を設け急傾斜で立ち上げている。カマド内部の土層は天井部の崩落後に自然に埋没した過程を表しているようだ。袖は壁面を掘り込んで作られている。調査後，袖などを撤去して掘り方を確認しているが，周溝はこの部分で途切れており，カマド構築以前に周溝などが掘り込まれた痕跡はみられなかった。

位置を測定して取り上げた**遺物**は70点あり，その内石が2点，縄文土器6点，須恵器9点あり，土師器は53点であった。出土傾向は遺物数が少ないものの，そのほとんどがカマド周辺にまとまって出土している。

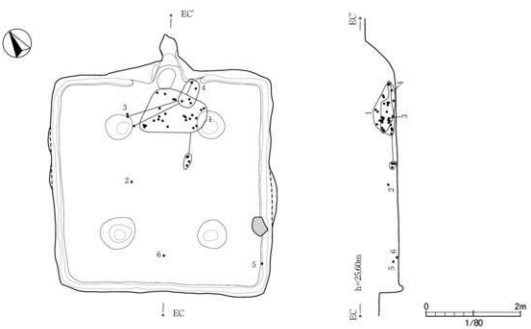
出土遺物の中から6点の遺物を図化した。第78図1はカマド前面に分布し，覆土の下層から上層までの範囲で出土していた。2は住居跡中央の覆土中層からの出土であった。3はカマド前面の中層，4もカマド前面の下層から中層の間で出土している。5は住居跡南隅の周溝上の下層からの出土であった。6は南西壁側の床面直上層から出土していた。



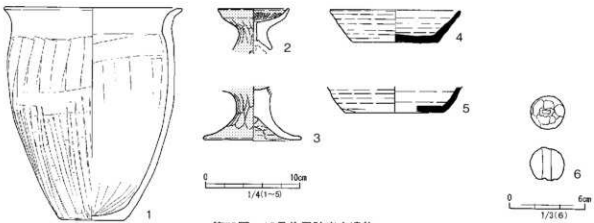
第75図　10号住居跡



第76図　10号住居跡カマド



第77図　10号住居跡遺物出土状況



第78図　10号住居跡出土遺物

第42表　10号住居跡出土遺物観察表

（　　）復元値　〔　　〕現存値

No.	器種	計測値 (cm)		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考	出土状況	整理No.
1	土師器 甕	口径	19.0	口縁部は外反し、胴部は長胴化を呈する	外面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラケズリの後ヘラナデ 内面口縁部ヨコナデ　胴部ヘラナデ	石英・黒色粒子・長石を含む にぶい赤褐　5YR4/4 良好	胴部1/2欠損	カマド前一番下層から上層	1004
		底径	6.4						
		器高	22.5						
		最大径	17.7						
2	土師器 器台	受部径	7.6	器受部は大きく開き、口縁で立ち上がり、やや外反する　脚大半は欠損	外面では器受部下半から脚にかけてヘラケズリ、口縁内外横ナデ　器受部内面はミガキ、脚はヘラケズリ	雲母など細砂粒 (外)赤橙　10R6/6 (内)器受　赤橙　10R6/8 脚　にぶい橙7.5YR7/4 良好	赤彩は残存する外面と器受部内面	中央 中層	1002
		脚径	—						
		器高	(4.8)						
		最大径	—						
3	土師器 高坏	受部径	—	脚は太い球金部から大きく外反しながら開く　坏部欠損	脚上半をヘラケズリ後、全体をナデ、脚に幅広く横ナデ　内面はヘラケズリ	白色、雲母細砂粒 (外)赤　10R5/6 (内)脚　赤橙　10R6/8 坏　赤褐　10R5/4 良好	赤彩は残存する全外面、脚内面及び残存する坏部底にみられる	北東壁側P4北 中層	1003
		脚径	(10.5)						
		器高	(5.8)						
		最大径	—						
4	須恵器 坏	口径	13.8	ロクロ成形　体部のゆるやかに開く	体部下端回転ヘラケズリ　底部はあきり	白色砂粒やや多 灰　N6/ 良好		カマド前 下層から中層	1001
		底径	9.0						
		器高	3.5						
		最大径	—						
5	須恵器 坏	口径		ロクロ成形　体部のゆるやかに開く	体部下端手持ちヘラケズリ　底部は静止あきり	白色、雲母少砂粒 灰　N6/ 良好		南隅 下層	1005
		底径	(10.4)						
		器高	(2.8)						
		最大径	—						
6	土製品 土玉	高さ	2.5	球形　孔は断面長楕円形状	外）にぶい橙　7.5YR5/3 良好	白色砂粒多		南西壁側 床直上	1006
		最大径	2.7						
		孔径	0.3×0.7			17.2g			

第２節　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物（第79図・図版32）

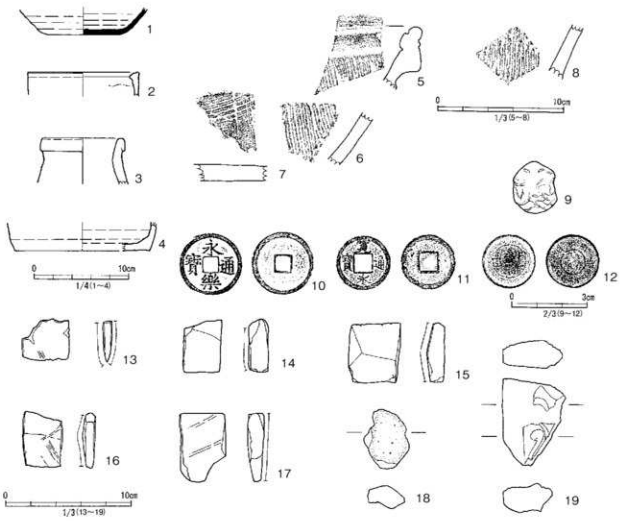
調査区域内のグリッドから出土した遺物は，総数5,100点以上出土している。その中で縄文土器を除くと，土師器4,100点以上，砥石23点，礫82点，陶磁器78点，銭貨3点，鉄類16点，その他90点以上，不明380点以上となっている。本章ではその中の主だったものを図示した。

第79図1は須恵器の坏である。ロクロ整形されている。

2～4は陶器である。2は香炉になるのであろうか。3は復元した形状から茶壷と考えてもいいものであろうか。5～8は擂鉢片である。5～7はそれぞれ口縁，体部，底部片である。7の底部片は内側の擂り目がクロスしている。これらは同一個体と思われる。

9は泥面子である。表面が削られているため，はっきりしないが人の顔などを模した「芥子面（けし めん）」と呼ばれるものであろう。

10～12は銭貨である。10は「永楽通宝」である。径は2.5cmであるが，重量が2.5ｇと通常のものよりは相当軽く，模鋳銭の可能性があると思われる。11は「寛永通宝」である。書体からみて新寛永である。12は「５円黄銅貨」である。昭和24年製造であることは，裏面に表記されていた。この硬貨は昭和23年と24



第79図　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物

年の2ヵ年のみ生産されている。24年製は１億７千９百万枚あまり製造されたが，昭和24年には新たに穴あき５円黄銅貨の製造が開始され，以後，この種の穴なしの５円黄銅貨は製造されていない。現在通貨として有効な貨幣である。

13は板状の石の両面を石斧状に磨いたものである。石斧とは考えにくく，ここで紹介するにとどめることとした。

砥石は遺跡全体で26点出土しており，3点は竪穴住居跡内部からの出土であったが，それ以外の23点の砥石はグリッド出土のものである。竪穴住居跡と同様の時期を想定することも可能かもしれないが，時期不明としてここで紹介する。その内の4点を図示する。

18は軽石であるが，竪穴住居跡で出土している遺物も多数みられたが，一応時期不明としてここで扱う。

19は石造物の破片と考えられる。表面の一部に浮き彫りされた模様の一端が残るが図柄は不明である。

参考文献

江戸遺跡研究会　　2001　「図説　江戸考古学研究事典」
日本貨幣商協同組合　1984　「日本貨幣型録　1984年版」
瀧澤武雄・西脇康　　1999　「日本史小百科　〈貨幣〉」

第43表　奈良・平安時代以降のグリッド出土遺物観察表　　（　　）復元値　（　　）現存値

No	器種	計測値（cm）		器形の特徴	整形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	出土位置	整理No
1	須恵器 坏	口径	—	口縁欠損 体部は底部より緩やかに立ち上がり大きく開く	ロクロ成形後,回転糸きり後,底部に回転ヘラケズリ	白色小砂粒 反 N6/ 良好	L17	G006
		底径	（7.4）					
		器高	（2.9）					
		—	—					

遺物No	種別	器種	部位	文様の特徴	胎土	色調		焼成	出土位置	整理No
2	陶器	香炉か	口縁	外面及び内面口縁直下まで釉		浅黄橙	10YR8/4	良好	M9	122
3	陶器	茶壷か	口縁			暗灰黄	5RP3/1	良好	I21	120
4	陶器	壷	底部	内外に淡黄（7.5YR8/3）の釉		灰白	7.5Y8/2	良好	I17	121
5	陶器	擂鉢	口縁	4本単位か	白色砂粒	外）暗赤褐 内）赤	7.5R3/3 7.5R4/6	良好	M18	123
6	陶器	擂鉢	体部	4本単位か	白色砂粒	外）暗赤褐 内）赤	7.5R3/3 7.5R4/6	良好	G20	124
7	陶器	擂鉢	底部	底部回転ヘラケズリ 6本単位	白色大砂粒	外）暗赤褐 内）に ぶい赤褐	7.5R3/2 7.5R5/3	良好	K14	125
8	陶器	擂鉢	体部	7本単位か	白色砂粒	外）赤 内）赤	7.5R4/6 10R5/6	良好	J15	126
9	土製品	泥面子		表面の中央が剥離,顔であろう 芥子面		橙	5YR7/6	良好	I21	127
10	銭貨	永楽通宝		重量 2.5g					表採	139
11	銭貨	寛永通宝		新寛永 重量 1.6g					N13	140
12	銭貨	5円銅貨		昭和24年製造 表 国会議事堂 裏 ハトか 重量 3.7g	黄銅				表採	141
13	石器	石斧か		縦 3.2 横 3.9 厚さ 0.8 重量 12.0g					表採	132
14	石製品	砥石		縦 4.2 横 3.2 厚さ 1.6 重量 34.2g					L22	130
15	石製品	砥石		縦 4.7 横 4.2 厚さ 1.4 重量 40.2g					J20	131
16	石製品	砥石		縦 4.4 横 3.2 厚さ 1.0 重量 17.9g					表採	129
17	石製品	砥石		縦 5.4 横 3.6 厚さ 1.3 重量 36.1g					H22	128
18	軽石			縦 4.7 横 3.6 厚さ <1.7> 重量 3.9g					G22	133
19	石製品	石造物破片		縦 6.8 横 5.1 厚さ 2.3 重量 64.6g					表採	134

第Ⅴ章　まとめ

本章では，今回の調査区域で検出された縄文時代の遺物，古墳時代前期の竪穴住居跡と遺物，古墳時代後期の竪穴住居跡と遺物，奈良・平安時代の遺構と遺物，さらに古墳時代の土坑から出土した貝ブロックについての概要をまとめた。

第１節　縄文時代

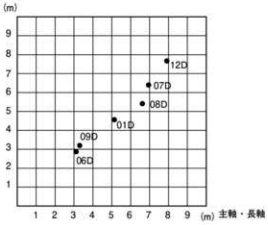
縄文時代では後期に属する土器を中心に出土したが，遺構はいずれの時期に該当するものも検出することはできなかった。縄文土器の出土量はわずかで，大まかにみても調査区域で出土した土器片の内でも３％程度にしかならない。

主な時期は，中期初頭に位置づけられる土器，阿玉台式土器，加曽利Ｅ式土器がわずかにみられた。後期では称名寺式土器が数点出土し，加曽利Ｂ式土器，後期安行式土器がやや多く確認されている。特に加曽利Ｂ式土器が縄文土器の中でも比率は高く，この調査区域における縄文時代の中心の時期になる。晩期においては安行3式土器がわずかにみられる。

第２節　古墳時代

古墳時代前期の竪穴住居跡は6軒，後期は3軒であった。土坑は10基調査されたが，その内の数基から土器が出土しており，古墳時代の所産と想定された。しかし，それ以外は時期の特定はできなかった。これらのうちの2基の土坑から貝ブロックが検出されている。

そのほかに，保存区域で検出された遺構は竪穴住居跡を7軒，土坑を1基確認している。おそらく古墳時代の所産であると考えられる。

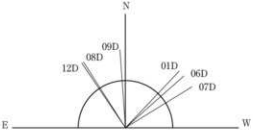


第44表　古墳時代前期竪穴住居跡の規模

古墳時代前期

本期に属する竪穴住居跡の規模（第44表　古墳時代前期竪穴住居跡の規模）は06号住居跡の3.1m×2.86mの小規模な竪穴住居跡から12号住居跡の7.9m×7.64mの比較的大きな竪穴住居跡までほとんど各段階の住居跡が検出されている。サンプル数が少ないこともあるが，規模におけるまとまりはみられない。

竪穴住居跡の形状は，同表を見てもわかるように，対角線上にほとんどが並び，形状がほぼ方形を呈している



第45表　古墳時代前期竪穴住居の方位

ことが解る。ただ，08号住居跡が規模の表の対角線上からやや外れていて，長方形を呈していると判断された。

竪穴住居跡の主軸・長軸の方位（第45表　古墳時代前期竪穴住居跡の方位）についてまとめてみたが，古墳時代前期における方位の特別な有為性はみられない。北西から北東までの約90°の間に分散する。

出土土器について器種別に特徴を概観すると，甕型土器でハケ整形の平底甕は01住1，01住2，09住2，12住1，12住3，12住15，12住16，12住17の8個体が確認できる。同様に，ハケ整形の台付甕は01住3，01住4，06住1，07住2，12住10，12住11，12住12，12住13，12住14の9個体である。これだけの個体では即断できないが，平底甕と台付甕の比率ははぼ同率で出土している。

また，甕の口縁と頸部の特徴では，頸部が屈曲するものは01住1，01住2，01住3，06住1，07住1，07住2，09住1，12住1，12住2，12住4，12住9，12住10，12住11，12住12，12住13，12住14である。甕のほとんどが該当する。緩やかに外反するものは01住4が該当するであろうか。さらに，口縁に刻みのみられるものは01住1，07住1，12住1，12住2，12住4，12住10，12住11の7個体である。

壺型土器の出土量は少ないが，素口縁の壺は07住5，有段口縁の壺は12住19，複合口縁は12住20が確認される。

高坏は坏底部に稜をもつ09住3，12住26の2個体がある。稜を持たないものは06住3，12住27の2個体である。脚の形状では12住26が直線的に開くものであるが，09住3，12住27は「ハ」の字状に開いている。

器台は09住4，09住5，12住29，12住30，12住31の5個体が脚部の径が器受部の径よりも大きく，脚が「ハ」の字状に大きく開いている。01住8も脚部の径が大きいが，脚は直線的に開く。特に12住32は特異な形状を呈している。

古墳時代後期

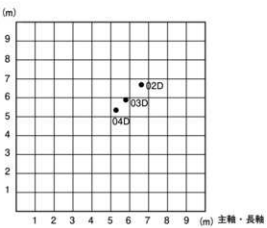
本期に属する竪穴住居跡の規模（第46表　古墳時代後期竪穴住居跡の規模）は04号住居跡が5.29m×5.36mの規模の竪穴住居跡から02号住居跡の6.6m×6.7mの竪穴住居跡までの範囲にまとまっている。

竪穴住居跡の形状は，第46表で対角線上にほとんど並び，ほぼ方形を呈している。

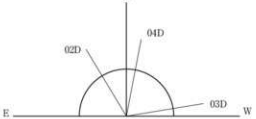
竪穴住居跡の主軸・長軸の方位（第47表　古墳時代後期竪穴住居跡の方位）についてまとめたが，北西から東北東までの約110°の間にある。

出土土器ではこの時期の特徴的な坏をまとめると，02住6，03住3，03住4，03住5，04住10が該当する。グリッド出土遺物でも11，12，13，14，15，21（第69図）が出土している。

いずれも中期の和泉期の系譜をもつ坏とみられる。古墳時代後期でも古手であり，5世紀後葉から6世紀初頭までに位置付けられるであろう。



第46表　古墳時代後期竪穴住居跡の規模

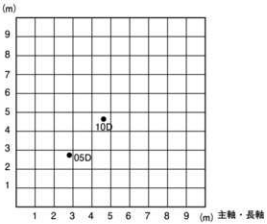


第47表　古墳時代後期竪穴住居の方位

第３節　奈良・平安時代

奈良・平安時代の竪穴住居跡は規模で05号住居跡の2.9m×2.73mの小型の竪穴住居跡と10号住居跡の4.62m×4.64mの中型の竪穴住居跡の2軒が検出された（第48表　奈良・平安時代竪穴住居跡の規模）。形状はいずれも方形を呈している。

竪穴住居跡の主軸・長軸の方位（第49表　奈良・平安時代竪穴住居跡の方位）は，北北西から東北までの約50°の開きがある。

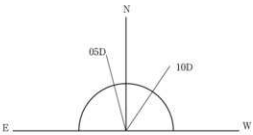


第48表　奈良・平安時代竪穴住居跡の規模

第４節　土坑出土の貝

貝ブロックの採取方法

調査時において，05号土坑と08号土坑から貝ブロックが検出された。発掘調査時における貝ブロックの採取は出土量もそれほど多量でもなく，現地において検討を加えながら採取や調査方法を検討する時間的な余裕もなかったため，全量を一括して採取することにした。



第49表　奈良・平安時代竪穴住居の方位

貝ブロック中に土器が混入していることは当初よりわかっていたが，貝をできるだけ破壊しないように採取する必要から，貝ブロック中の一括として扱うことにした。また，微細遺物を採取する必要から土砂も一緒に採取している。土のう袋等に採取された貝ブロックはテン箱で10箱ほどになった。

貝の整理方法

調査時より，長い年月が経ってからの整理作業であったため，当時採取地点を分別するために付けられていた荷札が朽ち果ててしまい，05号土坑出土の貝ブロックか，08号土坑出土のものなのか判別できなくなってしまっていた。そのため，やむなく全体をひとつの資料として分類・分析をせざるを得なかった。

整理方法は，採取された貝の大きなものは分類して取り分け，残った貝の含まれている土砂を「ふるい」にかけて貝や土器などを分類した。「ふるい」は6mm，3mm，1.5mm，1mmの各段階のものを用いて，微細遺物の採取に努めた。

採取された貝ブロック中の遺物

ふるいの分別作業により，採取された遺物は以下のとおりであった。

貝類　二枚貝綱

マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
		アサリ	*Ruditapes philippinarum*
		オキシジミ	*Cyclina sinensis*
	バカガイ科	シオフキガイ	*Mactra quadrangularis Deshayes*
	フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	*Trapezium liratum*

フネガイ目	フネガイ科	サルボウ	*Scapharca kagoshimensis*
ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
腹足綱			
中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	*Batillaria multiformis*
	タマガイ科	ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
	タニシ科	オオタニシ	*Cipangopaludina japonica*
原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	*Umbonium moniliferum*
		ダンベイキサゴ	*Umbonium giganteum*

土器　土師器

須恵器

土製品　土玉

その他　軽石（火熱を受けている）

以上が分別できたすべてであり，動物の骨，魚骨などの微細破片は全く検出されなかった。

サンプルを採取した調査時にはあまり気が付かなかったが，遺物と土とをふるい分けている中で，灰が多量に混入していることが確認された。また，土師器の多くは火熱を受けているようであるが，同時に白い付着物が付いていることが確認されている。

※貝の学名は最近の研究で見直しされたり，研究者によって異なる学名が用いられている。場合によっては同じ研究者でもちがう学名が用いられることがあり，ここでは「改定新版世界文化生物大図鑑貝類」にもとづき表記した。

※イボキサゴはキサゴとの差異が明瞭ではなかったが，縫合の果粒からイボキサゴと判断した。

採取された貝の内容と特徴

貝ブロックから12種類の貝類が確認できた。また，洗浄後の貝殻の全重量は41.677kgに達した。

ハマグリは出土した全貝殻の中で最も検出量が多い。重量では33.973kgとなり，貝殻総量の比率で81.52％になる。個体数では1,518個体，比率では73.40％を占めている。ハマグリの殻長は2.1cmから10.0cmと大きな幅がみられる。殻長が3.6cm～4.0cm，4.1cm～4.5cmに含まれる個体数が左右殻いずれでも20％前後の構成比を有し，この範囲に含まれる個体がハマグリ全体の40％ほどを占めていた。

シオフキガイの重量は4.063kgで貝殻総量の重量比9.75％になる。個体数は318個体で個体数比15.38％を占める。殻長の大きさでは2.1cmから6.0cmの幅があり，4.1cm～4.5cmの大きさが左殻の個体数で40％を占めている。

アサリの重量は0.64kgで貝殻総量の重量比で1.54％になった。個体数は79個体あり，個体数比で3.82％であった。大きさでは殻長が3.1cmから5.0cmのものが検出されている。3.6cm～4.0cmのものが最も多く検出されている。

以上の3種以外のオキシジミほかの貝種は重量比で1％に満たない量しか検出されていない。

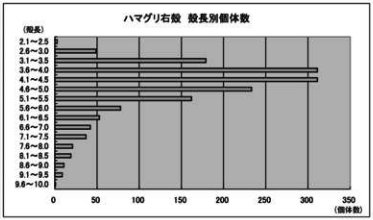
ハマグリの中には貝殻の中央に人為的に穿孔されたとみられるものが検出されている。7点が確認された。右殻では殻長7.1cm～7.5cmの大きさのものが1点，左殻では殻長5.1cm～5.5cm，6.6cm～7.0cm，8.6cm～9.0cmで各1点，殻長7.1cm～7.5cmの大きさのものが3点に穿孔されていた。

また，ハマグリの中には左右殻が合わさった状態で検出されたものが7個体あった。殻長で2.1cm～2.5cmが1個体，3.6cm～4.0cmが2個体，4.1cm～4.5cmが1個体，4.6cm～5.0cmが1個体，5.1cm～5.5cmが2個体確認され

第50表　貝の大きさ別個体数(1)

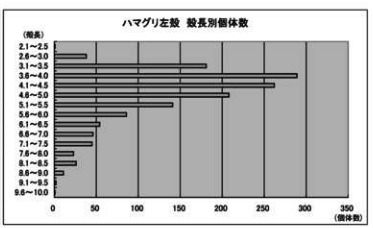
ハマグリ　右殻

殻長	個数	比率(%)	重量(g)
9.6～10.0	1	0.07	45.0
9.1～9.5	9	0.59	402.8
8.6～9.0	11	0.72	457.4
8.1～8.5	19	1.25	640.0
7.6～8.0	21	1.38	602.2
7.1～7.5	37	2.44	879.9
6.6～7.0	42	2.76	745.3
6.1～6.5	53	3.49	762.9
5.6～6.0	78	5.13	843.4
5.1～5.5	162	10.66	1,367.4
4.6～5.0	233	15.34	1,446.9
4.1～4.5	311	20.47	1,507.7
3.6～4.0	311	20.47	1,138.5
3.1～3.5	179	11.78	478.8
2.6～3.0	49	3.23	92.7
2.1～2.5	3	0.20	3.0
右殻破片			2,343.4
合計	1,519	100.0	13,757.3



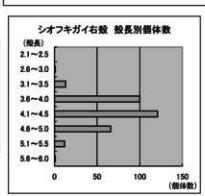
ハマグリ　左殻

殻長	個数	比率(%)	重量(g)
9.6～10.0	1	0.07	53.1
9.1～9.5	2	0.14	77.5
8.6～9.0	11	0.78	446.7
8.1～8.5	26	1.84	848.7
7.6～8.0	23	1.63	618.6
7.1～7.5	45	3.18	1,014.8
6.6～7.0	46	3.25	832.6
6.1～6.5	54	3.82	766.5
5.6～6.0	86	6.08	935.5
5.1～5.5	141	9.97	1,160.1
4.6～5.0	208	14.71	1,293.1
4.1～4.5	262	18.53	1,250.1
3.6～4.0	289	20.44	1,011.8
3.1～3.5	181	12.80	463.9
2.6～3.0	38	2.69	69.3
2.1～2.5	1	0.07	1.2
左殻破片			2,141.8
合計	1,414	100.0	12,985.3



シオフキガイ　右殻

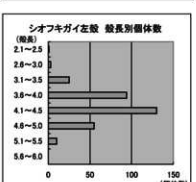
殻長	個数	比率(%)	重量(g)
5.6～6.0	1	0.32	9.3
5.1～5.5	12	3.82	107.9
4.6～5.0	66	21.02	439.2
4.1～4.5	121	38.54	622.1
3.6～4.0	100	31.85	369.5
3.1～3.5	13	4.14	29.2
2.6～3.0	1	0.32	1.0
2.1～2.5	0	0.00	0.0
合計	314	100.0	1578.2



※第32表の重量には右殻・左殻の区別できない破片の重量を含んでいる。ハマグリ 7230.9g　シオフキ 474.7g　アサリ 12.4gの破片があった。

シオフキガイ　左殻

殻長	個数	比率(%)	重量(g)
5.6～6.0	0	0.00	0.0
5.1～5.5	10	3.14	91.3
4.6～5.0	55	17.30	370.8
4.1～4.5	130	40.88	658.1
3.6～4.0	94	29.56	345.5
3.1～3.5	25	7.86	58.7
2.6～3.0	3	0.94	2.9
2.1～2.5	1	0.31	0.6
合計	318	100.0	1527.9



第51表　貝の大きさ別個体数(2)

アサリ　右殻

殻長	個数	重量(g)
4.6～5.0	3	21.1
4.1～4.5	15	84.0
3.6～4.0	38	152.7
3.1～3.5	22	60.1
合計	78	317.9

アサリ　左殻

殻長	個数	重量(g)
4.6～5.0	4	28.5
4.1～4.5	10	47.1
3.6～4.0	56	211.4
3.1～3.5	9	24.7
合計	79	311.7

サルボウ　右殻

殻長	個数	重量(g)
6.1～6.5	1	28.6
5.6～6.0	1	11.3
5.1～5.5	0	0.0
4.6～5.0	1	16.2
4.1～4.5	1	8.3
3.6～4.0	3	15.5
3.1～3.5	3	12.7
2.5～3.0	3	7.1
合計	13	99.7

オキシジミ　右殻

殻長	個数	重量(g)
5.6～6.0	0	0.0
5.1～5.5	1	13.2
4.6～5.0	6	48.4
4.1～4.5	1	7.6
3.6～4.0	1	3.4
合計	9	72.6

オキシジミ　左殻

殻長	個数	重量(g)
5.6～6.0	1	15.6
5.1～5.5	1	13.5
4.6～5.0	5	47.7
4.1～4.5	4	27.8
3.6～4.0	0	0.0
合計	11	104.6

サルボウ　左殻

殻長	個数	重量(g)
6.1～6.5	0	0.0
5.6～6.0	0	0.0
5.1～5.5	0	0.0
4.6～5.0	0	0.0
4.1～4.5	1	9.0
3.6～4.0	5	24.0
3.1～3.5	3	15.1
2.5～3.0	2	6.1
合計	11	54.2

オオタニシ

殻高	個数	重量(g)
2.1～2.5	2	2.0
2.6～3.0	0	0.0
3.1～3.5	0	0.0
3.6～4.0	2	4.5
4.1～4.5	0	0.0
合計	4	6.5

ツメタガイ

殻高	個数	重量(g)
0.6～1.0	2	4.3
1.1～1.5	3	10.3
1.6～2.0	2	9.1
合計	7	23.7

ウミニナ

殻高	個数	重量(g)
1.6～2.0	1	0.1
2.1～2.5	1	1.0
2.6～3.0	5	7.1
3.1～3.5	6	13.4
3.6～4.0	2	4.1
小計	15	25.7
計測不能	69	56.5
計測不能	10	21.0
合計	94	103.2

イボキサゴ

殻高	個数	重量(g)
0.6～1.0	2	1.3
合計	2	1.3

ダンベイキサゴ

殻高	個数	重量(g)
1.1～1.5	1	3.9
合計	1	3.9

ウネナシトマヤガイ

殻長	個数	重量(g)
計測不能	4	0.1以下
合計	4	0.1

マガキ右殻(完形に近いもの)

殻高	個数	重量(g)
5.1～5.5	5	29.6
5.6～6.0	0	0.0
6.1～6.5	2	10.7
6.6～7.0	2	24.2
7.1～7.5	1	9.5
合計	10	74.0

マガキ左殻(完形に近いもの)

殻高	個数	重量(g)
5.1～5.5	0	0.0
5.6～6.0	1	4.7
6.1～6.5	1	16.6
6.6～7.0	0	0.0
7.1～7.5	0	0.0
合計	2	21.3

マガキ右殻(割れたもの)

殻高	個数	重量(g)
1.6～2.0	1	0.7
2.1～2.5	0	0.0
2.6～3.0	2	4.6
3.1～3.5	2	3.1
3.6～4.0	0	0.0
4.1～4.5	2	6.2
合計	7	14.6

マガキ左殻(割れたもの)

殻高	個数	重量(g)
1.6～2.0	0	0.0
2.1～2.5	2	0.0
2.6～3.0	3	1.2
3.1～3.5	3	5.1
3.6～4.0	2	4.2
4.1～4.5	0	3.4
合計	10	13.9

※二枚貝網に属する貝の大きさは殻長を計測することとしたが，マガキについては殻高を計測している。腹足網は殻高を計測することとした。

ている。検出された状態で堅く閉じているものもあり，すでに死んでいたか，利用されなかったからなのだろうか。すべてのハマグリの左右殻が合うかどうかを確認しているわけではないため，総数は不明といわざるを得ない。

参考文献

高花宏行　「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『印旛郡市文化財センター　研究紀要　2」2001

小林清隆　「村田川流域の６～７世紀の土師器の再検討」『千葉県文化財センター　研究紀要　14」1993

小沢　洋　「房総の古墳後期土器　―坏の変遷を中心として―」『東国土器研究」第４号　1995

江坂輝彌　「化石の知識　貝塚の貝」考古学シリーズ９　東京美術　1983

本間三郎　「学研生物図鑑　貝Ⅰ・貝Ⅱ」（株）学習研究社　1990

奥谷喬司　「改定新版　世界文化生物大図鑑　貝類」（株）世界文化社　2004

1　勝田大作遺跡遠景（昭和60年10月撮影）

2　調査区域全景（昭和60年10月撮影）

図版2

1　調査区域近景

2　確認調査状況

3　表土剥ぎ作業状況

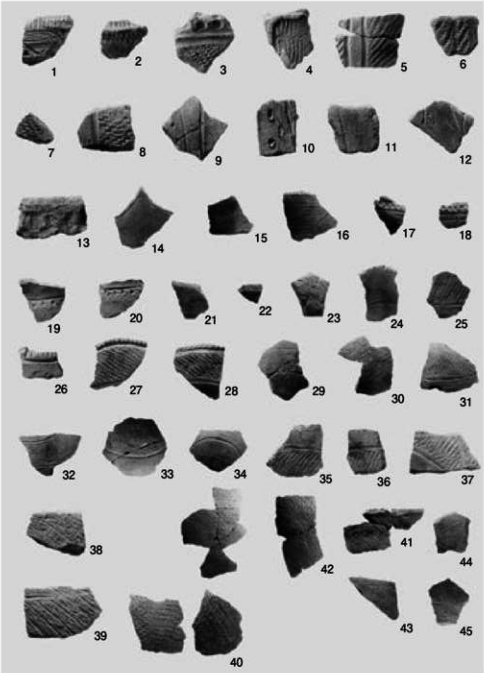
4　遺構調査状況

5　遺構調査状況

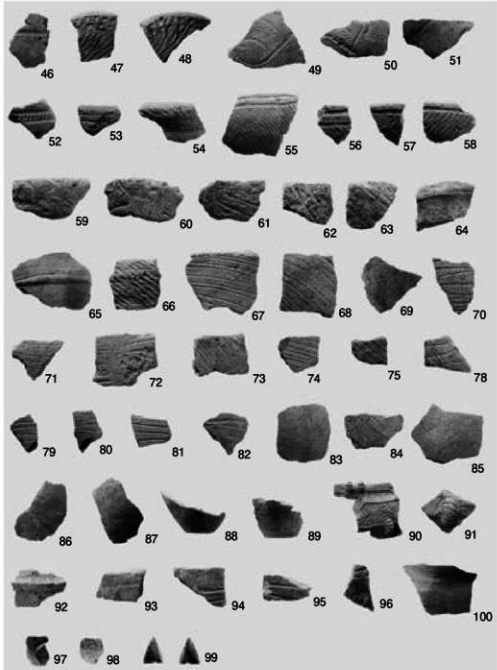
6　遺構調査状況

7　調査区近景

8　調査区全景

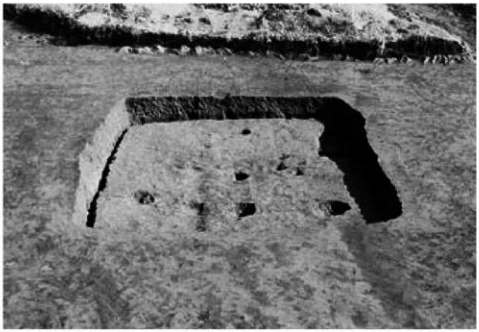


1　縄文土器(1)・(2)

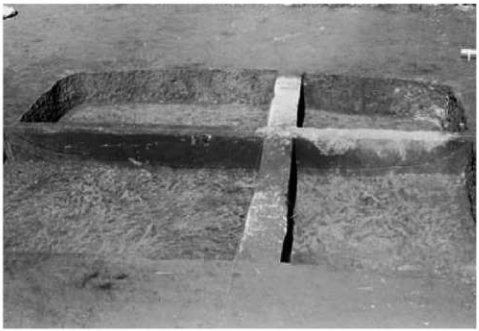


2　縄文土器(3)・(4)縄文時代の石器・弥生土器

図版4



1　01号住居跡

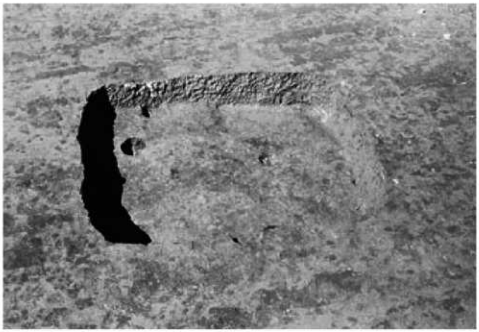


2　01号住居跡土層

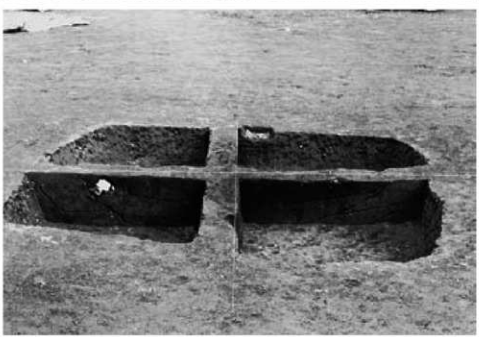
3　01号住居跡遺物出土状況

01号住居跡出土遺物

図版6



1　06号住居跡



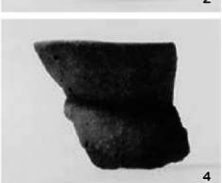
2　06号住居跡土層

06号住居跡出土遺物

1

2

3



4

5

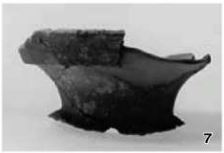
1　07号住居跡

2　07号住居跡土層

3　07号住居跡
東隅遺物出土状況

図版8

07号住居跡出土遺物(1)



07号住居跡出土遺物(2)

16

17

18

19

20

21

22

23

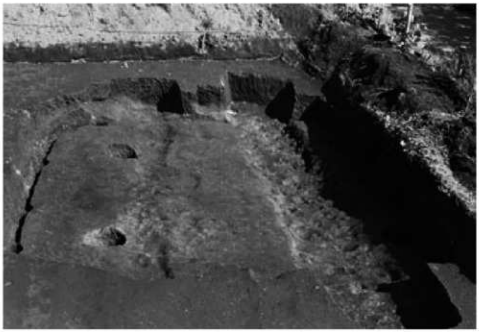
24

25

26

07号住遺物出土状況

図版10

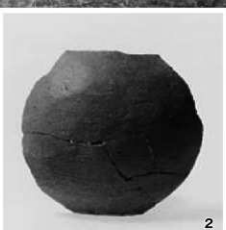


1　08号住居跡

2　08号住居跡土層

08号住居跡出土遺物

1

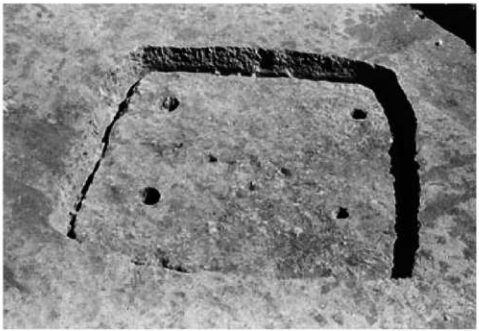


2

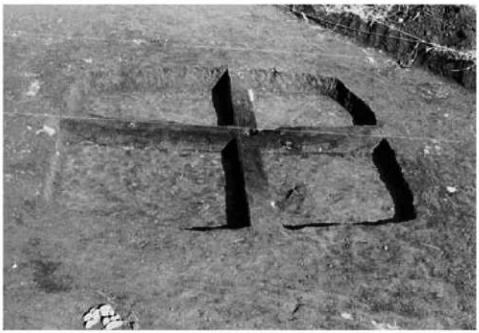
4

3

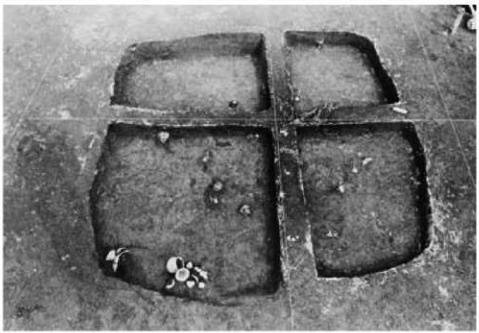
5



1　09号住居跡



2　09号住居跡土層



3　09号住居跡遺物出土状況

北西隅出土状況

09号住居跡出土遺物

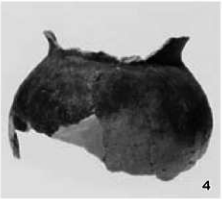
1　12号住居跡

2　12号住居跡土層

3　12号住居跡遺物出土状況

図版14

12号住居跡出土遺物(1)



12号住居跡出土遺物(2)

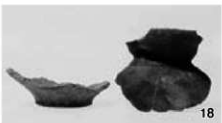
12

13

14

16

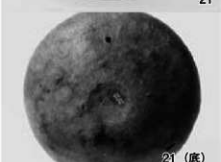
17


18

19

20

21


21（底）

22

25

26

23

24

図版16

12号住居跡出土遺物(3)

27

28

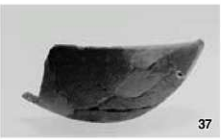
29

30

31

32

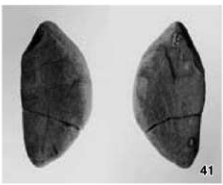
36

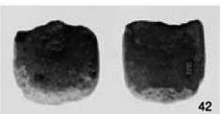

37

38

39

40

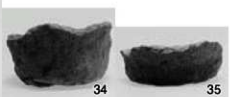

41


42

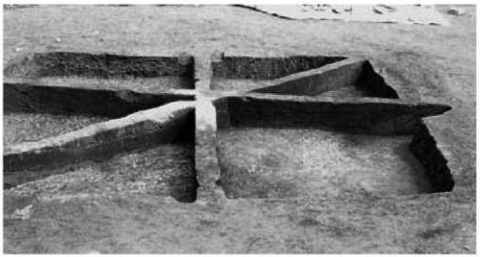
43

44 45 46

33


34 35

1　02号住居跡



2　02号住居跡土層

02号住居跡出土遺物

1

3

4

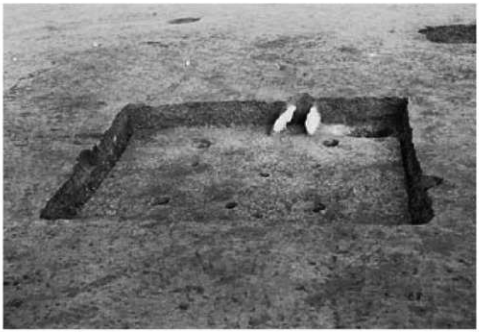
6

2

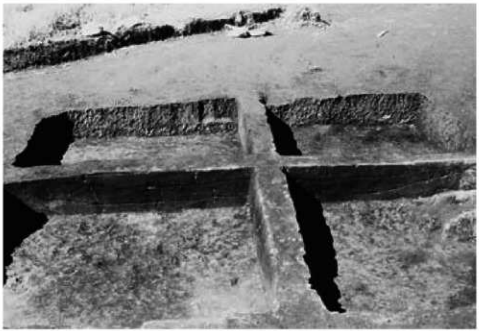
5

7

図版18



1　03号住居跡



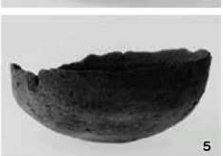
2　03号住居跡土層

3　P7（貯蔵穴）内出土遺物2・5

4　P7（貯蔵穴）内出土遺物1

1　03号住居跡カマド

03号住居跡出土遺物



1　04号住居跡

2　04号住居跡土層

3　04号住居跡北東側
炭化材検出状況

2　カマド内出土遺物

1　04号住居跡カマド

04号住居跡出土遺物

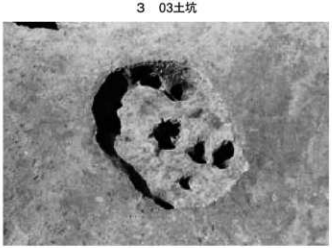
図版22

1　01土坑

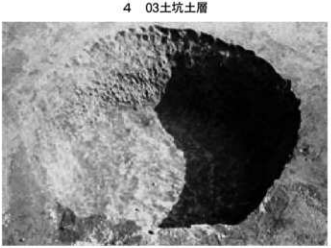
2　01土坑土層

3　03土坑

4　03土坑土層

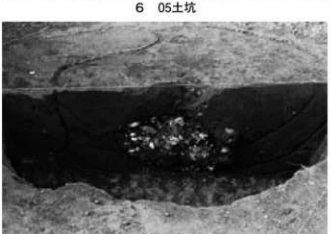


5　04土坑



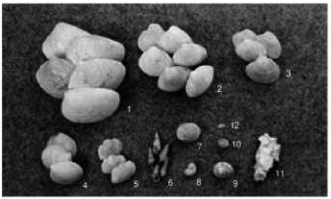
6　05土坑

7　05土坑貝検出状況

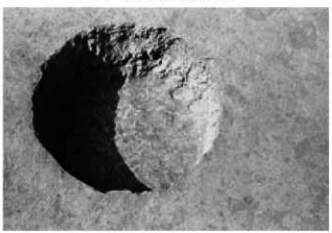


8　05号土坑土層

1　05土坑貝層検出状況

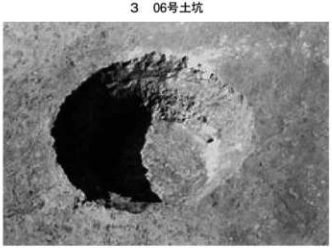


1. ハマグリ　2. シオフキガイ　3. アサリ　4. オキシジミ　5. サルボウ
6. ウミニナ　7. ツメタガイ　8. オオタニシ　9. ダンベイキサゴ
10. キサゴ　11. マガキ　12. ウネナシトマヤガイ



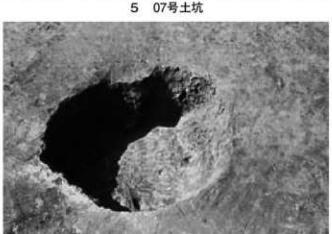
3　06号土坑

4　06号土坑土層



5　07号土坑

6　07号土坑土層



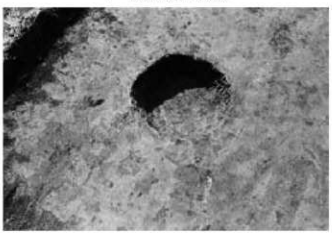
7　08号土坑

8　08号土坑土層

図版24

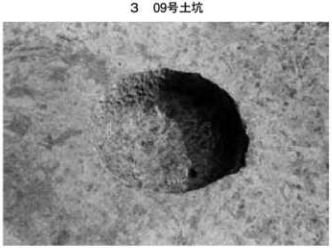
1　08号土坑出土状況

2　08号土坑貝出土状況



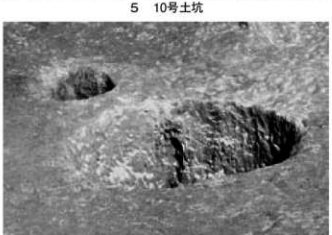
3　09号土坑

4　09号土坑土層

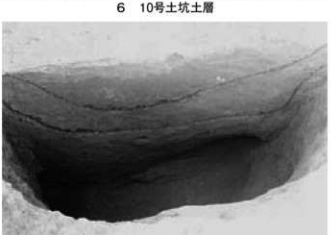


5　10号土坑

6　10号土坑土層



7　11号土坑

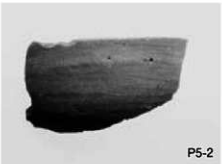


8　11号土坑土層

P4-1

P4-2

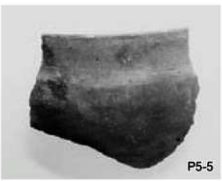
P5-1

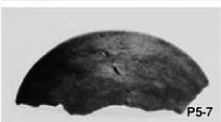

P5-2

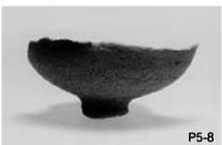
P5-3

P5-4

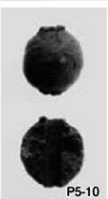
P5-6

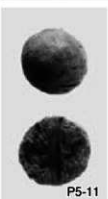

P5-5

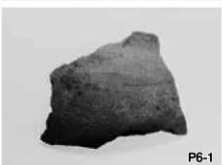

P5-7


P5-8

P5-9


P5-10


P5-11


P6-1

P7-1

P8-1

P8-2

P8-5

P8-6

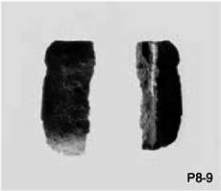
土坑出土遺物(2)

P8-3

P8-4

P8-8

P8-7


P8-9

古墳時代のグリッド出土遺物(1)

1

2

3

3(底)

4

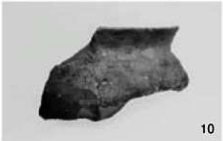
5

6

7

8

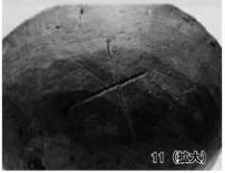
9


10

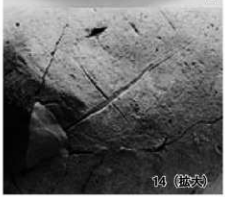
11

12

14


11（縮尺）

13


14（縮尺）

15

16

17

18

19

20

21

24

22

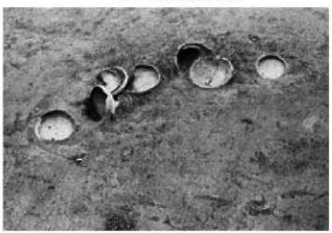
23

26

25

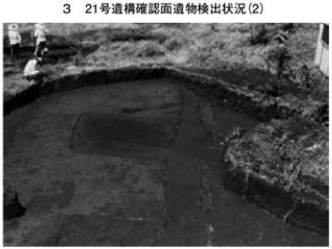
1　21・22号遺構検出状況

2　21号遺構確認面遺物検出状況(1)

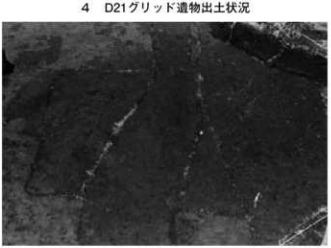


3　21号遺構確認面遺物検出状況(2)

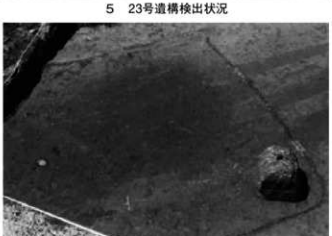
4　D21グリッド遺物出土状況



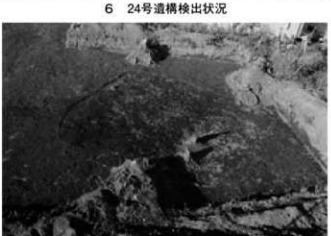
5　23号遺構検出状況



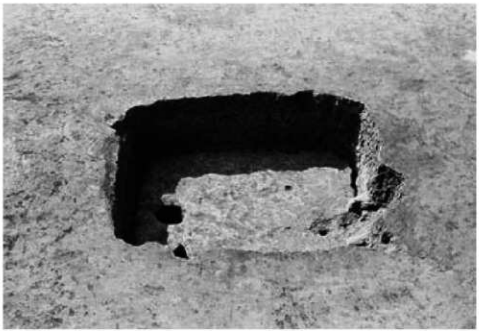
6　24号遺構検出状況



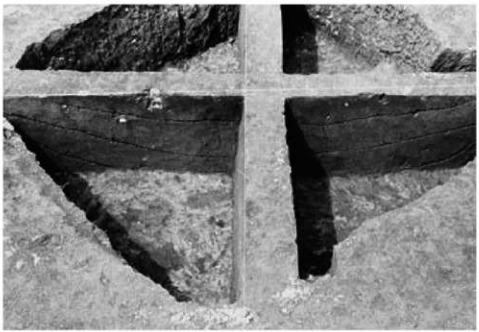
7　25号遺構検出状況



8　26号遺構検出状況



1　05号住居跡



2　05号住居跡土層

05号住居跡出土遺物

3　05号住居跡カマド

1

2

3

図版30

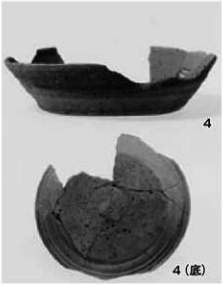
1　10号住居跡

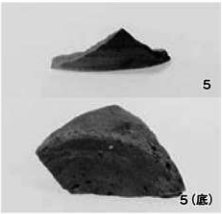
2　10号住居跡土層

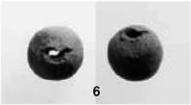
3　10号住居跡カマド

1　10号住居跡出土状況

10号住居跡出土遺物



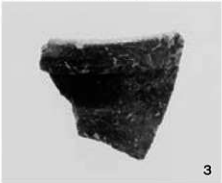




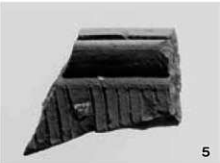
調査風景

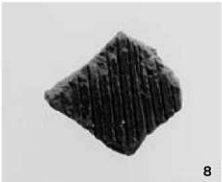
1

2

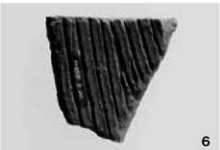

3

4


5


8

7

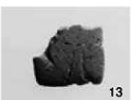

6

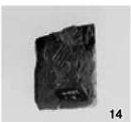
9

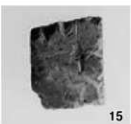
10

11

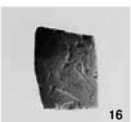
12


13

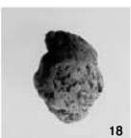

14


15

19


16

17


18

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし　かつただいさくいせき
書名	千葉県八千代市　勝田大作遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138－2　TEL 047(483)1151　内6114
発行年月日	西暦　2007年（平成19年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
かつただいさく 勝田大作遺跡	やちよし かつただいさく 八千代市勝田字大作 622－2ほか	12221	254	35度 42分 09秒	140度 07分 42秒	確認調査 19850801～ 19850824 本調査 19850826～ 19851026	確認調査 900 ㎡／ 6,168.02 ㎡ 本調査 2,900 ㎡／ 6,168.02 ㎡ 現状保存 3,268 ㎡	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かつただいさく 勝田大作遺跡	集落跡	古墳時代	古墳時代 前期　竪穴住居跡　6軒 後期　竪穴住居跡　3軒 土坑　10基 現状保存 竪穴住居跡　7軒 土坑　1基 奈良・平安時代 竪穴住居跡　2軒 中近世　溝状遺構　6条	縄文土器 中期 中期初頭・阿玉台・加曽利E 後期 堀ノ内・称名寺・加曽利B 安行 晩期 安行 石鏃 弥生土器　後期 古墳時代 前期　土師器 後期　土師器 貝ブロック 砥石 奈良・平安時代 土師器・須恵器 中近世 陶磁器・擂鉢 永楽通宝 寛永通宝 ５円黄銅貨	古墳時代前期・後期を中心とした集落跡

千葉県八千代市

勝田大作遺跡

— 埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成19年3月31日発行

編　集　八千代市遺跡調査会
八千代市教育委員会社会教育課内
発　行　八千代市遺跡調査会
八千代市教育委員会社会教育課内
千葉県八千代市大和田138－2
印　刷　金子印刷企画
千葉県八千代市萱田410－1